
ネコと勇者と魔物の事情

結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネコと勇者と魔物の事情

【Nコード】

N4276H

【作者名】

結晶

【あらすじ】

魔王を倒すべく立ち上がった（はずの）勇者は剣の腕も魔法もかきしなへタレ。敵である魔物にまで「このへタレ！！」と言われるほど。うっかり撤退しそびれて、魔物と一対一で残されてしまった勇者は…！

「魔王を倒して世界を救う」王道ファンタジー、コメディ風味ややシリアス和え。ご意見、ご感想など頂けると嬉しいです。

更新再開しました

週イチの定期更新を目指しております！

登場人物紹介 (前書き)

早速試してみます。

登場人物紹介

随時更新予定です。

挿絵付きはこちらのページで…

[http://mogeland.at.webry.in
fo/201001/article13.html](http://mogeland.at.webry.in
fo/201001/article13.html)
ブログページにジャンプします。

人間側

スノウ・シュネー

ヘタレで勇者な主人公。

元は白金に青い目の18歳の青年。
ブラチナフロンテ

現在は白ネコ。

昔は色々万能だったらしいが、今は泣き虫のヘタレ。
魔物にとっ捕まって捕虜生活満喫中。

メリル・ファガード

勇者の仲間。

金髪に緑の目をしたきれいなお姉さん。

正義感溢れる真面目な22歳。

魔法剣士だが、どちらかというと剣が得意。

フレイ・マルセナ

勇者の仲間。

栗色の髪と栗色の目をした、あどけない少年。

正義感溢れまくってる12歳。

弓の腕は誰にも負けない。

魔物側

エル・バルト

勇者一行が乗り込んだ城の主。

赤い髪と赤い目、皮膜の翼を持つ「上級貴族」な魔物。

見た目年齢10代後半〜20代前半。

豪快な性格でネコ好き。

アイシャ・ヴォルグ

エルの側近。

藍色の髪と金色の目をした「下級貴族」な魔物。

見た目年齢、10代後半〜20代前半。

ネコ嫌いの人間嫌い。すぐ熱くなる性格。面倒見は良い方。

スイ・キール

エルの側近。

水色の髪と金色の目をした「下級貴族」な魔物。

見た目年齢、10代後半〜20代前半。

ネコ嫌いの人間嫌い。超冷静。毒舌。

ヴァスーラ・バルト

エルの兄。

金色の髪に赤錆色の目をしたちよい悪兄ちゃん風。

見た目年齢は20代半ばから後半あたり。

エルと同じく皮膜の翼を持つ。

0 プロローグ(前書き)

初投稿になります。つたない文章ですが、楽しんでいただけたらな
と思います。よろしくお願いします。

0・プロローグ

「このへタレがっ」

この状況でそんなことを言われたのは、恐らく自分が初めてだろう、とスノウは思う。

鏡のように磨き上げられた漆黒の床。そこに映りこむのは、複雑な装飾を施した太い柱と豪華な天蓋。奇怪な姿の獣、絡み合う鳶、幾何学模様…それらが所狭しと彫りこまれている。

そして、そこに逆さに映り込む4つの人影…否、3人の影とひとつの異形の影。

「失礼な！」

言葉に反応して、憤然と言い放ったのは言われた本人…つまりスノウではなく、その隣に立つ小柄な女性だった。

「お前ごときに何がわかる。この方は偉大な勇者なのだ！」

その誇らしげな台詞にスノウは泣きたくなかった。いや、実際泣いていた。それは彼女の熱弁に感動したわけでも、敬意を払われないことを嘆いているわけでもなく、ただひたすらにこの場から逃れたいが故だった。

「勇者？はっ、冗談も大概にするがいい。そいつのどこが勇者だと言っんだ。女子供の後ろでめそめそ泣いてる男の、どこが…！」

炎を吐く勢いで憤りもあらわに糾弾するのは、スノウの目の前、幾

分距離をとった先にたたずむ細い影だった。

燃え立つ緋色の髪に真紅の双眸。整った容貌はどちらかといえば中性的で、その両眼に宿る鋭い輝きさえなければ「女性」と表現しても差し支えないほどのものだった。漆黒の長い衣に包まれた体も決して体格的に恵まれているとは言いがたく、その手にしている大剣の方がよほど頑強に見えた。

だが、その背に広がるのは紛れもない皮膜の翼。力ある、強大な魔物の証だ。

そう、スノウはその魔物と対峙している。

正確には、スノウと彼を「勇者」と仰ぐ二人の連れが。

故郷を離れ「勇者」としてあまたの苦難を乗り越え、やっとの思いで魔物の住まう地に足を踏み入れた。

敵地での戦いは熾烈を極め、大勢いた仲間は今頃次々と斃れ…魔物の長の居城に踏み込んだときにはたったの3人になっていた。

スノウと剣士のメリル、そして今年12歳になったばかりのフレイ。

「僕は子供じゃないっ」

フレイが細い腕に弓を番えたまま、勇ましく言った。その様だけみればフレイの方がよほど勇者だったろう。だが残念なことに、彼は12歳の少年でしかなかった。構えた弓は頑丈ながらも彼の身長に合わせた小振りなものであったし、幼さを多分に残す面立ちで敵を見据えても　なんとというか「可愛らしい」としか表現しようがなかった。

「おお、怖。勇ましいなぼうず」

魔物は小馬鹿にするように笑い、剣を持たない方の手を空中に伸べ

た。

漆黒の長い爪が空間をすつと薙いだ。

パキン

何ともあっけない音を発して地面に転がったのは、フレイの手にしていた弓であった。キレイな切断面を見せて、頑丈な木で作られた筈の弓が二つの木切れと化していた。

「…っ」

「お前たちのママゴトにつきあってやる時間はない。…しかし、この程度のく勇者くしかおらぬとはな…どうやら我らの勝利も近いようだ」

くつくつと笑って、魔物の指が宙を滑る。

「っ、勇者さま、フレイっ」

次に仕掛けられるのは、間違はなく致命傷になる。

それを感じ取ったメルルが、叫びざま胸元から何かを引き抜いた。細い鎖につながれた、白色の石。

「退け魔物！炎の牙、闇の龍よ！」

途端に何の変哲もない白い石が、眩いばかりの輝きを放った。漆黒の空間が白一色に染め上げられる。

「っっ！」

魔物が顔を覆い、ふらりとよるめいた。手にしていた剣が硬質な音をたてて床に転がる。

「今です！急いでっ」

メリルの足元に黄金色に輝く魔方阵サイクルが浮かび上がる。フレイが慌てて陣の中へと駆け寄る。

意図に気付いた魔物が、顔を覆う手はそのままに、空いた方の手を差し伸べて不可視の力を揮おうとする。

スノウは半ば呆然とその光景を見ていた。

魔物の指の間から覗く赤い瞳から、なぜか目が離せない。

「転移っ」

メリルの叫びに呼応するように、魔方阵がひととき輝いた。黄金色の光の柱が天井へと突き抜ける。その輝きの中で人影が徐々に薄れていった。

「…あ」

あまりにもぼんやりしすぎていて。

或いはあまりにも緊張感に欠けていて、気づけばスノウは一人だった。

一人、漆黒の空間に取り残されていた。

目の前には、魔物。

ぼつんと残された「勇者」に、さすがに驚きを隠せないようだ。

「…あれ…?」

それでもどこかのんきに呟いて、スノウは首をかしげた。

内心、とても穏やかではなかったけれど。

そうして、奇妙な物語が幕を開ける。

1・勇者の事情（前書き）

1・勇者の事情

悪、と呼ばれる存在がある。

街を焼き殺戮を繰り返し、世界を破壊する。心と呼べる感情はなく、ひたすらに血と破壊を求める生き物。

人々はそれらを「悪」とみなし「魔物」と名をつけた。

魔物は世界中に存在し、人の世界は常に脅かされていた。そこで人々は、人の世界を守るために「正義」を生み出す。それが、「勇者」と呼ばれる存在。

「勇者はですね、その年で一番優秀な人が選ばれます。各町や村から一人ずつ選任されて、国王陛下の御前で様々なテストを受けて、知力・体力・技量、そして人格ともに優れた人だけが勇者たりえるのです」

「王さまも、これまでの歴代勇者の中で<最も優秀>だってスノウのこと褒めてて…」

「…そうなんだ」

長い説明を延々と聞かされながら、スノウはぽつりと相槌を打った。

「そうなんだ、じゃありません!」

気のない相槌がいけなかったらしい。熱弁を揮っていた相手から、すぐさま厳しい言葉が返ってくる。

「…いや、だつてほら…俺覚えてないし…」

耳をふさぎたい衝動をどうにかこらえ、ぼそぼそとスノウは反論する。

「っ…!なんで覚えてないんですかつ貴方の剣技は多くの人々を魅了して…っあんなに…あんなに素晴らしかったのにつ…」

うつすら涙さえ浮かべてその金色の頭を抱えるのは、やや小柄な女性だ。

すらりとしたしなやかな肢体を少年のような軽装に包み、緩やかに波打つ金髪を高く結びあげている。機能性を重視した衣服はいささか女性らしさには欠けるものの、彼女本来の魅力は少しも損なわれていない。

「…えつと、メリル…？」

スノウは軽いめまいを覚えつつ、とりあえず声をかけてみる。メリルのこの手の過剰な讃辞に大分慣れはしたものの、どうにも反応に困ってしまう。これが冗談や皮肉なら対処のしようもあるのだが、いかんせんメリルは本気だ。

「その…気落ちしないで…」

気落ちさせたのは自分に外ならないから、説得力はない。メリルはそんなスノウを見上げて、キレイな顔を悔しそうに歪めた。

「そうだよ、スノウはすごく強かったんだから！ほんとに覚えてないの？」

困惑気味に首をかしげてスノウに問いかけたのは、栗色の髪、栗色の瞳の少年だ。

今年12歳になったばかりの彼は、容貌の中にあどけなさを過分に残している。瞳の中にはスノウへの紛れもない憧れが見て取れた。

「…ええと、申し訳ないけど…全く…ごめんね、フレイ」

憧れの眼差しにはさすがに罪悪感が沸いてくる。

謝罪するとフレイは慌ててふるふると首を振った。

「うつん、スノウが悪いんじゃないもの。それに、スノウはスノウだよ。勇者さまだもん」

心からの言葉だと分かるだけに、スノウは辛かった。彼らの記憶にある勇者と今の自分が…似ても似つかないからだ。

「私だつて…わかってるんです。覚えてらっしゃらないのは、何も勇者さまのせいではないってことくらい…」

肩を落として溜息をつく女性　メリル。

おそらく彼女は「勇者さま」が好きだったのだろう。尊敬や憧憬は含まれていたかもしれないが、そこには恋慕もあったように思えた。すなわち恋心が。

そどこか他人事のように感じながら、スノウも嘆息する。

「ごめんね、メリル」

確かに自分とて好きで「こうなった」わけではない。けれども真っ直ぐに好意を向けてくれる二人には、どうにもすまない気持ち先が先に立つ。

遡ることひと月ほど前。

国民の期待を一身に背負った勇者がいた。

陽に透ける白金の髪、青い双眸の凛々しい青年。フラチナフロンテ

国中の勇者を集めてのトーナメントで優勝を果たし、この年の「勇者」に任命された。彼は歴代勇者の中でも飛びぬけた実力を誇り、勇敢で人望も厚く、勇者として申し分のない人物であった。勇者となった彼は、仲間を募り情報を集めて、着実に魔王の拠点を制圧していった。

その中のひとつに「カデイス」という国境付近の街があった。

街は幾度となく魔物による襲撃を受けていたが、どれほど迅速に軍が駆けつけても魔物の一匹たりとも仕留めることはできなかった。町外れの深い森に魔物の根城があるという噂があり、恐らく魔物を統治している「長」が存在するに違いない、と踏んで勇者は仲間を引き連れてカデイスに向かった。

勇者の行方が分からなくなったのは、そんな時だった。

ほどなくして勇者は発見されたが、彼は様変わりしていた。

外見が、ではない。その中身が以前の彼とは大きく違ったのだ。

勇者は記憶を失っていた。

自分の責務はおろか、故郷や己の名前すら忘れていた。彼の18年間の人生、そのすべてがきれいに拭い去られていた。魔物の仕業に違いない、と人々は口にした。けれど当の勇者自身にその記憶がないためにどうすることもできなかった。

「だからって皆ひどい。」

当時　ひと月ほど前の出来事を思い出してか、フレイが憤慨して言う。

「そりゃあ、いろいろ変わったちゃったけど…みんな“苦難の時こそ助け合うべきだ”って言うってたのに…なのに逃げ出して」

勇猛果敢で、凛々しい勇者。

その彼が記憶を失って戻ってくると、人々は次第に勇者のもとから去っていった。

ある者は故郷に戻り、ある者は独自で魔物討伐に行った。そうして最後に勇者のもとに残ったのは、ただの2人だけ。

「…まあ、しかたないよね」

スノウは軽く肩を竦めて嘆息する。

人々が称え、崇拝した勇者はどこにもいないのだ。いるのは記憶を失った、ただの凡庸な青年。

自分だったら勿論そんな勇者についていく気になどなれない。

うんうんと一人頷いて納得していると、即座にフレイから反論が返ってくる。

「仕方ないことないよ！皆ひどい！なんで怒らないのっ」

「…なんでって…」

確かに由々しき事態だろう。正義感にあふれる者なら、怒りを覚えるのも頷ける。けれど、それが他ならぬ自分のこととなれば。

「…やっぱり仕方ないんじゃないかな…」

記憶喪失になってしまった自分と、一時行方知れずになった栄光ある勇者。

記憶を失くした当初、それがイコールで結びつこうなどとは思ってもよらなかった。

けれど所持品や周囲の人々の反応が、それが疑いようもない現実だということを知ってくれた。

何度もこれは夢だと考えた。記憶はなくとも、この自分が「勇者」

という大それた肩書きを持てるはずもない。血が苦手で動物が苦手です。 どうしようもない小心者だということは、このひと月で学んだ。

そんな自分が魔物を、ひいては魔王を倒す勇者とは到底信じられない。きつとからかわれているか、何かの間違いに違いない。

そう幾度も周囲に説明をしたが、そのたびに憐れんだ眼差しが返ってくるだけだった。

記憶を失い別人も同然となった勇者。面影もほとんどないとしたら、そんな相手と共に戦う気にはならないだろう、とスノウは思う。

だからスノウの元を去っていくことも理解できたし、咎める気など毛頭なかった。

スノウにとって難解だったのは、こんな状況下でもスノウを慕う2人の方であった。

記憶を失う前のスノウに、いったいどれだけの想いがあったのか。以前とのギャップは激しいはずなのに、なぜまだ傍にいてくれるのだろうか。

「そんなことないよ！ね、メリルっ」

フレイが勢い込んでメリルに同意を求め。求められたメリルはややためらう素振りを見せて、曖昧にほほ笑んだ。

メリルには状況がよく見えている。

彼女が盲目的に傍に残っているわけではないということ。それはスノウにもわかっていた。純粹に心酔しているフレイと違い、メリルは判別のつく大人の女性だ。スノウが勇者として役に立たないこと、状況は悪くなる一方だということはわかってはいるはずである。それなのに、どうして？

「ああ…ほら、それよりフレイ。」

メリルの反応に釈然としない表情のフレイの肩を軽く叩き、スノウは注意を促した。

「あれが噂の巣窟みたいだよ。」

指さす先には、地面を突き破って現れたかのような、鋭く巨大な岩山がある。

尖端には漆黒の鳥が群れて飛び、城の下方は鬱蒼とした森に覆われてよくわからないものの、何やら獣じみた鳴き声が聞こえてくる。それが「城」であると認識できるのは、ごく限られた人間だけだろう。

確かによく見れば側面に階段のようなくぼみがあるのが判別できるし、窓のような戸口のような穴が幾つも空いていることが確認できる。

けれど、その「城」が聳え立つのは鬱蒼とした森の奥。

いくらそれが森から突き出して目につくとはいえ、その光景があまりにも人の理解の範疇を超えていて「不気味なもの」としか映らない。

恐れるものを注視しない、という人の本能が城を観察するという行為を阻み、結果として「あそこにはなんか不気味な岩山がある」という認識に留まっていた。

…街を襲う魔物が、その不気味な岩山の方角からくることを知っているながらも。

スノウたちは今、その城を目指している。このあたり一帯の魔物を

従えているという魔物の長 高等な魔物がいるという情報があったためだ。

「…うん、魔物いそうだねえ」

スノウが呟く。口調はのんびりとしているが、表情は暗い。できれば魔物なんかいなければいい。勘違いであってほしい。そんな気持ちがありありと顔に出ていた。

「強い奴がいっぱいいるそうだね」

対照的に生き生きとした表情でフレイが言う。

彼は強敵と戦ってみたいのだ。まだ12歳という年齢ながら弓の腕前は一流であり、たいていの獲物は簡単に仕留めてしまう。勿論、魔物も然り。

腕試しがしたい、手ごわい敵と戦ってみたい それは当然の心理だろう。

ひとり、状況をよく把握しているメリルだけは、微妙な表情を浮かべていた。

魔物討伐はしたいが現在の戦闘力としてはきついものがある。…せめて勇者が以前のままであったなら。

そんなメリルの声なき苦悩が伝わってくるようで、スノウの胃がちくりと痛んだ。

「とにかく、ここは気合でのりきりましょう！」

スノウの胃痛に気づいたかどうかは不明だが、メリルが拳を突き上げて力強く言った。

うん、と頷きはしたものの、スノウは一抹の不安を感じる。

気合でのりきれものかな…？

何しろ相手は魔物の長…魔王の足元にも及ばぬとはいえ、そこらを徘徊する魔物とは一線を画す存在なのだ。

「大丈夫かな、3人だけで…」

ぼつりと漏らすと、メリルが明るく笑って言う。

「大丈夫ですよ、私がお護りします」

「雑魚なんて僕が近づけさせないから！」

フレイが誇らしげに弓を掲げて言う。

「…うん、ありがとう」

なんとはなしにほほ笑むと、二人も揃って笑顔を返してきた。

これじゃあ、どっちが勇者かわからないなあ…。

胸の内でこっさり呟いて、スノウは歩き出す。

いざ、魔物の「城」へ。

1・勇者の事情（後書き）

遅筆ですみません…（汗）

次話からようやく話が進みます…

2・残されて

たった3人だけで乗り込んだ魔物の城。

メリルとフレイの活躍で、どうにか「長」たる魔物を引きずり出すことに成功した。この魔物さえ倒せば魔物は瓦解する。そのあとのことは考えていなかった。もしかしたら生きて帰れないかもしれないという気持ちが少ないからあつたのか、誰も「倒した後」を話題にしなかった。

だから、まさか撤退するとは思っていなかった。

当初から腰の引けていたスノウはともかく、「勇者の仲間」という自覚のある2人が撤退することも考慮にいれていたとは…スノウは全く考えてもいなかったのだ。

大人であるメリルがそれを考えなかったはずはない、とこうして漆黒の空間に残された今になればわかる。

自分は、以前の勇者スノウではないのだから。

「あー…と、勇者？」

「…はい」

「お前…俺と一対一で戦うとか…」

「…毛頭ないです…」

首を振る。

「…てえと、何？…逃げそびれたってやつなのか？」

「…て、やつです」

スノウには他にどう答えようもない。そのまま、それが事実なのだから。

重苦しい沈黙が横たわった。

魔物もさすがに絶句しているようだ。それはそうだろう、とスノウは思う。どこの世界に、仲間に置いていかれて逃げそびれ、あまつさえ帯剣すらしていない丸腰の勇者がいるというのだろうか。

コメデイのような、だが洒落にならない事態である。

「…お前、武器は？」

「…ええと、来る途中で折れて…今のところこれだけ」

低く問いかけられて、スノウは恐る恐るポケットから石を取り出す。メリルが持っていたものと同種の白い石だ。ただし、こちらの石は純粋な白ではなく、ところどころに黒の斑が入った…あまり見栄えの良くない代物である。

「魔法石…なるほど、魔法剣士か」

「メリルはね…」

呟いて、スノウはちよつと遠い目をした。

剣士として名高いメリルは、元々魔法の資質が高かったらしい。本来は魔法的な役割を担う人間が必要なのだが、当の魔法担当が逃亡してしまったためメリルに白羽の矢が立ったのだ。そのため、メリルには当人の意志とは関係なく「魔法剣士」の肩書がつくこととなった。

「あの女が…道理でただの剣士にはおかしいと思ったが…」

魔物がつばやく。何がおかしいのかスノウには全く見当がつかない。「で、おまえ、どうするつもりだ？」

どうする？

まさかそんなことを尋ねられるとは思ってもいなかった。

いや、それ以前にこんな事態になることすら、想像していない。

つもりも何も、どうしたらいいのかわからない。

普通の勇者ならば、ここで玉碎覚悟で戦うのだろう。何せ相手は憎き敵。^{マレク}背中をみせておめおめと逃げ帰ることなどできない…普通な

らば。

だが、スノウはそういう意味においては普通ではなかった。

「…帰りたいたんですが」

「…そう簡単に帰すと思ってるのか」

魔物が低く獰猛な声で言った。

ドスのきいた脅し文句に、けれどもスノウは「脅し」と取っついていなかった。首を振った後、

「帰る方法が分からない」

と答えた。

「……………その石、使えば帰れるんじゃないの？」

魔法石は力を増幅させる。大した魔力のないものでも、魔法石の加護さえあれば転移などたやすいことだ。

スノウのあまりにも外した物言いに、思わず助言をして…魔物は憮然とした表情になる。

しかしそんな相手の反応を気に留める風もなく、スノウは再び首を振った。

「困ったことに、魔法のかけ方自体知らないの」

確かに、困ったことである。

再び沈黙が落ちた。

スノウは石を握りしめたまま必死に脳を振り絞る。すなわち、この窮地をくぐり抜ける方法を。

思いつく限りの言葉を脳内で組み立ててみる。さらに石に念じてみる。

何の反応も感じない手のひらに、じつとりと汗をかきつつ、スノウは忙しく頭を巡らせた。

唯一の武器である剣は手元がない。魔法がつかえるならば武器になりえた魔法石も役に立たない。拳一つで魔物と渡り合えるほど肉体派ではなく、かといって頭脳で切り抜けられるほど賢い訳でも話術に自信があるわけでもない。

考えれば考えるほど、「勇者」とは名ばかりの凡庸な 下手をする
と一般男子よりも劣っていきそうな、自分が浮き彫りになってくるだ
けである。

丸腰以外の何物でもない勇者など、魔物にとっては赤子の手をひね
るよりたやすいはずだ。まして、相手は魔物の長と呼ばれる存在な
のだ。

もしかしくなくても、大ピンチかもしれない…。

この期に及んでやっとそこまでの認識が生まれてきた。

青さを通り越して白茶けた顔色で呆然としているスノウに、魔物は
判断つきかねている様子だった。

ややあって、緋色の頭を乱暴にかきむしりながら、魔物が言った。

「お前、俺をどうこうするつもりは？」

どうこうなど全くされそうにもない堂々たる態度で言われ、スノウ
はぼやっとした表情のまま首を振った。

「無理です」

さもあらん。完全な丸腰では、相手が魔物であろうとなかろうと無
理だろう。

「もし、おまえの右手に聖剣があったらどうする？」

「…ここから帰ります」

「ほう、どうやって？俺を倒してか？」

口の端から鋭い牙を覗かせて、魔物が獰猛に笑った。真紅の双眸は
切れそうな光を孕んで輝いている。

「いえ…聖剣でその窓を割って、そのカーテンをロープ代わり
にして下に…」

「………」

「あ…でも無理か…ここ何階ですか？たぶんカーテン足りないから
………」

「…あー…いや、もういい…」

脱力した口調で、魔物がひらひらと手をふった。

「わかった、もういい。まあ…これがウソだってんならそれはそれで面白いしな。」

勇者、おまえ名は？」

皮肉な笑みに口元を歪め、尋ねる。スノウは意味がわからず首をかき上げて、戸惑った表情のまま口を開いた。

「スノウ」

「ふむ、スノウ。お前を助けてやろう。お前は人間にしては面白いし、勇者だからといって殺すのは惜しい。だから、ネコになれ」

「……………は？」

たつぷり5秒の沈黙の後、スノウは間抜けな反応しかできなかった。

…ネコ？ネコっていうと、にゃあって鳴く、あのネコ？村にも割といたけれど…普通の猫でいいんだろうか…でも猫って苦手なんだよなあ、あの何を考えてるかわからない態度が…

あまりのことに思考が追い付かない。ばかみたいなのが脳内をぐるぐる回る。

ひとり、魔物だけが機嫌よく頷いていた。良案を思いついた、というような得意満面です。

3・ネコになる

「…おっしやっっている意味がわからないのですが…」

「…正気ですか？」

激情を押し殺して、不自然に低くなった声で尋ねるのは、二つの人影。

人の形はしているが、その実「人間_{ヒト}」ではない。

よく見れば彼らの耳は人のそれより細く尖っているし、瞳孔も細長い。第一、濃紺や淡い水色の頭髮など人間のもち得る色ではないし、唇の間からたまにちらちらと覗く鋭い牙も、人間にはないものだ。

八重歯つていうレベルじゃないよね、と観察しながらスノウは思う。「狂気の沙汰としか思えません」

濃紺の髪をした人物が吐き捨てるように言った。黒っぽい上下を纏った、一見したところ10代後半の青年風。ヒトではないので実年齢はわからない。

「…アイシャ、口を慎みなさい。無礼ですよ」

落ち着いた声音で諫めたのは、アイシャと呼ばれた青年の隣にたたずむ人影。こちらも人外なので実年齢は不明だが、同じく10代後半の青年に見えた。腰まで届こうかという長い水色の髪を緩く束ね、黒っぽい長衣を纏っている。つま先まで覆う長い衣服は、それだけでやたら重そうだ。

「っ、なら、なぜですか?!なぜここに人間がいるんです!」

びしつと音が聞こえそうな程きびきびした動きで、アイシャが部屋の一角を指さす。

そこには部屋の隅にぽつんと置かれた椅子。

座っているのは、スノウである。

「ああそれは、あいつが城に乗り込んできたからだ」

答えるのは緋色の髪赤い瞳の綺麗な青年。革張りの高級そうな椅子

に腰かけ、重厚な書齋机に頬杖を突いている。そう、つい先ほどまでスノウと対峙していた、皮膜の翼をもつ魔物である。魔物めいた険悪な表情はどこへやら、今はずいぶん機嫌よくにこにことしていた。

「そんなことは知ってます！アレが勇者だということも！私が言いたいのは、その勇者がなぜ、生きてままだここに居るのかということですよ！」

魔物と勇者はいわば天敵である。決して相容れない、戦い殺しあう宿命の存在。その相手がこのように…瀕死な訳でも縛られているわけでもなく、いたって普通に鎮座していたとすれば、その心中や如何。

「殺さなかったからな」

アイシャの心中を知ってか知らずか、赤い魔物は呑気な返答をした。

「…エル様っ！」

とうとう切れてアイシャが怒鳴る。その黄金色の双眸は今にも炎を吹かんばかりだ。その剣幕に大した反応もみせず、エルと呼ばれた赤い魔物は己の頭をわしわしと掻きまわった。

「まあそう怒るな。なんていうのかな…気まぐれだ。」

「気まぐれ…」

いかにも適当な言葉を返されて、火に油かと思いきや、アイシャはそう呟いたまま沈黙した。

「お前たちも知ってるだろうが、アレはちょっと毛色が違ってる」
エルの言う「アレ」が自分のことを指していることは分かっていたから、スノウは思わず身を固くする。彼のセリフから察するに、スノウが戦闘中ほぼ逃げ回っていたという事実は、どうやらこの城の大部分の魔物が知るところであるらしい。
そう気付いて、さすがに情けない気持ちになった。

「せっかくだからアレを猫にしようと思う」

「……」

「……はい？」

たつぷり5秒は間をおいて、アイシャが聞き返した。水色の髪をした青年は、黙って軽く首をかしげている。

やはり同じ魔物とはいえ、エルの発言は理解できないらしい。人間だが同じく全く理解できなかったスノウは、黙って成り行きを見守るしかない。

「…猫、というと…エル様、もしやまだ諦めてらっしやらない？」
水色の髪を揺らして、青年が問う。

「いや、諦めた。お前たちの言うように、確かに猫とは相性が悪いらしい」

「それはそうですよ。猫は我々の気配に敏感ですからね。」

「私たちとしても、なるべくならあの生き物には近寄りたくありませんし」

彼らの口から飛び出す猫談義に、スノウは意外な思いで耳を傾ける。猫は黒に近いものほど魔物に近い、とされているのがスノウの世界の常識であった。だから人々は白に近い色の猫を飼う。聖なる場所と決められたところでは、常に白い猫がいる。

スノウは常々思っていたのだ。黒い猫が魔物に近いなら、猫自体も魔物に近いということになる。ならばなぜ、人々はわざわざ猫を飼うのだらうか、と。

だが、今こうして耳にする限りでは、どうやら魔物は猫を嫌うらしい。さらに魔物の気配に敏感ならば、人々が魔物対策に飼うのも頷けた。

「けれど、諦めたと仰るならなぜですか？あの人間と猫とどう関係が？」

アイシャがもつともなことを口にした。

「猫は俺と相性が悪いだらう？だから本物の猫はダメだ。だが本物

の猫でないなら…」

そこまで言つて、エルはにやりと不敵に笑つた。その言わんとすることを正確に理解した二人の魔物は、さつと顔を強張らせ

「ダメです！」

声を揃えた。

予測の範囲内だったのだろう、エルは余裕の笑みを崩さない。

「なぜ？本物じゃないからお前たちも大丈夫だろう？俺は猫が飼えるし…」

どうやらエルは「猫が飼いたい」らしい。

そして本物の猫は飼えないから、代替案でスノウを飼うことにしたのだ。

スノウはそこまで考えて、微妙な気持になる。

確かにスノウは逆らえない身の上だ。縛られてこそいないが、捕虜のようなものである。しかも命の保証がない。生き延びるには相手の言うままになるしかないのだが。

それにしてもよもや自分が「飼われる」とは。

言葉だけ見るとずいぶんと情けない上に…どこかヤラシイ感じがするのは自分だけだろうか？

そんな緊張感に欠けることをつらつらと思いついているスノウの目の前で、猫を飼うの飼わないのと舌戦は続いている。

「ならばどうしてあの人間なんですか！代わりの猫なら、もっと違う生き物で…」

と、至極もつともなことをアイシャが言った。

「貴方の力なら、龍ドラゴンを猫にすることもできましよう？」

水色の髪青年が、落ち着いた声音で諭す。

その言葉に束の間エルは無言。机からわずかに身を離して、椅子に背を預ける。

「…どうかな、それよりはアレを猫にする方がずっと楽なんだが」

言って、ぼんやりした表情のスノウを指さす。

「無害そうだし」

仮にも勇者が魔物に言われていいセリフではない。

「確かにそうですが、アレはただの人間じゃないんですよ、勇者です！」

「ただの人間と変わらないけどな？魔法使えないしヘタレだし」

「ヘタレでも勇者は勇者ですからね…人間どもが黙ってはいません」

…ものすごく、情けない。

これにはさすがのスノウも軽く落ち込む。軽んじられている、というか完全に馬鹿にされている。しかもそれが間違いでないという自覚がある分、余計辛い。

「知られなければいいだけの話だろう」

…勇者の仲間は逃げたと聞きました。」

スノウの脳裏に、メリルとフレイの顔がよぎる。

2人は今頃どうしているだろう。一瞬、助けがくるだろうかと考えた。

だがその結論が出るより早く、エルの苦笑が聴こえた。

「大方、勇者は死んだと思ってるだろうさ。これだけのヘタレが生き残れると思うか？まあ復讐にくることはあっても、助けには来ないだろうな」

ずばりと胸の内に切り込まれて、スノウは更に落ち込んだ。

彼の言うことは恐らく正しい。

あの状況で、逃げ遅れた勇者スノウが生きているなどと、誰が思うところなのか。スノウ自身、死を覚悟したのだから。

「この程度で勇者だというなら、復讐に来たところで返り打ちにできますけど…本当に本気ですか？」

アイシャが、渋面で尋ねる。

その言葉に頷いて、エルは書斎机の引き出しを漁る。

「本物連れてくるよりはマシだったことで、諦める」

「…どつちがマシかは疑問ですが」

「お前たち猫は苦手なんだろう？」

「猫は嫌いですが人間はもつと嫌いです」

「そうか。でもアレは今から猫になるんだしいいよな」

「人間に変わりはありませんか？」

「ついでに嫌いであることにも変わりない。」

言外の言葉をさらりと流して、エルは「あつた、あつた」と言いながら引出しから何かを引っ張り出した。

そんな魔物たちのやりとりを落ち込んだ気持でききながら、スノウはふと思う。

先ほどから猫にする猫にすると魔物は言っているが、どういう意味だろう。

スノウは比喩的な意味に解釈をしていたが、それにしては彼らの会話がおかしい。龍を猫にする、なんて表現をするだろうか？

龍は龍だろう。龍を飼う、或いはペットにすると言いはしても…

「これでいいな、うん、ちょっとこっち来い」

ぼけつと眺めていた先で、エルが手招きをした。その表情はにこやかで、赤い髪と赤い目でさえなければ、爽やかな好青年にしか見えない。

勿論ご機嫌なのはエルだけである。そのあとに向けられた二対の視線は、殺意すら孕んでスノウを射抜いた。

びりびりと全身を刺す殺気に、思わず泣きそうになる。それでもなんとか堪えて、ゆるゆると腰を浮かせた。

「…まったく、本当にヘタレだな、おまえ」

スノウが今にも泣きそうなことに気付いて、エルが呆れたように溜息をつく。片手を空間に伸べて、小声で何事かを呟いた。

痺れたような感覚がしたのは、一瞬のこと。

何か魔法の類をかけられた、と気づいたのはその直後。

そして、瞬きひとつのあいだに、スノウの目線はだいぶ低くなっていた。

あれ？
思わずそう呟いて、

「じゃあ」

と、声が出た。

「…これはまた」

「よりによって白猫ですか」

二人の魔物がスノウを見下ろしたまま、呆れた口調で言った。

白猫？

どこに？

なんとなく嫌な予感はしていたが、それでもスノウはきよろきよろとあたりを見回した。ずいぶんと目線が下になってしまい、景色が様変わりしている。視界には猫の姿はない。

更に増した嫌な予感に後押しされ、視線を落とした。白いふわふわしたものが目に飛び込んでくる。その先には真っ白な毛で覆われた獣の足 猫科の。

急速に血の気が引いていく。酸欠に陥った脳が思考を放棄し、そのまま意識まで手放そうとしたその時。

「成功だな。我ながらいい出来だ」

満足げな、弾んだ声が出た。目をあげると机の向こうでエルが満面の笑みで手招きしている。

片手には赤いリボン。

その先端で揺れる銀色の鈴を見た瞬間、スノウの脳裏で何かが弾けた。

「わっ」

「!!!」

二人の魔物がさっと脇によける。

その間をすり抜けて書斎机に飛び乗ったのは、白い猫。

「元」がスノウだとは思えない身のこなしで赤いリボンに飛びつく。エルは笑みを崩さないまま、その首根っこを掴むとぶらりと持ち上げた。

「…それ、まんま猫じゃないですか」

アイシャが顔を引きつらせて指摘した。

「いやあにやあと鳴きながら手足をばたばたさせている白い生き物を、嫌そうに見つめる。」

「まあ近いな。猫の本能に勇者の人格が負けたんだろう、ヘタレだから」

あつさりと酷いセリフを吐いて、人差し指を暴れる猫の額にあてた。「起きろ、スノウ」

不思議な響きを込めた言葉に、白猫は束の間固まった。やがてぱちぱちと瞬きをして、「にやあ」と鳴いた。

「…勇者、なんですか？」

水色の髪の青年が、無表情に猫を覗きこむ。

「ああ、中身は人間だ。猫の方は封じたから。」

エルは白猫をそのまま机の上に下ろす。猫は下ろされた格好のままエルを見上げた。

「あ…この警戒のなさは確かに…」

「だろう。ここまで警戒心…というか緊張感のない奴もそうそういないぞ」

エルは取り出した赤いリボンを、白猫の首に巻く。銀色の鈴が軽やかな音を立てて転がるが、それにじゃれつく素振りもない。

「どうだ、本物の猫ではないし、無害だろう？」

「…まあ鈍そうではありますね」

「ただ本能的に猫の姿は嫌悪感がありますけれど…」

二人の渋面に対し、エルは機嫌よく言う。

「そこらへんは慣れる。勝手なことは許さないからな」
しっかりと釘を刺し、エルは白猫を抱き上げる。

猫は 否、自我をとりもどしたスノウは、ばたばたと暴れた。

それは猫が抱かれることを嫌がる、というのとは微妙に違う。魔物が近距離にいる恐怖、自分が猫にされてしまった混乱…そんな訳でスノウの脳内はパニック寸前の状態であった。

「ああそうだ、このことは他言無用だぞ。勇者がいるなんてバレたら頼い輩がでてる」

「そうですね…私たちの胸の内にはまっておきましょう」
ため息をついて、水色の髪の青年が言う。

「けれど…猫についてはどう説明するおつもりですか？」

アイシャの鋭い視線に射竦められ、スノウは硬直する。おかげでパニックにはならず済んだが、それ以上に怖くて身動きできない。急におとなしくなったスノウを訝しむ様子もなく、エルはここぞとばかりに抱き込んで腕の中に落ちつけてしまった。

「拾ったことにする」

「それこそ頼い方々に殺されてしまいますよ」

まあ私は構いませんが、とアイシャが獰猛な笑みを浮かべる。

「なら…水妖あたりでも猫にしたことにする」

「それが無難でしょうね」

何がどう無難なのか、納得してうなずきあう魔物たちを前に、スノウはひたすらにこれが悪い夢であることを願っていた。

4・ネコの心得

木製の扉が重々しく閉められ、空間から束の間音が消える。

熱気と緊張の去った部屋は、もとの緩んだ空気を取り戻し、一気に呼吸が楽になった。

肺に溜まった重い息を吐き出して、ふとここが自分ひとりの空間ではないことを思い出す。

「よお、緊張してるか？」

笑いを含んだ声にスノウが顔をあげると、緋色の色彩が目に入った。エルと呼ばれる魔物だ。

緊張してるにきまつている。

スノウは猫にされ、あまつさえその魔物の腕に抱かれているのだから。緊張しないでいられるほうがどうかしているだろう。

しかもこの魔物ときたら、とスノウは内心毒づく。

エルはスノウを抱っこしたまま、結局1時間も話し…というか会議をしていた。察するに、アイシャと呼ばれた魔物ともう一人はエルの部下であるようだ。その間、猫嫌いの二人（特にアイシャ）の視線がびしびしとスノウに刺さり、生きた心地がなかった。視線に殺傷能力があるなら、今頃スノウはこの世にいない。

その二人がつい先ほどようやく退室した。

この部屋に連れてこられてから2時間程度、やっと楽に呼吸ができるようになったスノウである。

「大丈夫だって、取って食ったりはしねえよ。猫は殺しても食うなつて言われてるしな」

あまり心安らがないセリフを、エルは上機嫌で言う。

さすがに2時間近くも、さらに言えばその半分は密着して過ごせばさすがのスノウでも多少慣れてくる。おとなしく撫でられながら、言ってみる。

「放してくれませんか？」

だが、実際に口からとびだしたのは「にゃあ」の一声だけ。完全に猫のそれである。猫になら通じるかもしれないが、人語には程遠い。

「ん？ああ、疲れたか」

言葉にならなかつたスノウの意思を感じ取ったのか、エルがスノウを覗き込んで言った。ぼん、と放り出すようにしてスノウを解放する。

「逃げるなよ、勇者。勝手にうろついたら、猫嫌いの魔物どもに八つ裂きにされるぞ」

悪辣な笑みを浮かべ、エルがそう釘を刺した。

逃げられるものならとつくに逃げている。

放り出された机の上に座って、スノウは恨めしい思いでエルを見上げた。

「んー？腹減ったのか？それとも猫になったのか？」

「猫にしたのはそつちじゃないか…」

思わず反論してみたが、口から出るのは「にゃあ」という鳴き声だけ。首を捻っているところを見ると、かけた本人であるエルですらもスノウの「猫語」は理解できないらしい。ならば、とスノウは口を開く。

「元に戻して」

にゃあ。

「猫はあまり好きじゃないのに…なんでよりによって」

にゃあにゃあ。

「どうせなら強い魔物にでも変えてくれればよかつたんだ。そしてら火を噴いて逃げてやるのに」

にゃあにゃあにゃごにゃご。

理解できないと知ると、スノウはここぞとばかりに文句を並べた。

捕われてからの…或いはこれまでの鬱憤を晴らすように、にゃあにゃあ鳴き続ける。

急に騒ぎ出したスノウを、エルはぼかんとした表情で眺めていた。先ほどまでまさしく借りてきた猫のように大人しかったスノウが、突然鳴き出したのだから驚くのも当然である。

「…ああもう、何言ってるかわかんねえな」

面倒くさそうにエルが言っつて、ぱきつと指を鳴らす。途端にスノウの喉が楽になった。

「…あ…？」

漏れた声は、紛れもないスノウ自身のもの。愛らしい鳴き声ではない。

「それで喋れるだろ。言っつてみな」

促されてスノウは言葉に詰まる。ただ文句を並べたてていただけで、質問をしていたわけではなかった。懸命に脳を振り絞り、言葉を探す。

「…えつと…俺を…どうする、つもりですか」

「どう？猫にしたじゃん」

「それはそうなんですけど…俺を猫にして、どうしたいんですか」

「飼っ」

「…他には…？」

「他？他に用途があんのか？」

言い切られて、スノウはしばし戸惑う。用途…？

沈黙の意味を正しく理解したらしいエルが、意地の悪い笑みを浮かべて補足した。

「言い換えれば、他にお前に利用価値があるのか？つてことかな。」

くさり。

不可視の剣が、確かにスノウの胸をえぐった。

「…いい…いい…」

ない。悔しいことに、自分の利用価値なんてない。以前のままの勇者ならまだしも、今の勇者では人質の価値もないことは重々わかつ

ている。

自分の人生はここで猫にされて飼われておしまいなのだろうか。

「言っとくけど逃げてても無駄だぞ。ヘタレなお前が逃げ切れるとは思っていないけどな、その魔法は俺にしか解けない。」

「じゃあ…どうしたら解いてくれますか」

「解かないぞ、俺は。猫の方が十分価値があるだろう」

「…う。うう…じゃ、じゃあ、解く方法は…」

必死に食い下がるスノウに、エルは呆れ顔。

「お前ばかだなあ。魔物オレがご親切に教えるわけないだろ」

言われてみれば確かにその通りである。しかも目の前の魔物はかけた本人なのだから、どんな理由があれ解き方など教えるはずもない。

「…それも…そう、ですが…」

スノウは視線を落とす。

方法が全く思いつかないわけではない。この城を逃げ出して仲間のもとに帰り、国王の力を借りて方法を探すことだって可能だ。世界は広い。何かしら魔法を解く方法はあるだろう。王室お抱えの魔法使いだっているのだ。

ただ、それを実行するにはスノウの度胸と云うか…勇気がいまいち足りない。

…猫を嫌う魔物の城で、うまく逃げおおせる自信がなかった。

自分のヘタレっぷりに再び落ち込み始めたスノウを、エルは黙って眺めていた。ややあって、気まぐれのように口にする。

「解く方法、知ってどうするんだ？」

「…元に戻りますけど…」

当然である。知ってなお猫のままにいるなどと正気とは思えない。

ヘタレの自覚はあるがマゾの性癖はない、とスノウは思う。

エルは一瞬きよんとし、こめかみを揉みながら言いなおした。

「あー、そりゃそうだな。じゃなくて…知って、元に戻って、お前は どうするんだ？」

方法を知ったら、元に戻る。

元に戻ったら…人間に戻ったら。

勇者に、戻る。

「…戻ります」

呟いた。心臓がどくどくと脈打つ。その理由がスノウ自身さっぱりわからない。

「仲間のとこに戻るだけか？まったく覇気のないヤツだな。魔物の首級あげようとか思わねえの？」

呆れ顔でエルが嘆息した。

「無理です」

そう首を振って返しながら、スノウはどこか安堵している自分に気づいた。理由はわからないが、先ほどの動悸は嘘のように静まっている。魔法の負荷でもきたのだろうか、とスノウは少し心配になる。「元に戻る手っ取り早い方法はあるぞ」

そんなスノウの心配をよそに、エルは楽しみに切り出した。先ほどまで「教えるわけない」と言っていたのに、こういう風の吹きまわしか。

「あるんですか？」

思わず食いついてしまうのは、この場合仕方ない。魔法をかけた当人の言葉であり信用の置けない敵の言葉ではあるけれど。

「お前が勇者になることさ」

対して、エルの言葉は実にあっさりとしたものだった。

「……勇者、ですけど…」

ちゃんと国王から任命された勇者である。任命された当時とは色々違ってしまったようだが、真正銘の勇者に間違いはない。

「肩書きのことじゃない。勇者の本分は何だ？」

出来の悪い生徒を教える辛抱強い教師のような口ぶりで、エルが言う。

「…魔物を倒すこと…？」

「そうそれ。俺が何言いたいかわかるよな、勇・者」

にっこりと笑って、スノウの頭をなでる。よくできましたと言わん

ばかりに。

つまり。

スノウは忙しく頭を巡らせる。

つまり、魔法を解く為には魔法を掛けた魔物、即ち自分を倒せと言っているのだ。

明らかな挑発。それも、スノウが勇者の誇りなんて欠片もないヘタシであることを知ってて。

「…む、無理…」

倒すなんてことができるはずがない。そもそもできたら今こうして猫でいる筈があるつか。

「なら死ぬまで猫のままだな」

…死ぬまで猫のまま。

ふと、スノウの中に疑問が湧いた。

「…寿命」

ぽつりとつぶやく。

「ん？」

「寿命、縮みますか？猫だから…30年位縮む？」

スノウの問いかけに、エルはしばし無言。

「お前…ほんつとに馬鹿なんだなあ…」

エルは哀れむような眼差しでしみじみと言った。

「状況理解してるか？お前は人間で勇者で、猫にされたんだぞ。どう思う？」

「…どうって…」

「お前な、魔法ひとつも防げない癖してなんでそう呑気なんだ？俺がちよつと本気でついたら即死だぞ？寿命とか気にしてる場合じゃねえだろ」

倒すはずの魔物にしつかりと説教された勇者は、なるほどと頷いた。

「…言われてみれば…」

窮地に立たされているんだった、とスノウ。スノウなりに必死ではあるのだが、その必死さはなかなか相手に伝わっていないようだ。

エルはスノウの反応に、額を押さえて宙を仰いだ。

「…俺は今までこんなのと戦ってきたのか…？」

こんなの呼ばわりされてひっかかるモノがあつたが、そのあまりにも落胆した様子に、なんだか悪いような気になってくる。

だがわざわざ訂正しても…情けない気分になるだけなので黙っておくことにする。

「…お前が心配してるようなことにはならないから安心しろ。…多分な」

「…多分…？」

「よくわからん。あまり使わない魔法だし。」

少しも安心できないことを胸を張って言うエル。別に本人に胸を張ってるつもりはないのかもしれないが、堂々たる態度だけにそう感じずにはいられない。

「ああ一応根拠はあるぞ。お前が自分が人間だつてことを忘れなきや大丈夫だ」

「…？」

スノウはこてん、と首を傾げる。忘れるなんてことあるだろうか。

「見た目は猫だけど体は人間のままでしな…魔法に中身まで食われなきやいいつてことさ」

「……」

魔法に食われる？ますます意味がわからない。

さらに首を傾げる。そのまま横に転がっていきそうな角度だ。

「だからな、ええと今の状態は、魔法によつて猫のカタチに順応させてるわけだ。だから魔法の影響が強ければ強いほど猫らしくなる。カタチだけじゃない。中身も猫らしくなる。

つまりな、お前がぼけつとしてると自我まで魔法に食われて名実ともに猫になつてしまうわけ。」

エルは丁寧の説明をする。この魔物は意外と親切な相手なのかもしれない、とスノウは思った。

「まあ大丈夫だろうさ。自我を失うほど強力な魔法をかけたわけじ

やない」

よほどじゃない限り問題ない、とエルは言う。

「……」

人であったことを忘れてただの猫になる。

それはスノウにとつて恐ろしい事態だった。そうでなくても、スノウの「自我」は曖昧なのだ。何せ、スノウの記憶はひと月分程度。

日常に困らないだけの知識と、勇者として必要な知識を後から記憶しただけの 仮初めの勇者^{スノウ}。

たかだかひと月分の記憶では、己の確固たる信念もプライドも持ちようがない。何が正しく何が間違っているのか、善悪の判断すら怪しいのだから。

「ま、そのうち慣れる」

なんでもないことのようにエルが締めくくった。極上の笑顔で。

当然ながらなんでもないのはエルだけであり、スノウにとっては大問題だ。

慣れたくもないし、第一慣れるはずがない。

一刻も早く元に戻らねば、とスノウは気持ちを新たにす。

勇者も仲間たちも関係ない。記憶も戻らないまま猫の姿で一生を終えるなど冗談ではないからだ。そして、この状態の自分が「猫にならない」という自信もない。

なんとしても魔法を解かねばならない。

エルに解く気がなく、他に解く方法が見つからないなら、エルに解かせるしかないだろう。

そこまで考えて、スノウは不安になる。

逃げ出すことすら恐ろしくてできない自分が目の前の……いかにも強大な魔物相手に強要できるだろうか。

強要できるとするなら、スノウがそれこそ「勇者」のように強く在らねばならない。或いは、スノウに従わざるを得ないような「弱み」を握るしか。

「そうだ、あと当分の間この部屋から出るなよ？」

今後について頭を抱えていると、エルがどこからかカゴを取り出して言った。

植物の蔓を編んだカゴの内側には、光沢を放つ布が敷いてある。布がずり落ちたりしないよう桃色のリボンで布を固定してあった。随分と可愛らしいカゴである。

「これ、お前のな」

それで寝ろ、ということなのだろう。

猫生活がさらにリアルを増してきた、スノウはげんなりする。

猫にまで変えられたのだから、スノウもこれが一時の気まぐれや冗談だとは思っていなかったが、心のどこかでその可能性を望んでいたことは否定できない。魔物は気まぐれな性質だから。

だが、首に鈴をつけられリボンのかかったカゴを与えられると…本気なのだと改めて思い知らされる。

「俺のベッドに放り込んだ方があったかくていいんだけど…」

鬱々としだしたスノウの耳に、エルのとんでもない発言が飛び込んできた。

魔物と一緒に？

「とんでもない！」

思わず全力で拒否した。

こうしているだけでもスノウの精神状態は限界なのだ。

せめて就寝時くらい安眠させてほしい。…魔物の城で安眠、というのもおかしい話ではあるが。

「…言ってみただけだ」

エルは軽く肩を竦めて笑う。

「アイシャとスイが目くじら立てるに決まってるからな。まったく、猫のどこが嫌なんだか。」

聞き覚えのない名前に、スノウは頭を巡らせる。思い浮かぶ人物は二人しかいない。そのうちの片方が「アイシャ」だというのは、恐怖と共に記憶されている。となると、「スイ」というのは水色の髪の毛の人物の可能性が高い。

「仕方ない、魔物は猫を嫌うのが普通らしい。ま、とにかく大人しくしてろよ、勇者。いきなり白猫が城内をうろつろし出したら、他の連中が大騒ぎするだろうからな。」
そのうち散歩できるようにしてやる、とエルはスノウをぐりぐり撫でる。

完全に飼い猫への接し方だ。

人間なんだけどなあ、とスノウは内心呟く。しかも勇者で目の前の魔物を倒すべき立場の人間である。それが当の魔物に飼われてペット生活とは。

エルの指が喉元をくすぐる。

思いのほか気持がよくて、不覚にもごろごろと鳴きそうになりはたと気づいた。

…何としても元に戻らねば。一刻も、早く。

4・ネコの心得（後書き）

やっと…です（^ー^；）

だんだん書くことが増えてきて、（私の）処理が追いつかなくなりつつあります。気長にお待ちください。

5・アイシャと猫

「くそ、面倒くせえな」

ぶつぶつ文句を言うのは、スノウの「エサやり係」に任命されたアイシャである。

その手には小魚の干物が詰まった袋。そこから白い椀状の入れ物に移し替えようとして、脇からぼろぼろとこぼしていた。

その光景をあくびを噛み殺しながら、スノウは見るともなしに眺めていた。

スノウの座している場所は、部屋の窓際である。

午後の柔らかな日差しは、例えようもなく心地よい。

ご飯なんていらなから寝たいな…と緊張の欠片もないことを考え、伸びをする。

スノウが猫生活を送り始めて、早一週間が過ぎようとしていた。元々、勇者としての自覚はおろか人としての自覚も危ういスノウである。

当初こそ今後を憂えて食事どころではなかったスノウだったが、変わり映えのない猫生活が続くにつれ、こうして呑気に食事を待つ程度には馴染んでしまっていた。

食事は日に2回。

この書斎のような部屋からの外出を禁じられているスノウに、エルとアイシャが交代で運んでくる。食事の内容は「小魚の干物」のみで、贅沢を言える状況ではないといえ、ここ最近はずすがに少々飽きてきていた。

まだ蛇やトカゲや或いは小型の魔物なんかではないだけ、マシだとは思っていたが。

最初、エルが「エサやり係り」を決めると言い出した時、スノウが

思い悩んでいたのは「いかにしてエルの弱みを握るか」という勇者としては卑怯なテーマについてであった。

当面の命の危機は去ったものの、スノウにも猫にされた現状が「窮地」であることは十分に分かっていたし不安でもあったので、一刻も早くとの思いがあった。

エルの話は耳半分 正直なところ食事がどう、なんてことを考えているだけの余裕がスノウになかったこともある。だから食事を運んでくるのがエル以外、という可能性は全く思いつかなかったのだ。従って、エルが「仕事があるから」と存外マジメな理由で、「エサやり係」を決めるといふ話になり、スノウの背は一気に凍りついた。エルならばまだいい。猫にした張本人なのだから、間違ってもどうこうはすまい…その筈である。しかし、他の連中となるとそうはいかない。

果たして、呼び出された魔物二名は、勢い良く拒否を表明した。

「猫なんて放っておけば適当に食べますよ、虫とか鳥とか！」

と、アイシャが吐き捨てれば、

「猫の餌はわかりません。一説によると飛竜も食べるとか」

そんな餌は調達しかねます、と水色の髪青年、スイが冷静に拒絶した。

「さすがに竜は食わないだろ、なあ？」

エルはにこにここと笑いながら、スノウに同意を求めた。

ちなみに飛竜とは、龍の種類の中では比較的小型ではあるが、人ひとりと丸呑みできる程の大きさである。猫の手に負えるような代物ではない。

スノウは勿論必死に首を振った。首元で鈴が鳴るが、それを気にする余裕もない。

龍のナマ、もしくは丸焼きなんて与えられても困る。

「お前たち何か勘違いしてないか？コレは猫の姿をしているだけでヒトに変わらないんだぞ。ヒトの食いそうなものでいい訳だし…それに猫といたらサカナで十分だろう？」

なんでもないことのように説明するエルが、スノウにはとても常識人に見えた。魔物にヒトの常識を求めても無駄だと思っただけに、軽い衝撃を受ける。うっかり後光すら見えてしまい、スノウは慌てて目をこする。

「まあ猫嫌いのお前たちに任せきりにするつもりはない。俺の不在時だけでいい。他の世話は俺が責任をもつ。」

きつぱり宣言する様はまさに飼い主の鑑。

ただし、飼われているのが他ならぬ自分だと思つと スノウはこの日何度目かのため息をつく。

「…そこまで仰るのでしたら…いらっしやらない時だけ、ですよ。」

顔をゆがめながらも、アイシャが譲歩を示す。仇とばかりに睨みつけられ、スノウは縮こまった。

「それでも、無理です。」

スイは譲らなかつた。

「私にはできません。貴方の命に逆らつ罰ならばいかようにも受けます。」

「…どうかお許してください、エル様」

まっすぐにエルを見詰めた後、深く頭を垂れる。その全身に纏つた冷えた空気に、思わずスノウの背筋が寒くなった。ぴりぴりとした緊張が肌に突き刺さる。

「わかつた。じゃあ不在時の餌やりはアイシャに頼もつ。…そう難しく考えるな、スイ」

唇に優しい笑みを履いて、エルはぼん、とスイの肩を叩いた。

「…はい」

顔を上げたスイの表情は相変わらず冷静で、切れそうな空気だけが消えていた。

スイの猫嫌いは相当のものだ。

スノウはそう結論付けて、なるべくスイには近づかないことを心に誓ったのである。

そんなこんなで一週間。

不在時だけと言っていたエルだったが、これがなかなか多忙であるらしい。

気づけば初日を除き、ほぼ毎日アイシャと顔をあわせている状態だ。意外と面倒見の良いアイシャは、毎回文句と罵詈雑言を並べながらもせつせとスノウの世話を焼いていた。

ちなみに現在彼が必死に格闘している椀も、アイシャ持参の品である。

よく見れば何かの頭蓋のようだが…スノウはあえて気づかぬフリでいる。

気づいてしまったが最後、二度と椀に顔を突っ込む気にならなくなるのは明らかだった。

「おい勇者！…じゃなかった、猫！」

アイシャが怒鳴る。別に他に魔物はいないのだから「勇者」でも一向に構わないと思うのだが、と思いつつスノウは首を向ける。

「用意してやったぞ、食べ！呑気にまどろんでんじゃねえぞっ」

そうアイシャが喚く傍から、スノウは欠伸をする。白い尾をぱたぱた揺らし、だらしなく寝そべる様は堂々としていて、いつそ人間のときより貫禄がある程だ。

「お前、猫の方が性に合ってるんじゃねえか？」

「…そんなこともないと思うけど…」

再び出そうになる欠伸をこらえつつ、スノウが返した。一部の魔法が解かれていることは、アイシャもスイも既に知る所である。

アイシャは鼻で笑って「どうだか」と肩を竦めた。

スノウはもう一度伸びをして、窓際から離れアイシャに近づく。

「おい、あんまり近づくな。」

腕をずずつとこちらに押し出して、アイシャが釘を刺した。

「…別に何もしないけど」

何かをするより、される方が心配だ。

「うるさい。言ってるだろ、オレ達は本能的に嫌いなんだよ」

「魔物は皆そうなの？」

腕を覗きこみ、小魚に噛み付く。

「さあな。下等な連中は知らねーけど、少なくともヒト型取れる位の高位の奴は大体なあ…」

ヒト型。アイシャの言葉に僅かなひっかかりを覚えて、スノウは首を傾げる。

「ヒトに姿が近いと強いのか？」

「そりゃあな。変身能力つーのはまんまそいつの力を現すのさ。」

ヒト型になれるやつは大抵他の姿にもなれるぜ？」

アイシャがにやりと口元を歪めると、鋭い牙が覗いた。スノウは小魚（干物）をばりばりと咀嚼しながら、再び質問する。

「アイシャは、本当はどんな姿なの？」

「…お前に呼び捨てにされると、やっぱり腹立つなあ…ヘタレ猫の分際で！」

眉間に深い皺を寄せ、アイシャは獰猛な唸り声を上げた。黄金色の双眸は紛れもない殺気を放ち、今にも飛び掛ろうとする獣のように爛々と輝いている。

「…嫌？」

「嫌に決まってるんだろ！何で主でもない人間の…しかも勇者の、へたれの、猫野郎に呼び捨てられなきゃいけない！」

火を噴く勢いでまくしたてるアイシャの前で、スノウは香気に小魚を齧っていた。

一週間前であったなら、確実にへたりこんで気絶していただろう。

それだけの迫力と殺気が、アイシャから放たれていた。

けれど伊達にスノウも一週間を過ごしていたわけではなかった。

当初こそ怯えまくっていたスノウだったが、こういうやりとりが日常化すれば慣れもする。

アイシャはとかく短気で喧嘩っ早い性質なのだが、言動とは裏腹に分別はしっかりついている相手なのだ。だから毎日のようにスノウを怒鳴りつけ脅しても、実際に手を出すことはほぼない。

スノウを嫌い、憎く思っている主人であるエルに任されている以上、決して危害を加えることはないだろう。

この一週間でそれを学習したスノウは、唯一の情報源としてアイシヤに質問しまくり怒らせるという日々を送っていた。

「じゃあ…アイシヤ、さん？」

だから、動じることなく呑気に譲歩してみる。

「却下！」

「アイシヤ様」

「…それも却下だっ！」

「じゃあ…なんて呼べばいいの？」

スノウは無邪気に尋ねる。猫の姿だけあって、愛らしさと無邪気さは三割増しである。ただし、魔物には通用しない武器であったが。

「…呼ぶな」

沈黙の後、アイシヤが言った。眉間に皺をを拵えて。

「そもそもお前と馴れ合うつもりはない。だから名を呼ぶな。わかつたな、ヘタレ猫？」

傲然と言い放つ様は、まさしく王者の風格。

あ。

唐突にスノウの脳裏に閃いたイメージ。声なき声が、スノウに耳打ちをする。

「アイシヤ、狼なの？」

その途端、アイシヤから表情が消えた。

「…な、」

アイシヤが唇をわななかせた。双眸に浮かぶ色の意味がわからず、スノウは不安に駆られる。本気で彼を怒らせてしまったらどうか？

「…ええと…ごめ…」

「なんでわかった!！」

謝罪しようと口を開いたスノウを遮って、アイシャが詰め寄った。その勢いのまま、アイシャの目の高さまで抱え上げられる。だが興奮のためか、当のアイシャはといえばスノウを抱え上げたことに気づいていないようだ。

「え。…な、なんとなく…そう思って…」

あまりの気迫にしどろもどろにスノウが言う。本当にただの勘なのだ。理由などない。

「すごいな、お前!！」

てつきり怒られるか脅されるか、あわや命を落とすかと怯えていたスノウだったが、意外な賛辞に啞然とする。

「…はい?」

「見破つたのはお前で二人目だ! すごい! やっぱお前って勇者なんだな!」

これは…どうとればいいんだろう?

呆然とスノウはなされるがままになっていた。アイシャは何故だかやけに嬉しそうである。正体がばれることは、そんなにつれしいことなのだろうか?

褒められて悪い気はしないスノウだったが、別段褒められるようなこともしていない、と思う。

とりあえず下ろしてほしかったので、スノウは「にゃあ」と鳴いてみた。

抱え上げていたアイシャがぴたりと止まる。

「…ツうわ!」

短い叫びとともに、手を放された。空中に放り出される。猫ならば大したことの無い高さだ。猫ならば。

中途半端に猫であるスノウは、べちゃつと顔面から着地した。

「っ! わあ、大丈夫か、おい!」

これには色々な意味で慌てたらしい。アイシャが慌てふためいて叫

ぶ。

「だ、いじょうぶ…」

やっとの思いで身を起こすと、アイシャが腕を押し付けてきた。

「悪かったよ、いいからとっとと食べ」

恐らく「悪かった」は落とした所にあるのだろう。差し出された腕から食事を再開しながら、スノウは思う。

「オレみたいな高位の魔物はな、本性現すことは滅多にねえんだ。だから隣の奴の正体が何か、なんて知らないのが普通さ。」

力のある奴は一目で相手の正体を見抜けるって聞いたことがあったからさ、思わず興奮しちまった」

これまで会ってきた勇者は一人も見抜けなかったんだ、と得意げにアイシャが言う。

その「会ってきた勇者」は皆墓の下なのだろう。アイシャの力が如何ほどのものかは知らないスノウだったが、その程度は軽く予想がついた。

スノウが勇者であったところ、今までの魔物とは比べ物にならない大物がいるという情報をきいた。それがエルやその部下たちを指すのなら、ヒトの力はまだまだ遠く魔物に及ばないということになる。果たして、これで「魔王」を倒せるものなのか。

「一目で見破られたら、敵なら戦わない。仲間なら忠誠を誓う。」

そう決めてただけだけど、今までエル様しか出会えなくてな！。

こんなもんかって思ってたから…」

アイシャの言葉に、スノウは小魚を齧りつつ、首を傾げた。

本当にただの勤であった場合、どうなるのか。

「じゃあアイシャは、俺と戦わないってこと？」

「…お前は勇者だからな、ヘタレだけど。いずれは分からないよな」

「なら、忠誠？」

「それはねえよ」

きっぱりと否定して、アイシャはそのまま何やら考え込んでしまっ

た。

アイシャは真剣だが、スノウにとってはどうでもよかった。それよりも、落下時にしこたまぶつけた鼻がまだ痛むことの方が重要だった。そして、小魚の残量の方が。

「ねえアイシャ」

しばらくして小魚をもごもご咀嚼しながら、スノウは話しかける。

アイシャの大興奮で流れかけたがスノウはどうしても聞きたいことがあった。

「ん？何だよ」

一方のアイシャはというと、己の思考に没頭していたためか、スノウの呼び捨てに気づかないでいる。

「ヒト型になれる魔物は猫嫌いなんだよね、なのに…どうしてエルはあんなに猫に拘るんだろう？」

「一番気になっっていること。それはエルの意図である。」

勿論元に戻ることに帰ることが最優先であり、エルの弱点を掴むことが重要なのは分かっている。だが、それ以上にあれほど猫に執着する理由を知りたかった。

「ああそれは…って、ちゃんと敬称をつけろ！」

そこはしっかり聞いていたらしい。面倒だと思いつつも、スノウは「エル様」と訂正する。

アイシャはそれに満足げに頷くと話し出した。

「いつだったかな、エル様が急に仰ったんだ。」

猫はいないのか、って。ここに猫がいる筈ないからそう言ったら…猫を飼いたいって。始めはいつもの変な研究にでも使うのかと思っただら、どうやら本気で愛玩用ペットに探してるって分かってな〜」

「変な研究って？」

「さあ？中身までは知らねー。…そーいや最近ぱったりしなくなっただなあ」

あまり突っ込んで聞くと不審がられそうなので、スノウは「ふうん」と相槌を打つにとどめた。機会があったらきくことにしよう。

「でな、オレらが大反対して、エル様自身猫と接触しようとしたみてえだけど、思うような結果に至らなかつたつーことで…猫は飼わないって結論になったのさ」

なるほどそれで、とスノウは頷く。本当の理由はともかく、以前から猫を飼いたくて仕方なかつたのなら、この奇妙な事態も まあ理解できる。

「それで…これなんだ」

思わずわが身を顧みて、落胆した呟きを漏らすとアイシャが意地の悪い笑みを浮かべた。

「ははっ、災難だったな、勇者」

確かに災難だが、すぐさま殺されるよりはマシかもしれない。

勇者であるプライドなどつい一月前から勇者を始めた身には全く関係なかつた。それどころか自分が自分である根源すら危ういのに、プライドだの沽券だの言っでいられない。

「しかし不思議なんだよな」

アイシャが独り言のように呟いた。

「不思議？」

「それまではエル様も猫嫌いだったんだぜ。まあオレたちほど嫌ってなかつたけど…苦手にはしてたんだがなあ」

それがいきなりペットとか言い出すから。

アイシャは首を捻りつつ、「拾い食いかな」と主人に対してものすごく失礼な感想を述べた。

敬称をつけないことより余程不敬なんじゃなかるうか、とスノウは思ったが、口にはしなかつた。

かわりに、腕に前足（手）を乗せ、別なことを口にする。

「アイシャ、魚なくなつた。」

「あ？もう食つたのか、食いすぎると太るぞ」

言つて、アイシャは手元の袋から小魚を掴み出し、そのままばらばらと腕の中に落とす。

「太らないよ、足りないくらい」

「ふざけんな。贅沢言うんじゃねえよ」

「毎日小魚の干物ばかりで飽きた」

「うるせえヘタレ猫。他に何が食えんだよ、虫か？」

肉、と拳げようとしてやめた。正体不明の肉を食わされてはたまらない。

「焼き魚とか…あとパン」

「おい、サカナはともかく、そりゃ人間の飯だろ」

「たまごやきにハム…チーズ…」

「いくら人間の食いモノでいって言ってもな…そりゃやっぱ腹下すと思うぜ？猫の姿なんだからさ。」

一理も二理もあるので、スノウは黙る。

「ま、しょうがねえ。焼き魚と…ハム位なら大丈夫だろ。そのうち持ってきてやるよ」

袋から小魚を出し終え、アイシヤはぼんぼんとスノウの頭を撫でる。スノウは顔を上げず、小魚に夢中なフリをした。

でないときっと、アイシヤは己の行動に気づいてしまうから。

猫嫌いと言いつつも、なかなかどうして、アイシヤは面倒見がいいのである。

6・ナイトメア

美しい夜空が広がっている。

闇の帳に鑲はくめられた星は、まるで宝石のよう。手を伸ばせば今にも届きそう。

この世界はこんなにも美しいのに。

それなのにどうして 争う必要があるのだろう。

言葉にすると陳腐になる気がして、そつと胸の内を呟いた。

この地上のどこかで、同じ空を見ている筈なのに。

敵も味方も、この世界に生きるものすべて。

それがひどく不思議で、そう思うと胸の奥が痺れたように疼く。

何だろう、この感覚。

締め付けられていたたまれない。感覚を知ろうとすればするほど、

苦しい。

胸を押さえて、ふと隣を見た。

そこには白金プラチナの髪フロンの青年。見覚えのある…否、良く知った顔。

そう、あれは「俺」だ。

ではここにあるのは鏡だろうか？

そう思い手を伸ばそうとして、微かな違和感を覚える。

鏡の向こうの自分は、こちらを見てはいない。誰かと談笑している。

揺れる美しい金髪。花のように笑う、メリル。その表情は柔らかく、

ともすれば幼ささえ覗かせて愛らしい。

自分が見たこともない表情で、自分と会話をするメリル。

何だろう、これ。

呆然と鏡の向こうを眺めているのは、自分。けれど鏡の向こうでメリルと談笑しているのも自分だ。同じ人間なのに、何故「俺」はこちらなんだろう？

「俺」だってそっちに行きたい。こんなところで夜空を見ていたくない。胸の苦しさを抱えてたった一人

そう思った瞬間、鏡の向こうの自分が振り向いた。
流れる白金の髪。雪のように白い顔。淡い色の睫毛に縁取られた、
青い瞳。

見慣れているはずのその顔が、別人のように思えて。
不意に、「自分」が晒った。
自分でも知らない、自信に満ち溢れた表情で言った。

「お前は俺じゃないだろう?」

唐突に目が覚めた。

視界に飛び込んできた布が、ベッドのシートではないと認識するの
に数秒を要する。

周囲は窓からの月明かりでほのかに明るかった。

大きな書斎机の輪郭、カゴに掛けられたリボンの端まで、色までは
分からないもののよく見ることができた。

見上げた先には、開かれたカーテンと窓の向こうの満月。

そのまま視線を下ろして、白い手足と光沢のある布が目に入る。

「ああ、今猫だった。」

溜息と共にスノウは呟く。

耳に届いた己の声は、思いの他しっかりしていた。脳がフル稼働で
目覚めたらしい。

熟睡できなかったな、と先ほどの夢を振り返り思う。

何だか妙にリアルで洒落にならない夢だった。

猫の身である現在は冷や汗などかかないが、もし人の身であつたら
それこそ汗だけで目覚めていそうだ。

よし寝なおそう、と己に与えられたカゴの中でごそごそと丸まろうとして

ふとスノウは気づいた。

自分かしかないはずの室内に、微かな気配がする。

この部屋にスノウがいることを知るのは、アイシャとスイ、部屋の主のエルの人だけだ。彼らは夜行性ではないし、今時分スノウに用があるとは到底思えない。

となると今この部屋にある気配は、彼ら以外の魔物、恐らくはスノウの存在を知らない魔物に違いない。

危険かも知れない、と今更ながらスノウは息を殺した。頭を伏せ、なるべく低い姿勢をとる。

相手の目的は分からない。だが魔物は殆どが猫嫌いだという。ならば、ここに「猫」がいると気付かれたら？

気配が近くなる。相手はまっすぐにスノウに近づいてくる。

心臓が早鐘を打ち、視界が脈動する。

カゴがカタリと動いた。

もう駄目だと固く目を閉じたスノウの耳に、

「寝たフリか？」

聞き覚えのある声がした。

「……エルっ!？」

「いてッ」

勢い良く伏せていた頭を上げると、見事に相手の顎を直撃した。

目の前に火花が散り、脳天の激痛にスノウは声なき悲鳴を上げる。

「……く、今の一撃は効いたぞ、おい」

「……ごめ……まさかエル……さ、さんだとは思わなくてですね……」

僅かな逡巡の後弁解する。

「エル、でいいって言ったろ。それにお前は俺の部下じゃねえんだ、敬語もやめろ」

堅苦しいのは好きじゃない、とエル。

猫生活に突入してすぐ、エルは言ったのだ。呼び捨てでいいと。それでも抵抗があるスノウは、面と向かって呼びかけたことはなかった。アイシャのように馴れ合いを嫌う相手もいる。迂闊に逆鱗に触れてしまつてはたまらない。

「…う、ええと…じゃあエル…その…なんで、ここに？」
たどたどしく、スノウは問いかけた。

確かにスノウはエルの部下ではない。部下ではないが…平たく言えば捕虜の立場である。元を正せば敵同士。捕虜が敵に媚びへつらうのも妙だが、かといって堂々と親密な口を利くのも…なにやらおかしい。

だからといってエルの主張に逆らう気もないので、スノウは違和感を覚えながらもなるべく自然な口調を心がけることにした。

エルはその反応にそれなりに満足したらしく軽く頷いて、

「うん、まあな。あれだ、ほら、星の導きつてやつ」と、今度はエルがたどたどしく応じた。

決断が早く、いつも堂々とした印象しかないエルにしては珍しい。

「…はい？」

しかもなにやらロマンチックな回答に、さすがにスノウも聞き返した。魔物の習慣も思想もよく知らないが、違つたろうと思う。

星の導き、などと街の占い師じゃあるまいし。

聞き返されたエルの方も、その反応は予想していたらしい。口ごもりつつも続けた。

「あ…えつとな、何だか寝付けないんだ。寒いような気もするし…こう、温かいものがあれば寝付けるかなと」

「…ふうん…？」

いまいちピンとこないスノウは、首を傾げて言葉の続きを待った。

「明日の朝アイシャに思い切り怒られることをしようかと思つて！」

あはは、とひたすら明るくエルは言い切った。

「怒られること？」

やはり意味がわからない。

他の魔物がいない時のエルは、割とわかりやすい言葉を選んで説明してくれるのだが今日はどうにも的を得ない…とスノウは思う。ごく最近になってからだが、スノウはエルの口調の変化に気づいていた。

アイシャとスイの前では、魔物の長にふさわしい高圧的ともとれる口調で話す。しかし彼らが不在の時　つまりスノウだけが相手の時は、まるで人間のごく普通の青年のような、砕けた口調になるのだ。その差異はほんの僅かなもののだが、そこにエルの責任感のようなものが見える気がして、スノウは素直に感心していた。

「そう。大丈夫、怒られるのは俺だけだから」
エルは上機嫌に頷いて、スノウを抱き上げる。細かい説明は省くことにしたらしい。

何でよりによってわざわざ怒られるようなことをする必要があるのでか。

普段アイシャを怒らせている自分のことは棚にあげて、スノウは抱きあげられたまましきりと首を捻る。

エルはそのまま扉へと向かい、廊下に出る。

その随分とあっさりした行動に、スノウは軽く目を瞠った。混乱を招くからこの部屋から出るなど言ったのはエルだというのに…この場合は問題ないのだろうか。

落ち着きなく周りを見回すスノウに気づいてか、エルが軽い調子で言った。

「ああそうだ…明日からうろうしても大丈夫だぞ。他の連中にも言っといた」

「えっ」

行動が自由になるのは素直に喜ばしい。上手くいけば外に出られるかもしれない。そうなれば隙を見て逃げ出すことも…可能だろう。

「あとソレ」

スノウが希望の光に胸を躍らせていると、エルが空いている片手でスノウのリボンをつまんだ。首元で、鈴が軽やかな音を立てる。

「え？」

「俺の魔力を織り込んでから、どこにいてもすぐわかる。」
ひらたく言うなら発信機。

「ええ！？」

「外すなよ？ 一種のお守りみたいなもんだから…そのあたりの連中に八つ裂きにされたくなければな」

天国から再び地獄に舞い戻ったスノウは、目に見えて肩を落とす。ただの発信機もどきならばどんな手を使っても外して逃亡を図るのだが、その途端に命の危険にさらされるとあればさすがに諦めるしかない。

「そう簡単に逃がさねえぞ」

エルは含み笑いをしてスノウを撫でる。その不気味な笑いとは対照的に、撫でる手はスノウの機嫌を取るようにやさしい。

本当に猫が好きなんだな、と改めて思いつつ、尋ねる。

まだショックを引きずっているので声は暗めだ。

「…どこに行くの？」

「もう少し先だな」

答えになっていない。はぐらかしたい理由があるのだろうか、スノウには見当もつかないのでそのまま口を噤む。

窓からの月光でうつすらと照らされた廊下は、ともすれば室内より不気味だった。

調度品が作り出す影に密かに怯えながら、スノウはここに乗り込んできた時の記憶を手繰った。まだ一週間程度しか経っていないというのに、遠い昔のような気がしてくる。

敵が少ない、と呟いていたメリルを思い出す。次々と襲い掛かる敵と切り結びながら、しきりと「おかしい」と言っていたメリル。

そういえばあの時、自分たちはこれほど長い廊下を進んだらうか？ すべてがすべて、同じ構造ではないだらう。だがあの外観と今進んでいるこの廊下から考えるに、エルのいた最上まで達するには幾つ

もの回廊と、幾つもの階段、部屋を通らねばならなかった筈だった。けれどそれほど走った記憶も、それほど多くの「強敵」と出会った記憶もない。

第一、エルの最も近くにいる筈の、アイシヤやスイの姿すら見ていないのだ。

もしかして、とスノウは思う。

あれは罠だったのか。

だとすれば、どこから？

先ほどの夢が不意に鮮やかに蘇る。自信に満ちた表情で晒う自分。

急にすべてから取り残されたような気になった。足元から急速に冷えていく。

「さ、ついた」

暗い思考の海に沈みかけたスノウの耳に、エルの明るい声が響く。

「え、どこに？」

現実を引き戻され、スノウは顔を上げる。目の前には木製の扉。

先ほど後にした部屋と殆ど変わらない、ごく普通の扉の前でエルは立ち止まる。

「俺の部屋」

簡潔な返答にそうかと頷きかけて、固まった。

「…それ…」

「さ、寝よう寝よう」

扉を開けながら、エルはご機嫌である。スノウはやっと状況を理解して、エルの腕の中でしたばた暴れた。

「ちょ、エル！駄目だってば、放して!!」

「何で？」

スノウを見下ろし、にこりと笑う顔にはありありと「確信犯」の文字。

それでもスノウは必死の抵抗を見せた。

睡眠だけが、スノウの唯一の救いなのである。そうでなくとも、夢

見がよくない為か、ここのところ熟睡できない夜が続いているのだ。
「だってほら、アイシャが絶対怒る！！スイだって…多分静かにキ
しるって！！」

スイのことは未だ良く知らない。初日に顔をあわせたきり、一度も
顔を見ていない。

猫嫌いは相当なものよだから、それも当然と言えば当然だ。

「ははっ、よく観察してるな」

エライエライ、とエルはスノウをぐりぐりなでる。

駄目だ、とスノウは思う。その程度のことには既に覚悟済みであるら
しい。

「それに…害があるかもしれないし！」

必死に食い下がる。

「害？ほう、どんな？」

「…じんましんとか…だってほら、皆が皆猫嫌いなには深い理由
があるのかも」

我ながら上手い考えた。そう思つての発言だったが、短い沈黙の後
にエルで鼻で笑われた。

「じんましんねえ…それしきのことかわが野望を食い止められると
？勇者？」

いきなり高圧的な魔物の口調で言われ、思わずスノウはどきりとす
る。恐怖故ではない。エルが本気で言っている訳ではないことはス
ノウにもよく分かつている。ただ魔物の長に相応しいその様が、ス
ノウには眩しく見えたのだ。自分がヘタレとわかっているから尚。

「…止めるよ、勇者だからね」

「お前に勇者の自覚があるとは驚いたな」

あっさり言われて、言葉に詰まる。見透かされていたらしい。

「……まあ、それなりに…」

断言できないので、ぼそぼそと反論する。情けないとは思つが断言
できるだけの自信がないのだから仕方ない。

「じゃあ勇者、ひとまずじっとしてろよ」

「え？」

いきなり腕を解かれ、スノウは空中に投げ出される。例によって半端に猫であるスノウは、無様に顔面から着地した。しかし思っていた程の衝撃は訪れず、かわりに柔らかな感触がスノウを優しく受け止める。

ふわふわと心地よい肌触りと弾力に、現状も忘れて思わず陶然とする。

「ホント呑気ものだな」

暗闇の中笑い混じりの声がして、スノウは現状を思い出す。その声が予想外に近いのは気のせいではないだろう。なにやら近くでこそ音がるのも。

となるとこの心地よい場所は

スノウは慌てて身を起こし、とりあえず声とは真逆の方向に逃走を試みた。

ちなみにスノウは猫の姿だが夜目がきかない。光源の殆どない室内では尚更である。

足をばたつかせ、必死に足を進めるが、柔らかな弾力が邪魔をして思うように歩けない。

焦り始めたスノウの首筋を、唐突にエルの指が掴んだ。

思わず猫めいた悲鳴が口からこぼれる。

「大人しくしろって。別に取って食いやしねえって言ってるだろ」
横になった状態のエルの腕に抱きこまれ、スノウは往生際悪くもがく。取って食われるとは思っていないが、こんな状態で安眠などできよう筈もない。

「エル…っ、はなし…アイシャの、雷が落ちるってば!!!」

この場合、落雷の被害を受けるのはスノウの方だ。本気で切れたアイシャの敵にはなりたくない。

「あいつ雷使えないから大丈夫だって…」

応じるエルは的外れな返事をした。その声に力がないのは、既に眠気に襲われているせいだろう。

「そういう意味じゃ…、わ、わかってるの、俺は 俺は勇者なんだよ！」

「…知ってるけど」
それが何、といわんばかりに怪訝な口調で言われ、スノウは少し切なくなつた。

「…俺が、寝首を搔くとは思わないの？」
何せ今は獣の身。猫とはいえ、丸腰の人間スノウよりは立派な武器がある。これだけ接近していれば喉笛を食いちぎることは可能だろう。
エルはスノウの言葉に沈黙する。

自分で言っておきながら、スノウはその沈黙に怯えていた。
間髪いれず鼻で笑われるのも癪だが、じっくり悩まれてもそれはそれで怖い。導き出した結論如何でスノウの命は消えるかもしれないのだ。

ほんの短い間の沈黙が、一時間ほどにも感じられる。

「普通、敵ユウシヤならそうするだろうな…けどお前はしないさ、ヘタレだし。」

ややあつてエルはそう断言すると、一層スノウを抱き込む。

「わあっ万ーそうならどうするんだよ！」

自分で「万ー」などと言ってる段階で、既に無理と言ってるようなものである。

それに気づいたらしいエルが、忍び笑いを漏らした。

言った当の本人は全く気付かず相変わらず暴れている。

「できるもんなら、いつそしてみればいい。」

エルはがっちりとスノウを捕まえて放す気はない様。
相手が少しも気を変える素振りがなく、さすがのスノウも観念する。猫の身ではエルの力に敵わないし、何より暴れすぎて疲れしてきた。

ぐったりと伸びていると、相手の体温が伝わり、何とはなしに落ちていく。もしかすると心地いいのかもしれない、と思う。認めたくはないけれど。

「やっぱ小動物はぬくいな」

スノウが大人しくなった頃、エルが呟いた。

「なら…何も猫おれじゃなくても」

「何言ってるんだ。一緒に寝るって言ったら猫しかないだろ」

何だろっ、その価値観。

当然のように言われ、思ったが口にはしなかった。

「あんまり小さい生き物は面倒だし…何より猫は可愛いだろう？」

「…悪いけど、あまり好きじゃないかな…」

問われてスノウは歯切れ悪く応じた。もともと猫はあまり好きではない。というより動物全般が苦手だ。特に今や我が身となっていれば尚更。

「人は皆好きだと思っていたんだがな。」

どこの街でも見かけるから、とエル。

「ああ、うん、たぶん好きなんだと思うよ。俺は違うけどね…」

「お前、変わり者とか言われぬか？」

エルの指摘にスノウは短く笑う。変わり者というより「変わった」と言われていた。記憶を失う前と今と、すべてが真逆だと。

「それ、そっくりそのまま返すよ。」

そう返すと、エルはしばらく沈黙した。

魔物で猫好きだなんて、十分に変わり者だ。おまけに勇者を殺さず猫にして飼うだなんて。

どうやら凶星だったらしい。エルは無言で抱く腕に力を込めた。ぎゅっ、と締め付けられ、息苦しい。

「…エ、エル、締まってますけど…」

「煩い。全くヘタレの分際でいい度胸してるな」

もがいて訴えると、腕の力が緩んだ。だが、解放する気はないらしい。

「大人しく抱き枕になっとけ。こっちは最近寝てないんだ。」

なんとも勝手な発言をして、エルは寝る準備に入ったようだった。そういえばスノウは思い出す。ここの所スノウに食事を持ってく

るのはアイシャばかりだったような覚えがある。アイシャも、エルは最近忙しいのだと零していた。

「忙しいの？」
思わず尋ねる。

「んーまあ…それもだけど、眠れなくてな…」
少しトーンの下がった声。それだけでスノウの脳裏に閃くものがあった。スノウ自身、熟睡できない夜が続いていたから。

「…ふうん」
エルも眠れない夜が続いているのだろう。スノウのように悪夢に魘うなされているのかもしれない。
ただの推測でしかないが、もしそうなら…同情心が沸いてくる。

破壊を好む「悪」。魔物とはそういうものだ、人のような心も情もなくひたすら破壊と血を求めるケダモノのだと、それが「人間の常識」だった。
けれどこうして魔物の城で暮らしていると、決してそればかりではないような気がするのだ。
魔物にも人と同じような感情と心があるのだと、そう思えてくる。
ただ思想の違いや習慣の違い、そして互いの憎悪が、それらに目隠しをしているだけのよう。

「…考えすぎかな」
ぼつりと漏れた呟き。背後のエルからは何の反応もない。規則的な寝息が聞こえてくるだけである。
スノウはあくびを噛み殺す。どうやらスノウにも睡魔が訪れたらしい。

またあの夢を見るだろうか。悪夢とは呼べないまでも薄ら寒いあの夢。

眠りの淵に落ちかけながら、ちらりと考えて…なんだかどうでもよくなった。

大丈夫。今夜はもうあの夢は見ない気がする。

重い瞼を閉ざして、スノウは意識を手放した。

7・スイと猫

薄暗い廊下を白い姿が横切った。

見慣れないその影に彼女は思わず目を擦る。城で目にするはずのない姿だったから。きつと見間違いだ。

「どうした、マナ」

隣から訝しげな声がかかる。

「いや、なんでも…」

首を振って彼女は答える。目を凝らした先には、何の変化も見られない。見間違いだっただろう。

「多分気のせいだ」

ひっくり返りそうになる声を必死にだめて、ようよう言葉にした。顔を顰めて己の喉を押さえる。しゃべるのは得意じゃない。ふと油断した拍子に「地声」が出てしまう。

「そうか？何かいたのか？」

しつこく尋ねる声に目を向ければ、金色の目とぶつかった。

ぼさぼさに伸びた緑色の髪、肌は同じく緑の固い鱗に覆われ、口元からは長い牙と長い舌が覗いている。蛇のようないや、実際こいつは蛇だった、とマナは思う。数多ある種族の中で、蛇の系統に属する男。

爬虫類特有の光沢のある鱗状の皮膚に、首筋にうつすらと浮かぶ蛇腹のような薄い切れ目。人の姿では必要ないはずなのだが、時折「しゅっ」という音を発するのは最早単に癖になってしまっているものらしい。

「猫だよ、猫。白いやつ」

嫌な奴、と思いつながらマナは言う。しゃべるのが得意でないことを、長年の付き合いである相手が知らないはずはない。それなのに取るに足らないことをわざわざ話させる相手が気に入らなかつた。

「ふうん？そりゃ見間違いだな。お前はオレみたくよく見えないか

ら

金色の目をぱちぱちと瞬かせ、言う。

蛇系の魔物は、己が「最強と名高い龍の系統に近い」と誇りにしている節がある。そのため往々にして他の魔物に対して尊大な態度をとるものが殆どだ。

傍から見れば両者の力量の差は歴然としているだけに、「かえって醜悪」という痛烈な批判もあるのだが。もちろん、マナもその意見に賛成である。

「ネルムだつて見えちゃいないだろ。匂いで認識してるだけだ、たかが蛇のくせに偉そうに！」

思わずむっとして、マナは相手の鼻面を軽くはたいた。

「痛っ、何しやがる！羽もろくろくしまえないような半人前が！」
ネルムと呼ばれた蛇の男は、打たれた鼻を押さえて喚いた。素早い動きで、鼻を打ったものを掴む。それはマナの手ではなく、漆黒の皮膜の羽だ。

「触るな！自分も半人前だろ！！」

ネルムの手を振り払って、マナは言い返す。後半は言葉にならない声にならない、というべきか。

マナの鋭い牙の並ぶ口から発せられた言葉は、甲高い「音」となつて周囲に広がり、調度品や窓にはめ込まれたガラスをガタガタと揺らす。強力な超音波である。

ネルムは両耳を塞ぎ、歯を食いしばってマナを睨みつける。

「にゃあっ」

一触即発の空気の中、聞き慣れない悲鳴がした。

二人同時に振り向くと、角の向こうから白い物体がよろよろと出てくるところだった。

おぼつかない足取りはどうやら超音波にやられたものらしい。

耳を垂らし、白い頭をしきりに振っている。柔らかそうな純白の毛

並み。長い尾と、丸みを帯びた手足の四足獣。

「ネコっ」「

二人同時に叫ぶ。

その声に、当の猫はびくつと体を強張らせた。

怯えるように二人の方を向き、その姿を目に留めるや否や 脱兎のごとく走り出した。

「あつ逃げる！」

「やべえぞ、捕まえろっ」

なぜここに猫が、と信じられない思いでマナは「叫ぶ」。

超音波の攻撃に猫の動きが鈍くなる。耳をぺたりと寝せて、よろめいた。

そこにすばやく近寄ったネルムが、しなやかな動きで猫の首根つこを鷲掴んだ。

先ほどまでの争いはどこへやら、息の合った連携で猫の捕獲に成功する。

「猫…だな」

「ああ猫だ…でもどうしてここに…」

すっかり目を回している猫は、空中に吊り下げられても抵抗せず伸びていた。

ぶら下げたまま、まじまじとマナは覗き込む。

真っ白な猫だった。焦点のあっていない両目は青く、ぐったりとびきっているものの、その肢体はしなやかに細い。

猫など見るのも触るのも嫌いなマナの目からみても、綺麗な猫であった。

「紛れ込んだのか」

ネルムの言葉に、マナは首を振る。

「こんな上階まで誰も気づかないなんて、おかしい。」

大体魔物は気配に敏感だ。それが猫相手なら尚更。

おかしいおかしいと思つて観察していると、赤い首輪が目に入った。血のように真っ赤なりボン。先端には小さな鈴がついている。そこから奇妙な気配がして、マナは首を傾げた。

どこか懐かしいような、けれども少し寒気のある気配。リボンから放たれるそれが猫のそれを上手く隠しているような気がした。

「まあいい、処分しておくか。」

騒ぎになる前にと、ネルムが片手をかざした。鱗に覆われた手のひらに、卵大の火球が生まれる。

「ネルム…待って」

リボンの気配が気になる。何故だかざわざわと落ち着かなくて、マナはネルムの腕を取る。

「なんだよ、」

「感じない？この気配、なんかおかしい…」

マナが言いかけた時、何かが目の前を横切った。

「つつ」

「ネルムっ?!」

ネルムが己の手首を掴んで身を屈めた。掴んだ指の間から赤いものが滴る。

マナは、咄嗟に傷つけた正体を目で探したが、あたりにそれらしいものはない。一体何が、と周囲の敵を探ろうとして

「気をつけなさい」

不意に第三者の声がした。

落ち着いた、冷静な声音。敵意のようなものは感じられない。

振り返ると、少し離れた所に細い人影が佇んでいた。水色の長い髪、金の瞳の凍える美貌。

「キーラル様!？」

さつと二人の顔が青ざめる。

エルに仕える魔物の中で1、2位を争う実力者、スイ・キーラル。

言葉を交わすどころか顔を見ることすら滅多にない、二人にとって
は雲の上の相手だ。次に待っている己の運命を思い、二人の緊張と

恐怖は一気に跳ね上がる。

「それはエル様のものです。傷つけることは許しませんよ」
彼らの胸中を知ってか知らずか、スイは言葉の割りに目立った感情も見せず、淡々と言う。

それが指すものを悟って、マナはネルムの手元に視線を走らせた。ネルムも同様に慌てて己の手元に視線を走らせる。

先ほどの手首への衝撃で、件の猫はネルムの足元に落下していた。そのままぺたりと床に尻餅をついたまま、なんというか…ぼんやりとしているようだ。

猫つてもつと俊敏な生き物じゃなかっただろうか…？

あまりの緩みきった姿に、思わず状況も忘れてマナは思う。

「まったく…手間のかかる」

小さな呟きがして、猫の体がふわりと宙に浮いた。

猫はようやくくじたばたと空中でもがき始めた。しかしその努力もむなしく、小さな体は空中をすべるように進み、たたずむ人影の手元に移動する。空中に浮いたままなのは、やはりスイも猫に嫌悪を抱いているせいなのかもしれない。

「エル様の魔力…少々弱いのかもしれませぬ」

猫のリボンに目を止め、独り言のように言った。

「…っ！申し訳ありません。気づかず…っ」

ようやく「奇妙な気配」の正体に思い当って、マナの血の気が更に引く。いくら滅多に顔も見られない相手とはいえ、自分が仕える主の気配一つ読めないなどと、失態以外の何物でもない。

反射的に頭を下げた姿勢のまま、マナは心臓の暴れる音を聞いている。恐らく隣では、手首の痛みも忘れてネルムが同じように頭を下げているに違いない。

そんな二人に、冷たい一瞥をくれてスイは緩く首を振った。

「咎める気はありません。以後気をつけなさい。」

言いおいてスイは踵を返す。二人は頭を上げることができないまま、靴音が遠ざかるのを待った。

やがてその気配が遠くなったころ。

脱力してしゃがみこんだマナに、ネルムが思いだしたようにぼつりと言う。

「なあ、もしかしてさ…」

「…何？」

見ればネルムは己の手首の傷を確認しているところであつた。どうやら出血は止まったらしい。

「この間触れが来ただろ。エル様が珍しい生き物を飼うって。」

「ああ、使い魔にするんじゃないかって噂の…」

その時二人の脳裏に浮かんだのは、先ほどの白い猫。

俊敏さに欠ける、どこかぼんやりとした印象の、獣。

「あの、猫？」

「たぶん…」

偉い人の考えることはよく分からない、と二人は揃って重い息を吐いた。

「怪我は？」

空中に猫を浮かべたまま、スイ・キールはそっけなく尋ねた。案じるといふよりただの確認のような、事務的な口調で。

「ない…です。…すみません…」

応じるのは浮かべられたまま移動させられている猫、言わずと知れたスノウである。

エルからの外出許可が下りて3日。魔物ばかりの城をすぐさま探索する勇気のないスノウは、つい昨日まで相変わらずの生活を送っていた。

外に出たい、あわよくば逃げたい。そんな気持ちは山々だったのだが「猫なんぞ八つ裂き」という当初のエルの脅しがしっかり利いて

いて、どうしても恐怖が先に立つ。だが、いつものようにスノウに小魚（煮物）を持ってきたアイシャが窓辺で悶々としているスノウを見て、言ったのだ。

「お前、そのまんまじゃ太るんじゃないかねえ？」

「…っ！！」

食事が低カロリーとはいえ、確かに上げ膳据え膳。しかも本来人間であるスノウには縄張りを散歩する、なんて習性もない。外出禁止も手伝って現在運動不足な自覚はあった。

このままじゃいけない、そう思い勇気を振り絞って運動、もとい探索に出た結果、こうしてスイの世話になっている。

スノウはそつと溜息をついて、スイの表情をうかがった。

スイは相変わらずの冷静沈着な面持ちで、その胸中はさっぱりわからない。

だがスノウにはスイが不機嫌である確信があった。

理由は簡単。

エルが猫を己のベッドに連れ込んだことである。

ばれるや否や、アイシャは予想通り火を噴かんばかりに怒り、その矛先はこれまた予想通りスノウだった。ベッドに猫の毛が散れる、とまるで姑のような小言から始まり、猫の与える悪影響（偏見）を延々とスノウに言い続けた。「そんなこと言われても」というのがスノウのもつともな言い分だったが、発言したところで火に油を注ぐだけなので、黙ってやり過ごす。

一方のスイは、不穏なオーラを全身から放ちながらも、何事もなかったかのように普段どおりにエルと会話していた。それはそれで…むしろアイシャより怖い、とスノウは思った。

もう二度とゴメンだと、スノウは固く誓ったのだが。スノウが誓ったところでどうにもならないのが現実である。

気づけば寝てる間にエルに拉致されている毎日が続いている。こうまでされて目覚めもしない呑気な自分が情けないが、そこはエルが何かしらの魔法を使っているのだと無理に納得していた。

「あのー…さつき、あのひと達…その、えらくびくびくしてたけど」
「そうですね。それが何か」

「スイは…」

呼びかけてふと口ごもる。

呼び捨てて大丈夫だろうか？アイシャの烈火の如き怒りっぷりが思い出され、躊躇う。チラリとスイを伺って目立った反応がないことに少し安堵して、言を継いだ。

「スイは、その、偉いの？」

言ってから「この聞き方はまずい」と気づいたが、口からでた言葉は戻らない。尋ねたいのはこの城におけるスイの立場なのだが、どう尋ねればいいのか、また尋ねてもいいものなのかかわからず、結局微妙な言い回しになってしまった。更に機嫌を損ねやしないかと内心冷や汗をかきながらスイの反応を待つ。

「…ええ、そうなるでしょうね。少なくとも彼らよりは”偉い”立場にあります。」

ややあつて、あっさりとしてスイが頷いた。

「私はエル様の兵を指揮する立場にありますから。」

「指揮する…スイは軍人なの？」

「それを言うなら、すべての魔物は軍人になりますよ。私たちはすべてがすべて、戦うために生きる種族ですから。」

感情をめつたに表さないスイの瞳が、このときばかりは誇らしげに煌いた。

スノウは少し意外な面持ちでスイを見つめた。見たところ、武人というより文人といった風情のスイである。長くずるずるした衣服をとってみても、およそ戦闘向きではない。勿論、そういう状況になれば衣服などいくらでも替えるだろうが。

「アイシャも私と同じ指揮官です。アイシャ・ヴォルグ、と聞けばこの辺りで知らぬ者はいませんよ。」

「え、そうなの？」

確かにスイが武人というよりはじっくりくるものがある。その口ぶ

りから相当な有名人：指揮官なのだから当然と言えば当然なのだが、
だがあのアイシャにそんな役職が勤まるとは、と当人が耳にすれば
怒り狂うこと間違いなしの感想を抱く。

それに、とスノウはアイシャを思い浮かべた。

アイシャの性格はひどく戦闘向きだ。好戦的で短気。けれど外見は
スイ同様、決して筋骨逞しいわけではない。雰囲気こそ粗暴だが、
それらしく装えば文人といっても差し支えのない容姿をしているの
だ。

そんな、一見すると他の魔物より脆弱に見える彼らが、あれだけの
魔物を従え統率しているという事実はスノウに小さな衝撃を与えた。
考えてみれば「長」たるエルですらあの外見なのだ。

魔物の強さが外見に左右されないのなら：やはりこれまで「人間」
の世界で得た情報はその殆どが誤解に満ちているものということに
なる。

「二人とも強いんだね」

口調だけは呑気なスノウの相槌に、スイは緩く首を振った。

「私たちなど雑魚と変わりありません。魔王に侍るものたちに比べ
れば、私たちのそれなど児戯に等しい。」

謙遜、ととるにはあまりにもその声が真剣で。

「魔王……」

「そうですね、あなた方が倒そうとしている存在。我らの王です。」
スノウは記憶のページを手繰る。メリルやフレイに散々教えられた
情報だ。

すべての魔物を従えるという、強大な力を誇る魔王。不毛の地に屹
立する巨大な岩山、その頂に聳える漆黒の城が、虚空城と呼ばれる
魔王の居城だ。

果たしてそんな場所など存在するのか。存在するとしても城など
或いは「王」など存在するのか。限りなく伝承に近い、それでもそ
の王さえ倒せば勝利できるという僅かな望みに縋って、多くの勇者
が目指したもの。

そうか、「魔王」は実在するのか。
安堵半分、不安半分でスノウは思う。

「魔王の元に集うのは、貴族の中でも選ばれたごく一部。兵士は100万とも1000万とも。」

「貴族って？」

「私たちにも階級があります。そうですね、人のそれと同じように考えてもらっても構いません。人の世界に王や貴族、兵士がいる同じようなものです。人と違う点といえば…ここでは力がすべてであるということ。」

スノウの体が下降を始め、思わずきよるきよると辺りを見回す。

「この先なら大丈夫でしょう。」

言って、スイはスノウを床に下ろした。ひんやりとした感触に、訳もなくほっとする。

「スイも…貴族なの？」

ここで立ち去られてはたまらない、とスノウは勢い込んで尋ねる。折角の機会だ。情報は得ておくに越したことはない。次の機会はいつ巡ってくるとも知れないのだ。

「ええ、そうです。私やアイシャは下級貴族：エル様のような上級貴族にお仕えしているものが殆どです。」

「エルは上級貴族なんだ…」

なにやらよくわからないが、何となく階級的には上のようだ。無意識に呼び捨てたことに、スイは大した反応も見せず、淡々と続けた。「私たち下級貴族は数千、上級貴族は数百存在します。その更に上に六將軍が存在します。」

「六將軍って？」

「魔王の軍勢を指揮する、王に次ぐ実力者です。彼らはそれぞれ己の軍団を持っています。そしてその軍勢に加わるのが上級貴族：つまりは下級貴族や魔族、魔人、魔獣を従えた軍勢です。」

「…ええっと…」

聞きなれない言葉が次々に飛び込んできて、うまく整理ができない。

上級貴族はエルのような魔物、下級貴族はスイやアイシャ、その下に先ほど危うい目にあわされた魔族：魔人だか魔獣だかは分からないが、そういった類の魔物が連なっているのだろう。

その上級貴族だというエルの更の上に、六將軍と呼ばれる存在がいる。上級魔族はエルだけではない筈だから、彼らの軍勢は芋づる式に増えていくことになる。

そういつた存在が、恐らく6つもあるとなると 魔王の軍勢や如何に。

「…わあ…すごい…」

たかだか一介の「勇者」が対処しきれるものではない。

世界中の国が兵を出し合つて、それでも尚勝利は難しい。何せ相手は雑兵からして「魔物」と人々が恐れる存在なのだ。

「…あなたが見ているのは氷山のごく一部。わかりますか、勇者。

これが人間が戦いを挑んでいる相手です」

ふと顔を上げると、スイの金色の目とぶつかった。アイシャが燃え盛る炎の色なら、スイは年月を重ねた芳醇な林檎酒を思わせる、透明な色。

「私たちの半分も生きない身で、倒せますか？」

スノウはぱちぱちと瞬きをして考える。

スイはこういいたいのだろう。自分たちにすら勝てない人間が、そんな大軍を相手に勝てるはずがないと。だから戦いは無駄なことだと。

確かに、そうだと思う。

漠然とした情報に翻弄されて、ただ「魔王」を倒すのだと言われ続けてきた。がむしゃらに それこそ犬死とも呼べる犠牲を払ってきた人間。

けれどここにきて初めて、「魔王を倒す」ことが現実感を帯びてきた。

魔王を倒すことはすべての魔物を敵に回すこと。

「そうだね。そう…思うよ」

スイが静かな瞳で見返した。その言葉を予期していたかのように。「俺だつて死にたくないし…今の話を聞いたら、尚更勝ち目ないっ
て思うし。」

犬死にしか思えない。それはスノウの紛れもない本音でもあった。次々と送られる勇者は一人も戻らず、仲間たちは命を落とす。

人を救うため。救世主となるため。魔王を倒すため。その大儀のため、儚く死んでいく。

魔王を倒せばどうにかなる、などと本気で信じているはずはない。魔王の存在すら怪しかった状況で、「勇者」は何のために命を捨てる必要があるのか。

それは記憶を失い、旅をしていく中で常々スノウが思っていたことだった。

小さな街を救い、少しずつ魔王に近づいていく。そう誰もが言っていたけれど、そんな確証はどこにもないことも誰もが知っていた。

いつ終わるとも知れない、先の見えない戦い。

そんな日々を当然のように選んでいるメリルやフレイが不思議で、できることならスノウは選びたくないと思っていた。この身が勇者でなければ、と。

「だけど…引き返すことはできないよ」

スイが少し目を瞞った。

「何故です」

「選んだんだ、この道を。その想いを俺が無駄にするわけにはいかないんだ」

きつと「スノウ」には勇者の道を選んだ理由があった。

選ばざるをえない事情か理由か、強い想いがあったに違いない。でなければごく普通の青年が、あえて血なまぐさい戦いに身を投じる必要などないはずだ。

騎士や兵士、並いる強豪を押しつけてまで「勇者」になる必要など。ただの一介の庶民だった「スノウ」にはなかったはずなのだ。

「スノウ」が抱えていた強い想い。それを知らない「今の」スノウ

が勇者をやめてしまうわけには行かない。「スノウ」が必死で得た
「勇者」を簡単に捨ててはいけけないのだ。

「意外ですね」

ぼつりと落ちた呟きに、スノウは我に返った。

「…えっ？」

「正直、あなたにそれだけの覚悟があるとは思いませんでした」

「へっ？覚悟っ？」

覚悟なんてない。それがあつたのは記憶を失う前のスノウである。

「その姿のあなたからは想像もつきませんが…それなりに誇りと自覚がおりよう。」

スイはスノウから急に興味をなくしたように、視線を外す。

寝められているのか貶されているのか判断つきかねて、スノウは瞬きを繰り返す。スイの誤解を解くべきかもしれない、と思い直して口を開く。

「それでしたら私が口を挟む必要もありませんね。どうぞ今の話は忘れてください。」

立ち去りそうな気配を感じて、スノウは慌てて呼び止めた。

「すっ、スイツ」

「…なんでしよう」

渋々といった調子でスイが振り向く。

「その…どうして俺に、そんなこと…」

いくら軽んじられていても、スノウは「勇者」。人間であり敵であることに変わりはない。

「単なる気まぐれです。」

放り投げるように言っつて、スイは少し首を傾げて言葉を継ぐ。

「あえて理由をつけるなら…安穩と敵地あなたで過ごしている勇者に少々苛立つた こんな所でしょうか」

さらりと言っつてあるかなしかの笑みを口元に履く。珍しい表情の変化だったが、セリフがセリフだけに素直に感動もできない。

「…っそ、そうですか…」

尻尾をぴんとたてて、スノウは思わずあとじさる。

「スイ…もしかしてまだ…その、怒ってるよね？」

「どれですか？」

何がではなく、どれが、とくるところが恐ろしい。そう問われても思い当たる節はそれほど多くはないのだが。スイはどれに怒っているのだろう。或いはスノウの気づかぬどれかに怒っているのだろうか。

「あ…ええと、悪気はないんだよ。ただ目が覚めたらいつもエルのところにいるっていうだけで…」

とりあえず、最も可能性が高そうな案件について弁解する。何せ、毎回スノウには弁解の余地が与えられていないのだ。こんな状況でもとりあえず自発的行動ではないことを説明しておきたかった。

「ええ、わかっていきます。あなたにそんな度胸があるとは思っていません。」

「そう、よかった…」
胸を撫でおろして…ちよつと切なくなる。

「あれほど妙な行動は控えてくださるよう申し上げているのですが…時期が時期ですし」

「時期？」

「……忙しい時期なのです。」

少し躊躇う素振りを見せて、スイが言葉を濁した。あまり聞かれないことらしい。

スノウはやたら忙しそうなエルを思い出す。そういえば最近忙しいのだと本人も口にしていた。

大方「仕事」とやらが忙しいのだろう。エルも大変だ…などと呑気に考える。

「では私はこれで。私も制圧に加わらねばなりませんので。」

「あ、うん。ありがとうスイ…」

ふとスイの言葉に引っかかりを覚える。

踵を返して足早に去っていく水色の後姿を眺めながら、スノウはぼ

んやりと考える。

スイは「制圧」と口にした。それはつまり戦いを 恐らくは人間との戦いを指すのだろう。

人間と魔物との戦い。

ついこの間までスノウはそこにいた。人間側の希望として、魔物を倒すために。

勿論、実際に倒していたのはメリルやフレイや、多くの仲間と派遣された軍兵士たちであったけれど。

それがまるで遠い日のことのように。

自分が何者なのか、何をしているのかわからなくなる。

倒すべき魔物たちの城に、こうして存在する自分は一体「何」なのか。

自分の感情の中にばかりとした空洞があることに、スノウは気づいた。

己の情けなさや不甲斐なさを痛感し、悔い、罪悪感に苦しめられる。それが普通の「勇者」の心理なのだろう。スノウにもその感情が全くないわけではない。だが、希薄なのだ。頭ではそれらを理解しているのに、強烈な感情が伴わない。まるでガラス一枚隔てた向こう側にあるような、近くて遠い感情。

こうしている間にも、メリルやフレイは戦っているのに。そう思っても、心は揺れない。

『お前は俺じゃないだろう？』

いつかの悪夢が胸の内を蘇る。

勇者を志した若者。正義感溢れる、勇者。

果たして、それは本当に「自分」だったのか。この現実こそが悪い夢なのではないだろうか。

「…本当に、俺…なのかな…」

ひとり取り残された薄暗い回廊で、スノウは虚空をみつめて呟いた。

7・スイと猫（後書き）

更新間隔がだいぶ開いてしまいました…すみません（^^;）
しばらくは説明っぽい話が続きます。

8・魔物の事情(前書き)

下方に挿絵つけています。

8・魔物の事情

勇者は得てして、自信の塊だ。

人々が困難と思う事に、強い信念を持って挑む。それは強靱な精神力と揺るぎない自信を必要とする。

勇氣あるもの、勇者。それは己に確固たる自信があるもの。だから、この日この時ばかりは、スノウも「勇者」であった。

「大丈夫だつて言つてたよね」

そう、心もち低めの声で尋ねるのは、机の上に鎮座した白猫、スノウだ。

「いや俺もそう思つてただけどな？おかしいな…」

その正面、椅子に腰掛けるエルは、困惑気味に応じている。

「危うく消し炭にされるとこだったんだけど」

スノウが尖った口調でなじるのは、先だつての一件である。エルに「大丈夫」の太鼓判を押され外出した先、とつと他の魔物に見つかり危うく処分されかけ　スイに助けられた。

「らしいな。昨日のことはスイから聞いてる…もしかして、怒つてるか、勇者」

「別に…」

らしくない強気な態度に、エルが首を傾げて問う。その面白い様子のエルから視線をそらしつつ、スノウは言葉少なに応じる。

確かに、スノウは憤つてはいる。ただそれは、消し炭にされかけた事実起因するものではない。それは致し方ない、と彼らしい諦めで決着はついている。

スノウが憤っているのはその後。不案内な城内で迷子になったことだ。

スイに助けられた後、スノウは探索を諦めもとの場所に帰ることにした。しかし、困った事に現在地がわからなかった。頼みの綱のス

イは既に立ち去った後であったし、このまま闇雲にうろつろしてもまた違う魔物に見つかからない保証はない。しかもこのリボンはどうやら当てにならない、ということとはたった今身をもって知った。出直す必要はあれど、出直そうにも迷子ではどうしようもなく。

城の外観からある程度の予想はついていたから、それを頼りに歩き回ればそのうち着くだろう、と樂觀視していた。ところが、一向に見覚えのある場所に行きつかない。

さすがに焦り始め、必死になり 散々駆けずり回った挙句、ようやく見覚えのある部屋に辿り着いたのである。今思い返しても、どこをどう走ったか記憶にない。気付けば、見覚えのある扉が目の前にあった。

スノウ自身奇跡に近い幸運だと思っていた。

だから勿論、自分の功績などではないのだが「自力」でたどり着いたという事実は、スノウに少なからず自信を与えた。

そしてその自信の力を借りて、現在スノウは強気につた憤りも含め、エルに直訴していた。 窮地に陥

「魔力がいささか弱いようですよ」

スイが息を吐いて指摘する。

それにエルは軽く頷くと、そのままりボンを前に無言。なにやら真剣な表情で、思案しているものらしい。

魔法に疎いスノウにしてみれば、ちよつと強めに魔法をかけなおせばいいのでは？と思う。悩む理由などないような気もする。

「かけなおすしかないですね」

アイシャがスノウの思考を読んだように口にした。それに対し、エルは難しい表情のまま頷く。

「そう…だな。うん、かけなおすしかないな…」

ひどく面倒そうな、疲れた口調でエルが言う。どうやら難しい魔法のようだ。

その一瞬、アイシャがスイを一瞥した。

スイは少し控えめにアイシャを見返して、エルに視線を戻し、言っ

た。

「エル様、まだ…戻りませんか」

エルは表情を変えることなく、再び頷く。

「まあな。以前よりはマシになったが本調子ではないな」

言ってエルは顔を上げ、不意ににこりと笑った。

「そう不安そうな顔をするな。以前より少し時間がかかる、それだけのことだ」

「エル様…」

困惑気味にアイシャは口を開きかけ、言葉を探しあぐねているよう。

「仕方がない、今日一日は外して…また明日にはちゃんとしたやつつけてやるよ。」

先ほどの難しい表情が嘘のように、機嫌よくエルはスノウに言った。

「だから今日は…ああ、アイシャにでも遊んで貰え。」

俺も遊んでやりたいんだが忙しくてな、とエルは笑う。

いきなり話をふられたアイシャは、大きく目を剥いてエルに詰め寄った。

「ちょ、エル様っ！？何でオレがっ」

「いつものことだろう。問題が？」

確かに現在スノウの主な世話（食事など）はアイシャがしている。

エルは夜になってこっそりスノウを拉致しているだけだ。それはやめてほしい、というのがアイシャとスイの共通の見解だ。勿論、被害者であるスノウにとっても同じく。

「やってるのはエサやりだけです！こんなのは放っておけばいいでしょう！」

スノウを指差しアイシャが主張する。激しく詰め寄るアイシャを、

エルは笑って取り合わない。

「いいだろう、確か今日は何もなかったな？」

「そうですね…猫は嫌いなんですってば」

両者のやりとりを眺めていたスノウは、短く息を吐いて言う。

「…別にうるうるするつもりもないから」

昨日の一件で懲りたし、当分はいらぬ。リボンのない今は確かに絶好の逃走チャンスではあるけれど。

これまでアイシャに「遊んで」もらった記憶はないし、そうして欲しいとも思わない。それに元々「猫」ではないのだから、遊び相手など必要ないのだ。

どうもエルはこちらが「人間」であるという認識が薄い気がする…と、自身の猫生活の順応の速さを棚に上げてスノウは思う。

エルはスノウの言葉に一瞬視線をさまよわせ、「安全のために」と補足した。今考え付いたものらしい。

「いいよ別に…。大人しく寝とくし」

首を振って、エルの机から軽く飛び降りる。首元で鈴の音がしないことに違和感を覚えて、そんな自分に慥然とした。

自信に後押しされる形で、これまでの鬱憤も含め強気に出てみたものの、エルとアイシャのやりとりをみていたら気が萎んでしまった。よく考えれば、エルを詰るのもなんだかおかしい気がする。

つらつら考えているとききなり首根っこをつかまれた。

その気配にまったく気づかなかったスノウは、驚いて思わず猫めいた悲鳴を上げる。

「わかりましたよ…今回だけですからねっ」

ちよつと怒り気味にアイシャがエルに言う。その手はスノウの首をしっかりと掴んでいる。

「ああ、悪いがよろしく頼む」

少しも悪びれない態度で、にこにこエルが手を振った。

「っえ、いいつてアイ…」

「うるせえヘタレ。…おい、お前も来いよ」

言いかけたスノウをぴしゃりと遮って、扉を開けながらアイシャはスイに声をかける。

猫嫌いのスイに猫の相手？と思ったスノウだったが、意外にもスイは素直にアイシャの言葉に従った。

「…では、私たちはこれで」

スイが振り返りつつ、言う。

スノウの視線の先でエルは笑顔のまま頷いた。

その笑顔にどこか陰を感じて、スノウは首を捻る。きっと先ほどの意味ありげな3人のやりとりがその原因だろうと感じてはいたが、その理由については分からない。また、わかったところでスノウには関係のないことである。スノウが共感できる類ではないだろう。何せ人間と魔物^{エル}は違う生き物。何もかもが違う。抱える闇とて人の心で推し量れるものではないだろう。

アイシャにぶら下げられた状態で運ばれながら、そんなことを考えて、ふと気づく。

今エルの心を理解したいと思わなかっただろうか？

そう気づいて、スノウはふるふるすると首を振った。

何を甘いことを言っているのか。

スノウが元に戻るためには、エルの弱点を探らねばならないのだ。

そのための分析ならまだしも、理解し共感し 同情するなどとは許されない。

馴れ合っでどうする、と己の呑気さに眩暈すら感じられた。

「どこに行くかなあ」

だから、アイシャのそんな呟きなど軽く無視^{スルー}していた訳で。

ちなみにその呟きを仲間であるスイですら黙殺していたのだから、アイシャの言葉は完全に独り言になっていた。

「おい、何とか言え、ヘタレ猫」

当然ながらそのしわ寄せはスノウにくる。アイシャは問答無用でスノウの首をぎゅうぎゅう絞めながら、そんな勝手な発言をする。

「く、苦し…締まってる…」
手足をじたばたさせながら訴える。やっぱり魔物なんて理解できない。

「では後は任せました。」

そのやりとりを後ろから眺めていたスイは、前置きもなしに言うところどこかへ歩み去ろうとする。

「あつこら、逃げんな、スイ」

「逃げるとは人間きの悪い。任されたのは貴方でしょう」

「いいじゃねえか。付き合えよ。お前だつて暇だろ」

「暇ではありません。一緒にしないでください」

「暇だろうが。一日中外を眺めてぼーっとすんのは暇つてことだろ」

「…単に外を眺めている訳ではありません。あれは訓練のひとつで」

「何の訓練だよ。それなら剣でもちつたあ使えるようにすりゃいいんだ」

「ご挨拶ですね…貴方よりは使えます。」

「馬鹿言え、オレの方が上だ。お前のは剣じゃなくて魔法での反則技だろ」

「それを言うなら貴方だつて、力技でのごり押しでしょう」

ぴりぴりした空気を放ちだした二人の間で、スノウは小さくなつていた。スイに気を取られて手の力は緩んだが…このままだと二人の間で黒焦げにされそうだ。

「あー…あのさ、二人とも…」

スノウは果敢にも仲裁に入ってみる。

「その…喧嘩は」

無駄に笑つて 猫の姿なので笑うことはできないが、スノウは言うてみた。途端に二対の鋭い視線に射すくめられ、それ以上続けられない。

「まあ確かに…こんな問答埒が開かないな。」

結果として仲裁には成功したようである。アイシヤは軽く肩を竦めて、刺々しい空気を引つ込める。スイもまた、渋々ではあつたが、アイシヤにならつて緊張を解いた。

「あまりここでうるうるしていると、誰とかち合うかわかんねえし…とりあえず階層移動するか」

アイシヤの言葉にスイは不承不承といった態で頷く。ここに長居したくないのはスイも同じであるらしい。

彼らが向かっているのは廊下の奥、闇に沈んだ一角である。

その場所にスノウは覚えがあった。

昨日、とりあえず廊下の突き当り目指して進んだのだ。薄暗く沈んだ一角に足を踏み入れると、一瞬視界を奪われて　　気づけば何やら明るい廊下に出ていた。特にコレと言って変化を感じなかったから、廊下の「先」にでたものと納得していたが、今思うと微妙におかしい。

この城の最高権力者であるところのエルと、昨日スノウを消し炭にしかけた二人が近くににいるなんてことあるだろうか。アイシャやスイより「下」にある二人ならばもう少し離れた場所　　それこそ違う階層にいてもおかしくないはずだ。

「下…あんまり下にいくと面倒だな。かといって外はまずいし…ああ、お前の部屋とか？」

「もう一度言ったら、その首跳ね飛ばしますよ」
さらりとなんでもないことのようにスイが言う。

「冗談だっつーの。まったく堅いやツだな。」
アイシャも今度はいきり立つことなく、さらりと流した。

「まあいいか、下でも。俺らの階層なら…確か他の連中は出払ってたよな」

「そうですね。不本意ですが、そこなら他の階層よりマシでしょう。メールもファザーンも…確か今日は不在のはずです」

スノウはちよつと首を傾げる。やはりエルと彼らの階層は別になっているようだ。

聞いたことのない名前と思しき単語に、改めて魔物の規模の大きさを思う。

「よかったーあいつらいると面倒くせえからなー」

アイシャは渋面で首を振りつつ、暗闇に踏み込んだ。突如世界がぐにやりとゆがみ、スノウはじたばたと暴れる。

「こら、動くなって。大丈夫だから」

その言葉どおり、アイシャの言葉が終わるか終わらないかの内に、元通りになる。ほんの、瞬きほどの出来事。

「さあて、誰もいないな」

アイシャは一步踏み出して辺りを見回す。

そこは暗闇などではなく、ごく普通の廊下があるだけだ。全く同じ、と思いかけてスノウは首をめぐらす。何の変哲も見受けられなかったが、どこか違和感がある。

「あれ…ここ違う？」

「そりゃそうだ。ここは俺たちの階層だからな。…ってことは何か、昨日お前気付いてなかったのか。」

鈍いやつだな、とアイシャはからから笑う。

鈍いも何も、スノウにはいまいち仕組みが分かっていない。昨日も同じ体験をした記憶はあるが、出た場所が…なんと云うか違う気がするのだ。

「あの一角は転移の魔法陣が設置されています。望む場所に転移できるようになっていますが…力の弱いものが使くと飛ばされる場所が指定できない、という難点がありますね。」

スイの丁寧な解説に、スノウは納得する。

「ちなみに貴方が昨日転移したのは、ここより更に下の階層、魔族たちの領域です。」

スノウの脳裏に昨日の二人組みが浮かぶ。

蛇のような男と、皮膜の翼の　恐らくは蝙蝠の類の女。こうして比べてみれば、姿かたちはともかくとしてアイシャやスイとは明らかに何かが「違う」とわかる。

それは恐らく彼らの強さに起因しているのだろう。

そうか、あれが魔族というものなのか。

これまで獣型の、スイ言うところの魔獣しかみたことのなかったスノウにとって興味深いものだった。一人納得して頷いていると、アイシャがおやといった顔をする。

「ん？何、お前わかんの？スイ、こいつに話してやったのか。」

「…必要に迫られたもので」
歯切れ悪くスイが応じる。

スノウは首を捻る。別に必要に迫られていたような記憶はなかったようなのだが。

「ふーん。お前なんだかんだで可愛がつてんじゃん？」

アイシヤは意地の悪い笑みを浮かべる。

「可愛がる？馬鹿なことを。猫など嫌いです。人間も。」

林檎酒色の双眸を鋭く眇めて、スイはアイシヤを睨みつける。その声と視線にこめられた殺気にスノウは思わず身を竦ませる。

だがアイシヤの方は慣れたもので、

「オレも嫌いー。だってあいつらときたら鳴くし引つ掻くし…人間もそんな感じだし。」

と、むしろにこにこ笑って答える。ネコと人間は同列なのか、とスノウはちよつと悲しくなる。まあその人間代表である勇者がネコになつていて現状で嘆くのも何やらおかしいが。

しばらく歩いたところで、アイシヤはスノウを床に下ろした。

「この辺りなら日暮れまでは大丈夫だろ。あんまうつくなよ、あちこちに魔法陣が敷かれてるからな。」

釘を刺しながら、アイシヤはスノウの頭をぐりぐり撫でる。スイが呆れ顔で眺めているが、アイシヤは気にしていないようだ。

「そんなに…たくさんあるの、それ」

アイシヤは少し考える素振りを見せて、言う。

「だな。基本的に各部屋に一個はあるだろ…で、廊下に二つ…ああ、この階層だけなんだけどな。下に行けば行くほど増えてくぜ。何せ便利だからなあ」

「それ間違つて飛ばされたりするんでしょ。危ないことはないの？」

「場所によって制限があるのです。あと魔力によつても。だから下の階層の者がうっかりこの辺りに飛ばされるようなことはありません。」

スノウは「ふうん」と適当な相槌を打つ。何やらよくわからないが、うまく調節されているらしい。なるべく魔法陣とやらには近づかないようにしよう、とスノウは肝に銘じる。もうあんなことはごめん

である。

「お前が魔力強くなればどこでも思うままだぜ」

キヒヒ、と笑ってアイシャが言う。

スノウの目がきらりと光った。

そうだ。あの転移の魔法陣とやらを使えば、魔法石も転移魔法を覚えることも必要ない。最悪、エルにこの「ネコ」を解いてもらえなくても、逃亡さえできればいつか解く方法だってみつかるだろう。

そう、魔力が強くなりさえすれば…

考えてスノウは落ち込む。そもそも魔力があればこんな所にいないのだから。

魔法の才がからきしということと魔力がないこととは直結しない。魔力を持っていても使い方を知らないだけの人間は数多く存在する。ただ、スノウの場合は魔法の才も魔力もなかったただけの話で。

「おー悩んでる、悩んでる」

スノウの苦悩は相手に筒抜けだったらしい。

スノウの前で、アイシャはにまにまと笑っている。

「魔法ひとつ使えぬ身で悩むだけ無駄です」

ずばりとスイが言えば、

「仲間と一緒に転移しそびれたんだってー？間抜けだなあ」

痛いエピソードをアイシャが突いてきた。

「っあ、あれはっちょっとその…ぼんやりしてて」

凶星なだけに反論のしようもなくごにごによと返す。言えば言うほど墓穴を掘っている気がしないでもないが、反論しないでいるのも何やら悔しい。

「ぼんやりって、殺気ばりばりのエル様を前に？お前そりゃ勇者として問題アリだろ」

「見ようによつては大物ですね」

スイの発言は、勿論フォローではなく嘲笑である。

その証拠にスノウを見る目は冴え冴えとして、軽蔑すら感じられる。彼らからすれば 否、一般の見解からいって戦闘中にぼんやりする

ことは論外であるらしい。当然である。

だが別にスノウとてそうしようと思っただけでそうした訳ではない。スノウにも…鈍いなりに危機感はあるとある。ただあの時はそれすらもうまく作動していなかったように、スノウには思えた。

真紅の綺麗な紅玉。殺気立って煌いたエル双眸が、ひどく脳にこびりついている。恐怖に竦んだというより、あの瞬間、スノウの中の何かが反応したのだ。

つらつら思い返していると、アイシャに小突かれた。

「おい、またぼけつとしゃがって。変に呑気者だよなあお前…まったくエル様といい…」

「…エル？」

アイシャがぼろりとこぼした言葉に、スノウは食いついた。まさに今考えていた人物である。

「あーいや…何でも…」

「エルも…呑気者なの？」

「なわけねえだろ！！このオレ様の主だぞ！！ヘタレとは違うんだよっ」

「でもそう言ったよ」

「言ってねえ！！あれだ…ええとっ、夢見がち！！」

乙女が。

アイシャのあんまりな発言に、思わず胸中でツツコミを入れる。己の主に対して似つかわしくないことこの上ない表現である。

スノウの脳内でエルは豪快なイメージであったから、アイシャの発言がどうにもエルとかみ合わない。

「つくづく馬鹿ですね。…ええ、まあ確かに少しおっとりした所が
おありでした、以前は」

スイはぱつさりと切り捨てた後、丁寧に補足する。

自己嫌悪に陥ってか、肩を落として俯いているアイシャを一瞥して、スノウはスイに尋ねる。

「以前は？」

エルと「おつとり」がやはりじっくりこないがスイが言うならそうだったのだろう。

「ええ。生来そういう所がおありでしたから。最近では城主としての自覚もでてきたご様子で立派になりましたが。」

「となるとあの豪快なエルは彼の努力の賜物ということか。しかし、いくら考えても演技には見えない。無理をしている風にも。ほんと、一時はどーなることかと思つたよ。鍛錬には見向きもしねえし、指揮は執りたがらねえし仕舞いには部屋に籠って妙な研究しやがるし…」

「アイシャ、しやがる、とは何ですか。」

スノウの呼び捨てには反応しないスイだが、アイシャの無礼な言葉遣いは気になるようだ。自己嫌悪から復活したアイシャに突っかかる。

「うるせえ。お前だつて嘆いてたじゃねえか。地下に籠って本ばかり漁つてつて」

「それは…自覚をもつていただきたい、と再三申し上げはしましたが」

どうやら以前のエルは部下にとつてはちょっと困つた趣味に走つていたらしい。これはもしかしてエルの弱点に繋がるのでは、とスノウは聞き耳を立てる。

「変な研究…」

「ああ、俺らは戦うのが本分だつてのにエル様ときたら…戦うのは嫌だつて研究とか言つて籠つちまつたんだ。おかげで三下の連中にまで馬鹿にされるわ、同胞連中に馬鹿にされるわで…もう齒痒くて齒痒くて」

余程鬱屈がたまっていたのだろう。アイシャはずらざらとこれまでの憤懣を並べ立てる。

「エル…兄弟いるの？」

「いるいる。つーか兄弟は多いほうなんじゃねえの、上級貴族の中でも。なあ？」

「そうですね。軽く20人はいますからね…まだ出てくるかもしれない
ませんし」

「20人？」

「この王族のハーレムだ。思わず目を丸くする。」

「殆どがエル様には遠く及ばねえ雑魚ばかりだけどな。力じゃかな
わねえ癖にいつぱしの口ばっか叩きやがる。」

アイシャの金色の瞳が熱を帯びてぎらつく。

「アイシャ、興奮しすぎです。殺気が出てますよ」

スイが冷静にたしなめた。

「お前だつてむかつくだろ。そのあんぽんたんな奴らが、もうすぐ
この城にやってくると思うとー!!」

「それは勿論ですが…今腹を立ててもどうしようもないでしょう」
スイはどこまでも冷静である。

「お客なの？」

「客じゃねえ!! あんなの、敵襲と一緒にだ。まとめて噛み千切つて、
いっぺん残らず焼き払ったって十分な扱いだ!!」

「同感です。エル様のご兄弟はいわば最も身近な敵ですからね。隙
あらばこの城を奪いにくる輩ばかりです」

「どうやらエルの家庭環境は随分と殺伐としたものらしい。それとも
魔物と言つのはえてしてこういう生き物なのだろうか。アイシャも
言っていたように、「戦いが本分」なのならば。」

「じゃあ、もしかしてエルやふたりが忙しいのって…」

「おや、気付きましたか。頭の回転はそれほど悪くないのですね、
意外です。」

「すらすらとスイが毒づく。スイに嫌われているのは自覚しているが、
さすがにぐさりとくる。」

「今度来るのはかなり煩い奴だからな。万々に備えて準備してんだ」
「あちこち微調整しているのですよ、罠をね…」

「優美に含み笑いをして、スイが言った。その罠がどんなものか想像
もつかないが、きつとスイならばえげつないものに違いない、とス

ノウは結論付ける。

「ま、気をつけとけよ、お前も…あ、そうか。そうになったらお前また外出禁止だな」

「そうですね。ネコ…それも白猫を飼ってるなんて知られたら、攻撃の材料を与えてしまいますし。」

「え」

「しかたねえよ。出会い頭に消されたくねえだろ？」

先日の記憶が蘇り、スノウはぶるぶると首を振る。

「あの方の気性は激しいですからね。説明なしに実力行使でしょう。」

「

「あいつの万分の一でも激しさがエル様になればなってよく思ったなあ」

「そうですね？確かにエル様には苛烈さが少ないようにも思えますが…あの方を見習っては欲しくありませんね」

「あ、それは同感。見習って欲しくねえ。あいつ思い込み激しいしねちっこいし。」

随分と嫌われている人物のようだ。しかも彼らがそれなりに一目置いて備えているということは、相当な実力者なのだろう。

「なんか…怖い人なんだ？」

呟くと二人揃って頷いた。気性の激しい、思い込みの強いねちっこい相手。

厄介な人物なのだろう。アイシヤもスイも大変だ…いや、この場合はエルが最も大変なのだろう。自分のことを完全に棚に上げて、そんなことを考えたスノウに、

「だからお前も気をつけるよ」

「（エル様の不利にならないよう）気をつけてくださいね。」

二人はそれぞれしっかりと釘を刺してきた。

「…う、うん。」

おされ気味にスノウは頷く。

あったことのない「あの方」とやらも怖かったが、それよりも無表

情なスイの方がスノウは怖かった。大人しくしていよう、とスノウは肝に銘じる。

きっと、顔をあわせるようなことはないだろうけれど。その間大人しくしていればいい。

スノウは思いもなかった

これが事件の発端となるうとは。

8・魔物の事情（後書き）

>i2702—288< この話の挿絵もどき[http://288
mitemin.net/i2702/](http://288.mitemin.net/i2702/)

10日更新を目指すと言語しながら、一月以上経過してしまいました…。

この次の方は「一方その頃…」になります。主人公陣はちょっとお休みして、ちらっとしか出てこなかった人間側のお話を…

9・遠路(前書き)

人間側のお話です。下方に挿絵あります。

湿った土を蹴立てて、二頭の馬が駆けていく。

およそ道ともよべない、獣道。よくみれば、雑草の下に僅かに煉瓦が覗く。

数十年前までは「街道」のひとつとして機能していた道であった。元々、そう利用者の多い道ではない。近隣の村がなくなり、自然と森に覆われてたまに行商人が利用する程度になっていた。その行商人も、魔物の被害が多発するにつれ通らなくなった。そんな経緯から、現在この「街道」を利用する者は皆無になっている。

そんな、足跡はおるか道の境目すらあやふやな森の中を、二頭はかなりのスピードで駆けていく。

確かな道が見えているような、或いは何かに追われているような、確固たる蹄の音。

規則正しい音から僅かに遅れて、茂みを走る複数の音がある。

馬のモノとは明らかに違う荒い息遣い。

合間に低い唸り声が混じる。

と、先を行く葦毛の馬に、横合いから黒い影が飛び出した。

現れたのは、漆黒の毛皮の狼の倍はあるうかという巨大な四足獣だ。大きく裂けた口腔には鋭利な牙がずらりと並ぶ。

巧みな手綱さばきで獣との衝突は逃れたが、速度はどうしても緩む。その一瞬の隙を獣は見逃さず、すかさず馬に躍りかかる。

鋭い牙が馬の首筋に吸い込まれ、鮮血が散った。

けれど断末魔の悲鳴を上げて地に斃れたのは、馬ではなく黒い獣の方。

馬上から振り下ろされた一閃が獣を切り裂いたのだ。

滴る血の糸を引いたまま、獣の最期を目で追うことすらせず、馬上の人物は剣を閃かせる。

背後から飛び掛ってきた別の獣を一刀の元に切り伏せ、流れるよう

な動きで剣を振るう。

流れる金色の髪、しなやかに翻る外套はみるみる真紅に染め上げられる。

翡翠の双眸に鋭い光を宿して戦うのは、魔法剣士の肩書きを持つ、

メリル・ファガード。

「魔法剣士」と呼ばれてはいたが、実戦において彼女が魔法を使うことはそう多くない。彼女の本分は剣士であり、魔法はあくまでも補助的なものにすぎなかった。ゆえにその技量は本来の「魔法剣士」に遠く及ぶものではなく、それは彼女自身もよく分かっていた。

けれど剣士としての彼女は、国内でも屈指の技量と力を誇る。一時は「勇者」の最有力候補とまで囁かれていた。

スノウ・シユネーが現れるまでは。

「メリル！」

子供特有の高い声がメリルの鼓膜を打った。

メリルの、血に酔ったような鋭い眼光が束の間緩む。声の方を確認することなく、メリルは上体を馬上に屈めた。つい先ほどまでメリルの体があった場所を、風が鋭く切り裂いていく。

断末魔の悲鳴を上げて、黒い影が二つ、茂みに突っ込んだ。

再び上体を起こして剣を揮う。手綱を取りながら茂みを一瞥すると、そこには矢が2本ずつ、計4本の矢が茂みから突き出して震えている。

フレイの、矢。

次々と絶え間なく襲いかかってくる獣を切り伏せながら、メリルは後方に視線を向ける。

メリルから数メートル離れた馬上に、小柄な姿がある。

栗色の髪に栗色の瞳、まだ12歳になったばかりの少年、フレイ・マルセナ。

幼い顔に厳しい表情を浮かべ、矢を放つ。弓につがえられた4本の矢は、恐るべきスピードで標的へと吸い込まれていく。

大部分の獣はメリルが引き受けているとはいえ、その度胸と技量に

は目を瞪るものがある。

勇者の「仲間」であるその腕は伊達ではない。

勇者選抜のために行われたトーナメント。並み居る強豪を押し付け、上位に入ったものだけが勇者の「仲間」として同行を許される。

フレイは、弓部門の優勝者だ。

普段は年相応に振る舞うフレイだが、いざ戦闘となると人が変わったようになる。メリルですら時折、彼がまだ12歳だという現実を失念しそうになるのだ。

メリルはそんなフレイからふと視線を外し、彼方の空を仰いだ。

緑陰から覗く空は薄く青い。

迫る牙と爪を易々と弾きながら、メリルはフレイに呼びかける。

「先へ！」

フレイがメリルを一瞥する。

その視線をとらえて、メリルは馬の腹を蹴る。

後も見ず、馬を走らせる。追いつがる獣の爪が外套を引き裂いたが、メリルは振り返らぬまま馬を走らせた。抜き身の剣を構えた姿勢で、手綱を操ることだけに専念する。

ここで時間を取られるわけにはいかない。

メリルの脳裏にあったのは「急がねば」という焦燥だけ。

フレイの心中も同じだろうことは、距離をあげずして追ってくる蹄の音が表している。

二人は王都に向かっていた。

魔物の「城」の存在と、新たに手に入れた情報を報告するべく。

そして、捕えられているであろう「勇者」の救出のために。

そのために援軍を、とメリルはフレイを説き伏せた。

カデイスを発つ数日前のことだ。

スノウを助けに行かないの、とフレイはメリルに問うてきた。

怪我の治りきらない体で、新調したばかりの弓を携えて。

メリルは「援軍を頼もう」と提案した。二人きりで救出など到底で

きないと判断したためだった。

フレイは渋っていたが「長と戦うには」と重ねたメリルの言葉に、結局は折れた。血気盛んな年頃とはいえ、魔物の「長」の恐怖は身にしみたまのらしかった。

そうして、メリルとフレイは王都へ馬を飛ばすことにしたのだ。

そう、きっとフレイは信じているのだろう

メリルは思う。

「勇者を救出するための援軍」というメリルの言葉を、信じているのだろう。

だが、メリルは自分の言葉を少しも信じていなかった。救出などできる筈もない。

相手は魔物。乗り込んできた「勇者」を魔物が生かしておくとは到底思えなかった。

生きていて欲しい、とは思う。どんな形であれ、生きて再会したいと。

けれどそう願う気持ちと、行動を判断する理性は別物だ。

きっと勇者は生きてはいない。

例え生きていたとしても救出は難しい。

一度は乗り込んだ城だからできるかもしれない、と以前なら思っただろう。

けれど、今のメリルにはとてもそうは思えなかった。

乗り込み、脱出できたことは「奇跡」。

或いは、すべてが仕込まれていたのでは、とメリルは思うようになっていた。

フレイには内緒で、「城」に向かったあの日から。

「城」から脱出を果たして3日目の朝。

メリルは、再び魔物の城を訪れていた。

当然ながら受けた傷はまだ癒えていない。手足には包帯を巻いたまま武器だけを新調し、単身城へと向かった。城は依然としてそこに聳えていた。

何もかもが3日前と変わらない。城のすぐ手前まで「魔物」の類を全く見かけないことも、重厚な門の前に陣取る「門番」すらも、すべてが3日前とメリルたちが乗り込む前と変わりなかった。以前のメリルなら、そのすべてに衝撃を受けていただろう。

けれど、魔物の「真実」を垣間見た今のメリルは、当然の現実と受け止めることができた。

樹木の陰に身を潜めながら、メリルはそつと前方を伺う。

そこには漆黒のごつごつとした岩でできた重厚な門。一枚岩を大きくくり抜くような形で、巨大な観音開きの門が据え付けられている。恐らく木製と思われる門は、鋭い突起物がついた鎖が幾重にも巻かれている。

そしてその門の前には「門番」が陣取っている。

額に巨大な角をもつ、狼を思わせる二頭の獣。滅多に対峙することのない「厄介」な部類に挙げられる魔物の一種だ。知能は狼とほぼ同程度だが、その力は狼より遙かに勝る。一頭で狼10頭分だといふのだから、人間にとっては脅威意外の何者でもない。

つい3日前に、メリルはその2頭を屠った。

当然ながら、そこに寝そべっている魔物は同じ種類の別個体である。それは勿論メリルにも分かっていたが。

思わずため息が漏れた。

ここには一体どれだけの魔物がいるというのか。

滅多に見ない種類の魔物が「替え」のきく門番として鎮座する城。踏み込んだ時、これまで出くわしたことのない、見たこともない魔物と戦った。どこをみても知らない魔物ばかりで、今まで信じてきた魔物の情報など氷山の一角にすぎないことを知った。

『これが真実』

胸の内でメリルは呟く。

以前からうすうすと感じてはいた。

『人間はあまりにも無知すぎる』
わたしたち

勇者頼みの人間側。勇者の仲間となってみて初めて、勇者が得られる情報があまりにも少ないということに気付いた。

魔物討伐を生業とする賞金稼ぎと、その情報量は大差ない。むしろ実戦を重ねている分、彼らの方が詳しいくらいだ。

だから勇者は 記憶を失う前のスノウは、積極的に彼らと情報交換をしていた。この城の情報とて、賞金稼ぎの一人がもたらしたものだ。

だがそれらにも限界がある。

魔王どころか魔王の城すら、どこにも見当たらない。もたらされる情報はおよそ統率や組織を感じさせるものとは程遠い、端的にいうならば獣害に近い類のものばかり。

『人間を守るために戦う。魔王も倒す。けれど…魔王は存在するの
か？』

スノウが漏らしていた言葉が蘇り、メリルは少し目を細める。

誰もが先の見えない戦いだとわかっていて。

勇者に賛同した仲間たちの内にも、メリルの内にも、それは重い澱となつて残っていた。

いつ終わるとも知れない、見えない相手との戦い。

せめて魔王の手がかりでもあれば。

そんな矢先だった。

勇者が記憶を失ってしまった。

自分が勇者であったことも、魔王を倒すという情熱も、彼のすべての記憶と共に失われた。

まるで別人のように振舞うスノウに、メリルは苛立った。

どうして「今」記憶を失ってしまったの、と。

不安定に揺れる自分の抛り所が、揺るぎなく強い「勇者」だった。

戦う意味を失いかけている自分に、確固たる自信を与えてくれるの

が「自信に満ち溢れた憧れの勇者」だったのだ。

急に年齢相応に…否それ以上に幼く頼りなくなってしまうた勇者は、メリルの拠り所には到底ならない。それどころかメリルが強くなればならなかった。

かつての勇者のように。

けれど自身がそれほど強くないことは、メリルはよくわかっていた。己の内に疑問を抱えて、それでも尚揺るぎなく立っていられるだけの強さは、ない。

だから、記憶を失ったスノウの苦悩や疑問に気付かないふりをした。あなたは強い勇者だったのだ、と言いついて聞かせて、勇者を信奉するひとりになるうとした。

『たった3人だけ…行くの？』

耳の奥で、渋るスノウの声がこだまする。

数日前、メリルが「城」に向かおうと提案した時のことだ。

多くの仲間が、記憶を失い「平凡な青年」となったスノウを見限って、去って行った。

カデイスの宿に残ったのは、フレイとメリルだけ。

魔物の巢食う、未知の「城」にたった3人で乗り込むこと。それはどう考えても狂気の沙汰だった。

渋るのは当然で、馬鹿なことと一笑に付されてもおかしくない。

冷静に　今になればわかる。

だがあの時のメリルにはどうしてもいかなければ、という強迫観念にも似た感情があった。例えばこの身が斃れても、いかなければと。

記憶を失う前のスノウが探り当てた情報。それを生かさねばいけないと、そう堅く思っていた。

けれどスノウは違った。

『強い魔物があると聞いたよ。俺達だけで…大丈夫かな？』

それは控えめな拒絶。

メリルにもわかっていた。わかっていたが、あえて知らぬふりをして「大丈夫」と言った。

頭の片隅で少しも大丈夫ではないと知っていたけれど。

『そう、なら…行こうか』

そう言っただけで困ったような笑みを浮かべたスノウを、メリルは腹立たしい思いで見つめた。

記憶を失う前のスノウに心酔していたから尚、別人のように気弱になっってしまったスノウを許せなかった。

なんの意味もない憤り。

その憤りに駆られるようにして、半ば強引にスノウを連れて魔物の城へと向かった。

しかし結果は惨敗。

メリルとフレイは撤退。勇者は、帰らない。

「私は…」

見捨ててしまった。

吐息とともに、震える声が唇から漏れるのが、なんとも滑稽だった。ぶれる感情。自分が泣きたいのか、叫びたいのか、もう分からない。脳裏に浮かぶのはあの瞬間。

現れた魔物の長を間近に、恐怖した。

あんなに強い存在がいることなど、想像もしなかった。まるで人間のような姿で強大な力を易々と揮う、魔物。

今まで相手にしてきた魔物が、単なる雑魚にすぎないということを感じた。自分では　否、自分たちでは勝てないと、悟ってしまった。

逃げなければ。

頭にあっただのはそればかりだった。だから焦って魔法を発動させてしまった。

勇者がいないと気付いたのは、安全圏に転移してからのこと。

けれど「勇者」という犠牲を払って逃げ戻ってみれば、魔物たちは変わらず街を襲っていた。

メリルたちが乗り込んだ、まさにその瞬間にも。

魔物たちは何の痛痒も感じていないかのように、その後も変わらず

街を襲い、人々と戦う。

自分たちは、一体何をしたのだろう？

胸の中に去来する虚しさ。失った代償の大きさと、日々重くなる罪悪感に苛まれ、メリルはこうして再び城に来ていた。

何かを変えるためではない。

人のため、誰かのためではなく、メリル自身のために。

勇者に辛く当たり、見捨ててしまった自分が許せない。だからせめての贖罪に、死を選ぼうとしている。名誉ある死を選ぼうとしている。

単なる甘えだと分かっていたが、もうこうするより他にどうしていいかわからなかった。

ぐ、と剣の柄を握る。

恐怖に揺れる心を叱咤して、立ち上がろうとした。

その時、不意に門が内側から開いた。

重い音をたてて開く門の向こうには、おびただしい数の魔物がいる。それぞれに列をなし、明らかに統率の取れた動きをしていた。

門が開ききるや否や、先頭の魔物が勢い良く飛び出す。四足歩行の、門番であるう魔物よりふたまわりほど大きな魔物。首を左右に振り、嬉々として飛び出して行く。後に続く魔物も同様に。

メリルはごくりと息を飲んだ。

これはチャンスだ。この隙にうまく城内に入れたら、と思う。

「おい、」

途端に、びんと響く声が出て、メリルはびくりと体を強張らせた。

一層体を低くして、茂みの間から門を伺う。

「今日はあんまり暴れるなって言っているのか？」

声はまだ若い。

見れば門の傍に、華奢な人影がある。異国風のデザインの黒っぽい上下を纏った、黒い髪の青年。

こんなところに人間が？

疑問に思いつつ伺っていると、青年の横合いから彼より一回りは大きな男が現れた。剥き出しの上半身は筋骨逞しく、一目でその強さがわかる。しかしその頭部は狼のそれであり、僅かに開いた口からは鋭い牙が覗いていた。

男は、牙のずらりと並んだ口を開くと、思わずメリルが己の耳を疑うほどに流暢な人語を話した。

「はい、そのように伝えております。騒擾を起こす程度、食事はほどほどにしろと。」

男の言葉に、青年は軽く頷く。

「うん：まあ、問題ないだろう。後は奴らが我を失わない所で引き上げさせる。応援を呼ばれない程度に、適度に、だ。」
逞しい肩を軽く叩き、青年は笑う。
ふとメリルは気付いた。

僅かに差した陽光。その中で、青年の髪は深い青に煌いている。黒いと思つた頭髮は、濃い青：濃紺の色であつた。

人間には持ち得ないその色。

それが意味することは、彼もまた魔物の一人であるということ。

メリルの脳裏に、数日前に対峙した「長」の姿が蘇る。

緋色の髪に真紅の目。背に広がる漆黒の翼。圧倒的な存在感と、強大な力の存在を感じさせる相手。けれど思い返せば返すほど、およそメリルの抱く「魔物」のイメージからはかけ離れた存在であつた。髪や目の色、そして翼さえなければ、その姿は一見するとごく普通の人間のようにも見えた。それどころか、人としてもその姿は強さとは縁のなさそうなもので。

それが魔物の世界の常識なのだとなれば、目の前で話す青年も侮れる相手ではないということだ。

「しかし：解せません。何故です？人間どもなど食い尽くしてしまえば良いのでは？」

鼻に深い皺を刻んで男が首を振る。

不満げなその言葉に、青年は軽く首を傾げて言った。

「じゃあお前は一晚で世界中の人間を殺しつくせるか？」

「一晚で？それは無理かと」

「だろ？そういうことだよ」

「…？」

「人間なんてうじゃうじゃいるだろ。ひとつふたつ街を滅ぼしてい
い気になっても、下手に危機感煽って大軍投入されちゃこつちも困
るのさ。…今は兵力が惜しい」

青年は、言って悔しそうに表情を歪める。

「まあ近いうちにお許しが出るだろ。そうなったら暴れたいだけ暴
れな」

男にそう言い残すと、青年は踵を返して城の中に戻っていった。

男はしばらくその姿を見送っていたようだったが、やがて巨大な一
頭の背に飛び乗ると、魔物の大軍に紛れていずこかに走り去ってい
った。

再び重い音とともに門が締まる。

その様をメルルは呆然と見つめていた。先ほどのやりとりが脳裏に
こびりついて離れなかった。

「粗方片付いたかな？」

フレイが首を傾げて言う。

辺りには獣の屍が累々としている。

一度は引き離れたものの、なおも獣はしつこく食い下がり、仕方な
く応戦することになったメルルとフレイである。

焦燥に突き動かされ、メルルは鬼神の如き戦いぶり見せ、フレイも
百発百中のすさまじい集中力を発揮した。

その甲斐あって、今やそこら中に獣の屍が積み重なっている状態だ。
「ひと段落はついたみたいね。…しばらくは襲ってこないでしょう」

メリルは血の匂いに顔を顰めながら、剣を鞘に収める。

応戦の途中、不利とみた数頭の獣が逃げ去るのをメリルは見ている。これだけの犠牲を出せば、さすがに追っては来まい。

森の中の打ち捨てられた街道。通行人が皆無とはいえ、たかだか食糧ひとつにそこまでの力を裂きはしないだろう。

「ならいいけど…次の町に着くまでに矢が足りなくなったら困るもの」

言って、フレイは空になった矢筒に補充する。

「心配いらないわ。この森を抜けた先に街があった筈よ。」

「よかった、とにかく急ごう。もう野宿は嫌だよ」

ここ4日程、野宿が続いていた。一刻も早く、という気持ちに駆りたてられ、夜を徹して駆けることもあった。

幾度も経験してきたことだったが、さすがに疲労がピークにきていることはメリルも自覚している。剣を揮う己の腕が、いつもより重く感じられていた。

「ええ、急ぎましょう。」

頬についた血を拭って、メリルは森の奥を見つめた。

鬱蒼とした森には、既に夕闇の気配が訪れている。野宿を免れるには、闇に沈む前に森を抜ける必要がある。

「…急がなきゃ、」

まだ半分しかきていないのだ、とメリルは胸中で呟く。

二人の目指す王都は、あまりに遠い。

9・遠路(後書き)

> i3505 | 288 ^

戦うメリル。赤いのはトマトじゃないです、多分(笑)

10・厄介事（前書き）

久々の更新です…（汗）

更新間隔が長くなってしまったので、前回までのあらすじをつけてみました…あらすじって書くの苦手…（え

これまでの話

魔王を倒すために立ち上がった勇者、スノウ。

ところが彼は記憶を失い…どうしようもないヘタレになってしまふ。乗り込んだ魔物の城で、仲間の後ろで泣きだすわ、撤退しそびれるわで…結局、変わり者な魔物^{エル}の思いつきで、スノウは猫にされてしまった。

猫を嫌う魔物たちの間にあって、それでも妙に順応してしまったスノウ。

そんな猫生活を満喫中のスノウの元に、エルの血縁者だという魔物が城にやってくるとの噂（？）が。

側近のアイシャヤスイに言わせれば「厄介なヤツ」とのこと。

ひとまず隠れてさえいれば大丈夫だろう、と呑気に構えたスノウだったが…

だだっ広い廊下の端を、白い猫が歩いている。

緩やかな足取りで、さながら午後の散歩といった風情。

窓から差し込む柔らかかな日差しが、廊下に長い影を作る。

ふと猫は足を止め、窓の外を見上げた。

陽光に目を細め大きく欠伸をする。

「…いい天気だなあ」

呑気に呟いたのは白猫…元人間で勇者の、スノウである。

魔物の城での生活にも慣れてしまった勇者は、ともすれば自分^{スノウ}がヒトであったことも忘れてしまいそうな勢いで、猫生活を満喫中であつた。

「暇…」

伸びをするスノウの周りには、人っ子ひとりいない。

普段ならアイシャカエルがいる。勿論、城で重要な位置にいる彼らが暇なはずはなく、スノウとて四六時中彼らと行動をともししているわけではない。むしろ、一人で過ごす時間の方が圧倒的に多いのだが。

それでも、スノウはこのところ暇で仕方なかった。

ここ数日、城の中は特に慌ただしい。

エルはどこかに籠りつきりらしく、全く姿を見なくなった。

アイシャもスイも忙しく動き回っているようで、昨日は食事は一度きりだった。どうやら、多忙のあまりアイシャが忘れてしまったらしい。

目に見える変化はそのくらいで、以前のスノウであれば変に思う程度だっただろう。けれど猫の身であるせいかな否か、城を包む空気が緊張を孕んでいることに気付いていた。

城全体に広がる緊張。アイシャやエルまでもが影響されているとい

うのなら、考えられる原因はひとつだった。

恐らく以前耳にした「あの方」とやらの訪問が近いのだろう。

「あの方、ねえ……」

呟くと、再び欠伸が漏れる。

はつきりと耳にした訳ではないが「あの方」とやらが来るのは今日かもしれない、とスノウは思っていた。

というのも、今朝食事を持ってきたアイシャが、いつになく上の空だったのだ。煮干をぼろぼろ零すし、文句を言っても適当に「ああとか「悪い」とかが返ってくる。そんな冷静な対応なんて滅多にされないスノウとしては「なんかあるな」と思わずにはいられない。指揮官の立場にいるらしいアイシャがぴりぴりするのだから、きっと相手は相当なものなのだろう。

強い奴だから興味がある、という思考回路とは無縁のスノウだが「エルの血縁者」という点では非常に興味をそそられる。

ヘタレな自覚も無力な自覚もあるスノウだったが、好奇心ばかりはどうにも抑えがきかなかった。

危険と隣り合わせの毎日なのは、頭ではよくわかっている。

こうして猫の姿ながらも生きているのは、魔物の「きまぐれ」ゆえ。いつまた気まぐれを起こして命を奪われてもおかしくない。

そうわかっていたのだが。

気付けば、部屋から抜け出していた。

誰一人としてスノウに目が届かない状況。完全に放置されている今をうまく利用すれば、城から逃亡するのは容易い。すべての魔物の目が「あの方」に向いている今ならば。

ただ困った事に、スノウの目もまた「あの方」に向いていた。ほんの僅かでも顔を見たい、と思ってしまった。

散歩のため、いや逃走経路の確認のため……

本音に、弁解に弁解を重ねて「外出禁止」を言い渡された部屋からこっそり抜け出した。

誰にみつかつて雷が落ちるのは覚悟のうえ。

ほんの少し、離れた所から確認したらすぐに引き返すつもりでいた。階層を移動するのはリスクが高いから、下の階層が見えるところで眺めていよう。

そうこうしていれば、いつかは見る事ができるだろう。

そう思つて、スノウは現在「散歩」をしている最中であつた。

「確か…この角を右、だつたかなあ？」

記憶を頼りに廊下を折れる。

大抵は下の階層は見えない。だが、いくつかの場所で下の階層が見下ろせるポイントがあることを、スノウは知っていた。

そして、どれだけ堂々と歩いていても、ここにおいては警戒する必要がないことも。

この階層では普段から人影がない。

それもそのはず、ここはエル専用の階層なのだから。

エルの「居城」であるこの城は大別して3つの層からなる。

門より数階分の階層を下級魔族や魔獣といった、人間にとってはごく一般的な魔物が占め、その上層から数階分の階層を上級魔族、下級魔族のうち比較的高等な魔物が占める。そして、その更に上層を幹部クラスの下級貴族たちが占めるのだが、この辺りになると下っ端の魔物たちですら「顔を見たことがある」程度のつながりしかない。

その彼らより上階。つまり城の最上階がエルの階層となる。

最上階といえども、その広さは並ではない。直線的な廊下が続くかと思えば、複雑に曲がりいくつかに分岐した廊下、その左右に並ぶ多くの扉が、部屋の多さを物語っている。

その中にはエルの寝所を含め、重要な役割をもつ部屋が多数存在しており、その大半がエル以外の者が入れない場所となっていた。

スノウはその階層に…言ってみれば「住んで」いるのだが、2つの部屋しか知らなかった。即ち、普段過ごしている「執務室風」の部

屋とエルの寝室のみである。

誰とも会わないことは分かりきっていたから、スノウは警戒らしい警戒もせずに散歩をしていた。

元の部屋からかなりの距離を移動していたが、気にも留めなかった。ここはエルと側近だけが通れる廊下なのだからと安心しきっていたのである。

「お？お前なんだってこんなとこにいるんだ」

だから、不意に声をかけられても驚きはしなかった。ここで出会う人物といえばごく限られている。

殆ど警戒もせず、少しばつの悪い気持ちでスノウは振り向いた。

やや離れた先の角に、人影がある。異国風の衣装に身を包んだ、藍色の髪の青年。

アイシャ、と呼びかけようとして、ふと他の人影に気付く。

アイシャは数人の部下と思われる魔物と一緒にだった。

「あつネコ?!」

「わぁ！」

「あ…！あれですか、エル様の…」

3人の魔物は、口々にそう言って、興味深げにスノウを見詰める。

その様子からは嫌悪の類は感じられない。エルの周知が徹底したのか、或いはリボンの効果が出てきたのか。魔法に疎いスノウには、リボンにどんな加工がなされているものかてんで分らない。見た目にこれといった変化がないので、渡された当初は信用していなかったのだが。

「ほんとに、どう見ても猫ですねえ…」

しみじみと言う魔物。

どうやら「エルの所有物&本物の猫ではない」という情報は周知のものらしい。

初めて目にする魔物たちに、スノウは軽く瞬きを繰り返した。

この階層においてエルとスイ、アイシャ以外の魔物を見たのは初めてのことである。ここはエルのみ階層ではなかったのだろうか。

「…に、にゃあん」

疑問に思いながらも、スノウは慌てて「猫のふり」をした。

スノウが会話できることを…ひいては人間であることは秘密である。秘密にしなければ、スノウの身が危うい。

アイシャはそのことに気づいたらしく、ひとつ頷いて頭をわしわしと掻きまわった。

「あー、まあそうだな。エル様の使い魔だ。…たぶん伝令だろ」

アイシャは部下たちにそう説明しながら、スノウに近づく。

部下たちがやや遠巻きに見守る中、アイシャは腰を屈めスノウを抱き上げようとして…手を止めた。

「あーやべえな、うっかりしてた…」

スノウに聞こえるか聞こえないかの声で、アイシャが呟く。

「？」

「…お前猫だったな…」

忌々しそうに舌打ちをする。

「…何を今更」

アイシャと距離が近づいたのをいいことに、スノウは言い返した。

そもそもの始めからずつと猫である。人間の状態で言葉を交わすこととはおるか、顔をあわせたのも最初の一度きり。

何をどう勘違いしたというのか、と見上げる。

「…うるさい」

アイシャは視線をそらし、スノウの首根っこをむんずと掴んだ。

そのままぶらりと持ち上げると、アイシャの背後からどよめきが起こった。

「なんだよ？」

目を丸くしている部下たちを顧みて、アイシャが不機嫌に言う。その表情は険しく、眼光は鋭い。以前のスノウならば、こんな顔で睨まれようものなら、完全に腰を抜かしていただろう。

だが部下たちの方は慣れたもので、怯えるどころか、楽しみに口々に言う。

「さすがです、猫を捕まえるなんて！」

「いやあ貴重な光景ですね」

その反応はどれも穏やかで親しげなものばかり。

「うつせえよ、んな呑気なこと言ってる場合か！とにかく、オレは急用だ。さつき打ち合わせた手筈で用意しとけ。後は任せる」

眉間に深く皺を刻んで、アイシャが声を張り上げた。

「はい！」

鞭のような鋭い声に、部下たちは一斉に声を揃え居住まいを正す。引き締まった表情は、けれども少しも怯えや恐怖の色はない。彼らの目には憧れや尊敬、そして楽しげな色が輝いている。

どうやら、アイシャは随分と部下に慕われているらしい。親しみやすい上司として。

「よし！わかつたらとっとと散れ。ぼさっとしてる時間はねえぞ！」空いてる方の手で、追い払う仕草をする。部下たちは再び威勢良く返事をして、踵を返して廊下を戻って行った。

アイシャはこころなしむくれながら、部下たちの後姿を見送っていたが。

「まったく、てめえのせいだ。このヘタレが」
憚る必要もなくなつて、スノウに向かつて文句を並べだした。

「何だつてうるついてんだ。しかもこんなとこまで…出るなって言つただろーが」

「ごめん…その散歩したくなって…」
まさかその件の人物の顔を拝みたかった、とは言えない。そんな発言しようものなら、間違いなく雷を落とされる。

「散歩なんざあとからいくらでもさせてやる。とにかく今はとつとと戻るぞ」

手間掛けさせやがって、とアイシャは文句を言いつつ歩きだす。

「あ、ねえ、さっきのひとたち…」

「ん？あいつらか？」

「なんで、ここ……」

ここは一部の魔物しか入れない場所ではなかったのだろうか。

うまく説明できなくて、スノウは曖昧に言葉を濁す。けれどアイシヤはスノウの意図を正確に読み取ったらしい。

「あいつらは今日だけだ。ここは通路だからな、あいつらに張らせねえと」

「張る？」

「あのお邪魔虫どもがここ通るんだよ。余計な仕掛けなんぞされたらたまんねえからな」

いつそこつちから仕掛けてやりてえ、と凶悪な表情でアイシヤが吐き捨てた。

なるほど、警備ということか。

納得がいつて、スノウはアイシヤの部下たちが消えた方向を見遣った。

勿論彼らの姿は見えはしない。

ここをアイシヤ言うところの「お邪魔虫ども」が通るのだ。

それが誰を指しているかは明白だ。エルの親族だという魔物と、その一行だろう。

やはり顔くらいは拝めたかもしれないな、と呑気な感想をスノウは抱く。

出会い頭に消される可能性も十分にあっただろうけれど。

「大変だねえ」

そんなことをつらつら考えつつ、適当な相槌を打つ。

「…他人事じゃねえだろ、お前オレと会わなきゃアイツに消去されてんぞ。つたく、あぶねえな、もうそんなに時間ねえんだからよ」

確かに、命拾いではあるのだろう。

「あの方」に消去される危機と、エルの不利益ということスイに消去される危機を回避できたのだから。スノウとしては、見知らぬ「あの方」よりスイの方が数倍怖い。

「時間ないの？」

「ああ、結界の一部が反応したからな、到着まで早くて10分とこだろ」

そんなやりとりをしつつ廊下を進むと、前方に見知った姿を認めた。水色の髪、隠者のように長い衣の、スイ。

「ん？」

アイシャが首を傾げると、スイがこちらに気付くのが同時だった。「アイシャ、いいところに」

そう言つて、スイが駆け寄ってくる。いつも冷静なスイにしては珍しい。

「どうしたよ」

「ヴァスーラ様が破天龍でくると」

端正な顔に焦りの色が僅かにちらつく。

「…はあ？破天龍？ついたらアレか、あの馬鹿でつかい…」
目をむいてアイシャが言う。

「ええ。魔王の領地でしかお目にかかったことはありませんが…恐らくソレでしょう」

「うっわあ…何考えてんだ、あの派手好きめっ」

「まったくです…」

頭を抱えて呻くアイシャ。諦めたようなため息をつくスイ。

破天龍は、最強を誇る龍の中でも比較的高等な種族だ。

長距離の飛行が可能で、知能が高く魔法も操る。そのため、護衛、或いは家臣として抱える上級貴族は多い。

ただし、その巨大な体と広い翼故、非常に目立つ。

生息域が限られていることと上記のような理由で、その存在を知るものは少ない。人間においては。

もちろん、そんなことは知らないスノウは、二人を眺めて首を傾げた。

「はてんりゅう？」

どこかで聞き覚えのある気がして、スノウは記憶のページを繰る。

だがせいぜい数ヶ月程度の記憶では、どうにも限界がある。

「ああ、そっか、勇者は知らねえよな」

だからアイシヤがそう言った時、やっぱりそうかと思ったものである。

「龍だよ、馬鹿でかくて馬鹿力。頭はそんなに悪くないけどな…ん？破天龍は一頭か？」

後半はスイに向けて言ったものである。

どうやら、呑気にスノウに説明しているだけの余裕はないようだ。

「ええ。確かヴァスーラ様の一頭だけと」

「お付きの連中はどうすんだ。まさか結界外から徒歩なんてこたねえだろ」

「中継地に転移する、と打診が」

「ま、妥当だな…ていうかあの馬鹿も転移してくりやいいじゃねえか。なんでわざわざ龍なんかに乗って来るかな」

「知りませんよ、誇示したいんじゃないんですか」

「相変わらず嫌味な変態野郎め…」

ヴァスーラ様とやらは知らないが、「変態」は関係ないのでは、とスノウはちらりと思う。思ったが、勿論口には出さない。出した所で彼らの邪魔をするだけだ。

「至急、魔法兵を4人ほど派遣しろとエル様が」

「だな、目立つわけにはいかねえし…く、余計な手間かけさせやがって…ほんつとむかつくやつ」

鋭い犬歯を剥き出して、アイシヤが唸る。

「私の方で2人は用意できましたが…」

「おう、あと2人は任せろ。心当たりはある。あとこっちに待機させるヤツが一人二人はいるな」

「それは大丈夫です、私ひとりでもなんとかなるでしょう」

「ああ、それなら安心だな。問題は破天龍がうまく言うこと聞くかどうか…」

「それよりヴァスーラ様の方が問題…」

二人揃ってため息をつく。

すっかり話しに取り残されたスノウは、二人を見上げて首を傾げる。部外者のスノウには状況がイマイチつかめないが、どうやら「ヴァスーラ様」が面倒事をもってきたらしいことは理解できた。そして、恐らくその人物が「あの方」とやらであろうことも。

ここは口を挟まず、大人しくしておくのが得策だろう。

「あ、そうだった」

アイシャがスノウを振り向く。

「勇者、お前ちよつとその辺に隠れてる」

「え？」

その辺？

「部屋まで行ってる時間がねえからよ。どっか適当な部屋にでも隠れてる…ああ、間違っても廊下にいるんじゃないぞ」

ここ通るからな、と釘を刺して、アイシャは踵を返す。

スノウが呆気にとられる間に、アイシャは元来た道を戻って行った。競歩なみの、早足で。

「え…ええ？」

「では私もこれで」

スイも余程慌てているのだろう。スノウが部屋から出ていることに言及する様子もなく、それどころかスノウに嫌味ひとつ言わずに踵を返して、アイシャとは逆の方向に歩み去っていく。

「…え、ちよ…」

意味もなく二人がそれぞれに去った方向を見回す。

その辺りと言われても。

ただっ広い廊下に取り残されて、スノウは呆然とするばかりであった。

11・兄と弟（前書き）

下方に挿絵があります。

11・兄と弟

『そのあたりにでも隠れてる』

そう、文字通り放り出された格好のスノウである。

廊下の真ん中にぼつんと座ったまま、スノウは暫く呆然としていた。とにかく、一行が到着する前に姿を隠さねばならない。

このまま廊下にいるわけにいかないのは、先ほどアイシャにしっかりと釘を刺された。

元の部屋に戻りたくとも猫の足では恐らく間に合わず、かといっておいそれと「その辺り」の部屋に入るわけにもいかない。

部屋自体はいくつもある。その殆どが空き部屋なのも、ここがエル専用の階層という理由から軽く予想がついている。しかし”エル以外の立ち入りを禁じている”とあれば迂闊に飛び込むことは躊躇われた。

一体どんな恐ろしいことが待っているやらわからないのだ。

スノウは嘆息して、重い腰を上げる。

悩んでいる時間はない。

10分くらいで、とアイシャは言っていた。あの慌てぶりから察するに10分は切っているだろう。

あてもないまま、適当な…何の仕掛けもない部屋を探して、スノウは走りだす。

しかしどの扉も固く閉ざされていて、思うように見つからない。

いちいち施錠されているわけではないだろうが、猫一匹の体当たり程度で開くほど、緩く閉められている筈もない。伸びあがって取っ手を動かそうと試みるも、上手くいかない。

適当に放り出したアイシャを恨む思いで、必死に探していると、ふと大きな扉が目に入った。

重厚な造りの、扉。他の部屋のものに比べて：一回りほど大きいだろうか。

そっと扉に体当たりを試みる。

はたして、扉はあつけないほど簡単に開いた。

施錠されていないどころか、随分甘く閉めてあつたようだ。それとも、誰かが出入りした後だったのか。

僅かな隙間に体を滑り込ませて、恐る恐る中を伺う。

真っ先に目に飛び込んできたのは、幾重にも垂らされた紫の薄布。

薄暗い部屋のそこかしこに、布が垂らされている。照明の暗さとあいまって、部屋の奥には何があるのかさっぱりわからない。

廊下よりも随分と冷えた空気が肌を撫でる。物音ひとつしない、完全な静寂。

どうやら無人は間違いないようだ。仕掛けの方はスノウにはさっぱり見当もつかないが、分からない分あれこれ考えても仕方ない気がした。

奥に入り込まねば大丈夫だろう、と腹を括って足を踏み入れる。

足の裏に冷気が伝わる。用心深く様子を窺うが、これといって変化は見られなかった。

そろそろ室内に移動する。扉から離れて、壁伝いに中に入っていく。

一体、何の部屋だろう。

薄闇の中、目を凝らして進むものの、家具や調度品と思しき影が殆ど見当たらない。

天井から幾重にも垂らされた薄布。

そればかりが視界に広がり、部屋の奥を目隠ししている。ただの部屋にしては、布が邪魔なような気がする。

これだけごちゃごちゃと布が揺れていれば、身を隠すにはもってこいだろう。

深く考えないようにして、部屋の隅へと移動する。

奥行きの方は分からないが、扉からの距離からいってそう大きな部

屋ではないらしい。

ここでやりすごそうと決めて、スノウは音をたてないように座り込んだ。

視線が低くなって、ふと前方に何かが見えた。

台座と思しきものの上に、大きな椀状のもの。

色や細かい形までにはよくわからないが、それは部屋の中心部に鎮座しているようだった。

首を傾げつつ観察していると、椀状のものの足元がもぞもぞと動いた。

「っ……」

無意識に毛が逆立つ。息を詰めて腰を浮かす。

嫌なものは感じないが、油断はできない。心臓の音すら響きそうな静寂の中、息を殺して見つめるスノウの前で、足元の影はゆっくりと身を起こした。

長い髪の毛、人影。

「……エル？」

小さく声が漏れる。

照明が暗くて分かりにくいだが、髪の毛の色は赤いようだ。床に触れるか触れないかの外套を纏い、椀状のものの縁に手をかけ、一心にその中を覗き込む。

何をしているんだろう。

エルとわかったことに安堵して、好奇心が頭をもたげてくる。だが、エルの周囲には近寄りがたい空気が張り詰めていて、声をかけるのは躊躇われた。

「エルはここか」

不意に扉の外で声がした。

思わずスノウはびくりと体を強張らせる。

「ヴァスーラ様、お待ちください、主は今……」

「申し訳ありません、別室にてお待ちを……!!」

慌てて制止する声には聞き覚えがある。スイと、アイシャだ。

スイは相変わらず冷静なトーンを保っているが、アイシャに至っては動揺も露だ。内容はともかく殴ってでも制止する、と言わんばかりの尖った声。

どうやら、件の人物くたんが到着したらしい。スノウが思っていたよりずっと早い到着である。

「ヴァスーラ様！」

アイシャの制止を完全に振り切つて、扉が勢い良く開け放たれた。

その勢いたるや、部屋の隅で大人しく隠れていたスノウも風圧を感じる程だから、相当なものである。

室内に光が差し込む。

思っていた通りそう大きな部屋ではない。部屋の中央奥に、台座。

その形にスノウは見覚えがあつた。占術師が使う水盤によく似ている。恐らく同じ類のものだろう。とすれば、エルはあの水盤を使って何かを占っていたのだろうか。以前、戦術に占いをを用いるという話を耳にした。人間だけと思っていたが……魔物もまたそうなのだろうか。

「やあ、久しぶりだな、エル」

スノウが水盤を観察している間に、件の人物はごく自然に室内に踏み込んできた。

金色の髪をした、男性的な美貌の魔物。

漆黒の服に、豪華な羽飾りのついた闇色の外套マントを纏つた、派手な出で立ち。尖った耳にはじゃらじゃらと音がしそうなほどに付けられた鎖状の耳飾りが揺れ、両腕には幾重にも巻かれた銀の腕輪が光っていた。口元に軽薄そうな笑みを浮かべていたが、その赤錆色の双眸は鋭く輝き、油断ならない人物であることを窺わせた。

「……これは……兄様」

ぶしつけに入ってきたその姿に、エルは心なし驚いたようだった。緩慢な仕草で振り返る。

エルの兄、ヴァスーラ。

エルの言葉に、スノウは思わずまじまじと男を見つめる。

それは、アイシャとスイが最も警戒していた人物に他ならない。

スノウがイメージをしていたのは筋骨逞しい、いかにも「魔物」といった…否、勇者であった頃に植えつけられた「魔王」のイメージそのままの姿であった。

だが、こうして目の当たりにするヴァスーラは、確かに逞しく男性的ではあるのだが恐ろしい見かけをしているわけではない。機嫌良く笑う姿だけみれば、街でみかけるやんちゃな若者、といった感じだ。

「…このようなところにお越しとは。他の部屋にお通しするよう、言っただつもりでしたが…」

当惑気味にエルが言っ、ヴァスーラの後方で複雑な表情の二人の姿を眺めやる。

アイシャとスイは揃って頭を下げた。

「そう責めないでやってくれ」

穏やかに言っ二人を庇ったのは、当のヴァスーラである。

「お前に早く会いたくてな。人間との戦いに忙しいのは聞いていたが…」

言っ、ふと言葉を切る。

「しかし驚いたな、お前がそんな恰好をするなんて…」

いかにも魔物といった装いは嫌だと言っただろう、どういう心境の変化だ？」

ヴァスーラは、しげしげとエルを見詰めたあと不思議そうに尋ねた。エルは漆黒の外套を纏っていた。その下には同じく漆黒の衣服と、黒の長靴。腰には長剣を差している。

スノウは記憶をたどる。出会った時、確かにその黒尽くめの姿に威圧されたことを思いだす。今ではエルの黒づくめにすっかり慣れっこになっってしまったが。

「別に…これとっって理由など」

ヴァスーラから視線を外して、エルが言葉少なに応じる。

「ふむ、人が変わったようだと言いた時にはてっきりデマだと思っただけだが…」

「そうでもないらしい、と含み笑いをして、ヴァスーラはエルの髪を一房掴んだ。

「もう髪は編まないのか？お前に似合うような髪紐を持ってきたんだが…どうだろう、姫君？」

「揺らす響きに顔色を変えたのは、エルではなくアイシャの方であった。」

「今にも歯軋りせんばかりのアイシャに、スイが視線を送る。アイシャはわかってると言うようにスイを一瞥し、拳をぐ、と握った。

「冗談だよ、冗談。久々で私も浮かれているんだ。」

「どこの姫君に贈り物かと、このヘネスが言うものだからつい言うてみたくなつたのさ…」

「ひらひらと手を振って、ヴァスーラは背後を一瞥する。」

そこには、ヴァスーラの従者と思われる二人の男が控えていた。どちらもモノトーンの衣服に身を包み、あたかもヴァスーラの影のようにつき従っている。エルの視線を受け、二人の内背の高い方が軽く腰を折った。栗色の髪、平凡な顔立ちの男だ。ヘネス、というのは彼の名であるらしい。

「そういえばお前に会わせるのは初めてだったな。今の乗り物だ。前の破天龍が老いたものでね」

「ヴァスーラの説明にスノウは軽く目を瞠った。」

「ヘネスという男はどこからどうみても完全な人型で、原型が龍…アイシャが言うところの「馬鹿でかくて馬鹿力」な生き物とは到底思えなかった。スノウの脳裏に浮かぶ破天龍の想像図と、ごく平凡な風貌の男の姿がどうにも繋がらず、スノウは穴が開くほど観察してしまう。」

「…破天龍が…そうですか」

「どこか茫洋とした風情でエルが呟いた。」

その的を得ない様子に、ヴァスーラが僅かに首を傾げた。

「…なんだか妙だな？確かにお前は昔から妙なやつだったが…らしいくない」

エルの全身に緊張が走った。

それは恐らく、彼を知るごく身近な者しか気付かないような僅かな変化。だがヴァスーラに伝わることを懸念してか、エルは俯き加減のまま視線すら上げようとしない。

「貴族にあるまじき性格とまで言われていたお前が、いきなりやる気をだしたと聞いた時から妙だと思っただけはいたんだ。一体何を考えてるんだ、エル？まさか今更バルト家の椅子が欲しいという訳じゃあるまい？」

家督争いに参戦する気か、とヴァスーラ。

急に、空気の温度が変わった。

目に見えない糸が張り詰め、その軋みすら聞こえそうな重苦しい緊張が横たわる。

ヴァスーラは変わらず穏やかに笑っているが、その緊張の発端は間違いなくヴァスーラである。

返答如何では今すぐにも戦闘に突入しそうな、そんな息詰まる緊張感。

その緊張に気付いていないはずもなかるうが、エルはあっさりと首を振って否定した。

「いいえ、興味はありません。私はただ、兄様たちの恥とならぬように」と

言って、エルは視線を逸らしたまま柔和な笑みを浮かべる。

普段のエルを知る者には、およそ彼らしくない表情だ。覇気のない、どこか弱々しい印象の笑み。

違和感と同時に不思議な既視感を覚えて、スノウは瞬きを繰り返した。

己が隠れている身という現実を忘れ、エルの顔から目が放せない。だが逆にヴァスーラの方は幾らか安堵したらしい。ほっと息をつい

て、

「私も心配なんだよ、可愛いエル。」

お前の動向に兄や弟たちがピリピリしてるようだね。まあ生意気な弟たちは私ひとりでもどうにかできるが…兄となると私もお手上げだね。…わかるだろう？」

ほとほと困ったというように、穏やかな口調でヴァスーラが言う。軽い口調の中に気遣う様子が滲む。一見、優しげともとれるその言葉と態度。

けれど、何故だかスノウは肌が粟立つような寒気を覚える。

嫌う理由など…人間であるスノウにとっては、魔物である事実を除けば何一つない。それなのに不快でたまらなかった。

ヴァスーラが優しく言えば言うほど、スノウの耳にはすべてが白々しく響く。

「兄が本腰を入れたら敵わないからな。…エル、このままの状態は危険だ。最近は鍛えているようだが…お前の兵は明らかに経験が足りない。このまま中途半端に人間と戦うのは兄の疑心を煽るだけではないぞ？」

ふとヴァスーラが真剣な口調で言った。

「…疑心、」

「そうだ。すべては家督のための準備ではと疑われでもしたら…」

「そんなつもりは…」

困惑した素振りでもエルが首を振る。

「分かってるさ、お前の性格はよく知っているつもりだ。優しいお前が兄との争いを望むはずはない。だが兄の方は違う。兄が本気になれば、この城はひとたまりもない。」

…私はお前を守りたいんだよ、エル。けれど情けないことだが、私の力だけでは…お前もこの城も守りきれない」

スノウの視線の先で、アイシャが不快げに顔を顰めた。

その理由がなんとはなしに理解できて、スノウも複雑な気分になる。

「兄様、ですが私は…」

エルが言い淀む。自分の力ではどうにもできない、と伝えようとしたのか争いたくないと伝えようとしたのか。頼りないその風情からはそんな言葉が予想された。

「これは提案なんだが…どうだろう、暫くの間お前の兵を私に鍛えさせてくれないか。幸いヘネスは破天龍の中でも優秀でね。魔法は勿論、剣の腕もたつ」

「鍛えるとは…」

「今のままでは兄の攻撃すらまともに防げまい。だから多少なりとも使えるように訓練をさせようということさ。必要なら私の軍から指導者を連れてきてもいい。お前の兵が力をつければ、いざというときに私もお前を守り易くなる」

いかにも弟の身を案じる兄、といった風情のヴァスーラ。

それは正論のようにも聞こえる。

だがそれは、そう聞こえるだけなのだということも、スノウは気付いていた。

「何、戦いが嫌なら、お前は他のことをしててもいい。そう、お前の好きな研究を続けるもよし、書物を読むもよし。訓練は私が引き受けよう」

エルは大人しく俯き加減で聞いていたが、ぽつりと言葉を返した。

「ですが、もし私がそうすると言ったら…城の皆はどうなります？」

ヴァスーラは笑う。

「心配はいらない。私が責任を持って訓練をさせるさ。士気が下がることが心配なら、お前の臣下たちには上手く言っておいてやろう。大丈夫だ、私にすべて任せるといい」

エルを抜きに行われる兵士の訓練。

それは兵力をそのままヴァスーラに握られるということになる。

力がすべてだという魔物にあって、それは事実上の乗っ取りにならないだろうか。

スノウははらはらと気を揉む。

ヴァスーラの能力が如何ほどのものかスノウには分からない。だが、彼を城の内部に関わらせたが最期、城の全権を奪われるような気がした。

いつものエルならば少しも心配などしないのだが、今日のエルはどこか様子がおかしい。このままヴァスーラに丸め込まれてしまうのではないかと、気が気でない。

大丈夫だろうかと案じて、その思考に憚然とする。
魔物^{エル}の心配をするなんて。

…否、囚われの身として「飼い主」が変わるのは困るのだ。

比べるのもおかしいが、エルとヴァスーラで考えた時に、まだエルの方がマシに思えた。話を通じる相手という意味で。

だから、自分は心配しているのだ。エルのためでなく自分のために、そう己を必死に納得させているスノウの視線の先で、息詰まるやりとりは続いていた。

「私は、戦う必要がなくなる…?」

「ああ、私が変わりに出てやろう」

「研究を、続けて良いのですか」

「好きだけするといい。成果を楽しみにしているよ」

二人の横で、アイシャは不機嫌な表情を隠さずにいた。

エルの前だからこそ抑えているが、そうでなければヴァスーラに食って掛かりそうな凶暴な空気を纏っている。

そこで、ふつとエルが笑った。

「…お気持ちは有難いのですが…遠慮しておきましょう」

頼りない風情はそのままに、言葉だけはすらすらとエルが言った。

「この城の主は私ですから…。部下も兵も、誰かに任せるつもりはありません」

はつきりと示された拒否に、アイシャが安堵の色を浮かべる。

対し、ヴァスーラの背後で従者が目に見えて表情を変えた。思わず前に出よう、とするのをヴァスーラ自身が手で制する。

「そうか。…いつまでも子供ではないということだな」

ヴァスーラはまるで予想していたかのように穏やかな笑みを崩さず、嬉しそうに言う。

ふとスノウは気付く。先ほどまで同じようにヴァスーラの背後で控えていた、ヘネスの姿が見当たらない。いつの間どこへ行ったのだろうか。妙だとスノウは首を傾げる。

「寂しいが仕方ない。お節介はやめておくとしよう」

軽い口調で言つて、ヴァスーラは肩を竦める仕草をする。

「なんだかよくわからないが「勝った」とスノウが思った矢先、ぐい、と体が浮いた。

「これはこれは」

低めの声音。

聞き覚えのないそれは、エルのもので、アイシャたちのものでもありえない。

見上げると硬質な表情の男と目が合う。モノトーンの色、栗色の髪、髪の色：ヘネスだ。

しまった。

そう思ったが、時既に遅し。

「こんな所に侵入者です」

首根っこをそのまま掴まれ、スノウは難なく紫のベールから引つ張り出された。

はつと振り向いたエルが焦りの色を浮かべる。

スイとアイシャも表情を強ばらせたのが視界に入る。しかも、スイに至つては射殺しそうな視線を投げてきた。色々な意味でスノウの胃がきゅう、と痛む。

「ほう、猫か」

ヴァスーラが目を細めた。幾つもの視線に晒され、スノウは居心地が悪い。

「…猫ではありません」

一瞬浮かんだ焦りを綺麗に隠して、淡々とエルが言う。

「猫ではない？嘘はもつと上手につくものだよ。どうみても猫…綺麗な白猫じゃないか」

珍しい、とヴァスーラはむしろ嬉しそうである。

「見かけを猫に変えてあるだけで…元は別のものです。研究のために必要に迫られて…私が猫など飼う筈はないでしょう」

言葉に嫌悪を滲ませてエルが言う。

その演技力にスノウは状況も忘れて感心する。被害を一身に受けているスノウにしてみれば、その言葉が本音だったらどんなにいいだろう、とちらりと考えてしまう。

「それもそうだが…しかし上手く魔法をかけたものだ。ネコにしか見えないな。一体何にかけた？」

問われて、エルは淀みなく答える。

「水妖の一種です」

ヴァスーラは別段疑う様子もなく、ふむ、と頷くとぶら下げられたスノウをじろじろと眺め回した。

「随分弱い水妖を捕らえたのだな。お前の魔力しか感じないとは…魔力らしい魔力もないようではないか」

魔力らしい魔力もない、とヴァスーラにまで言明されて、スノウは少し切なくなる。

「おそれながら、エル様の魔力が上回るのが当然かと」
無表情のままスイが口を挟む。

「無礼な口を。身分をわきまえる」

ヴァスーラの背後から従者が鋭く言った。

その言葉に反応したのは、当のスイではなく彼の隣のアイシャだった。傍目にもはっきり分かるほどの敵意でもって、相手をきつく睨む。だが、それ以上行動を起こすようなことはなかった。

一方、言われたスイの方は相変わらずの無表情で、慌てる素振りもなく軽く頭を下げる。

「失礼致しました」

ヴァスーラは頭を下げたスイを一瞥し、次に未だ剣呑な視線を向けているアイシャに視線を移す。

「…ふ、機嫌を損ねてしまったようだな」

口元に笑みを履いて、言う。

「これ以上彼らの機嫌を損ねては、可愛い弟君に嫌われてしまうな。大人しく別室で待たせてもらおうか。ヘネス」

「はい」

呼びかけに、スノウをぶら下げたままのヘネスが応じる。

「解放してやれ。ああ、折角だから水の中にも」

水妖ならば喜ぶだろう、と楽しげなヴァスーラの声。

その言葉に、エルもアイシャも、スイですら固まった。

「わかりました」

その間にヘネスは淡々と応じて、

ぽん、とスノウを放った。

落下先には並々と水を湛えた水盤。煌めく、水鏡。

濡れる。

脳裏に閃いたのは濡れそぼった自分とそんな考えで、別段恐怖など感じなかった。

泳いだ「記憶」はなかったが、溺れはしないという確信めいた思いがあったのだ。

覗き見た水盤はさほど大きくも見えなかった。

だからただ濡れるだけだと、とんでもない発言をする奴だと、むしろヴァスーラに対する苛立ちだけがあつたのだが。

一瞬後に全身を包んだ水は、思いのほか強い圧力でもってスノウを捕らえた。

体を押す不可視の圧力。

肺腑から空気が押し出されていく。

思わず見開いた視界には、青い色彩。

漏れた空気が白い泡となって上昇する。

あれ、もしかして深い？

混乱する頭でふと思った。

投げ込まれた勢いのせいにするには、あまりにも体が沈んでいる。

青い色彩が深くなって、視界の端に漆黒の　　深海のような闇が垣間見えた。

もがいても四肢はうまく動かない。

全身を強い力で押し込まれているような、感覚。

転移の魔法陣が敷かれているような城だ。水盤の中がどこぞの空間に繋がっていても、不思議ではない。

急に呼吸が苦しくなった。

肺腑にはまだ空気がある。分かっているのに、胸が押しつぶされそうになる。

無人の深い水底に投げ込まれたと、そう感じた瞬間に。

苦しい。

怖い。

冷静になれと囁く理性が、急速に擦り切れていくのを感じる。

怖い。

怖い。

死ぬのは、嫌。

ぱちん、と弾ける音がした。

11・兄と弟（後書き）

> i6731—288 <

兄さん、ヴァスーラ。

ゴージャスにゴス系（？）のイメージ…です。もっとこう…派手にしたかったのですが…想像力と技術が乏しくて^^；

12・白い猫（前書き）

エル目線

12・白い猫

放物線を描く、白い体。

人においては「神聖」と、魔物においては「不吉」とされる、白猫。猫ならば何でも構わないと魔法をかけた。

どうせいつかは処分する人間テキ。しかも、行く手を阻む勇者とあれば一刻も早く殺してしまうに越したことはない。それはわかっていたが、少しだけ興味が湧いた。どうせなら猫の姿に。

そう思っただけの変えただけの、偽物の猫。

生かしておく必要など、どこにもない。何かの作用で死ぬならそれもいい。処分する手間が省けると、そう思っていた。

けれど、咄嗟に体が動いた。

「っ、ゆ…っ、スノウ!!」

反転して、手を伸ばす。

水盤までの距離は2歩分ほど。

間に合わないと感じるより先に、背筋が冷えた。

エルの手が空を切る。

白い小さな体は、あと数十センチのところまで水盤の中に落ちていった。

高く上がった水しぶきが、エル髪と服を濡らす。

慌てて水盤を覗き込むと白い体がどんどん沈んでいく所だった。

水鏡の奥は城の深部、地底湖と繋がっている。特殊な魔法で管理された水は、自力では浮き上がれない。

助けなければ、と水盤の縁に手をかけて、はっと動きを止める。

「どうした、エル。何を慌てているんだ？」

水妖なのだろう、とヴァスーラが笑う。

落ちていくスノウの姿を見詰めながら、エルはぎり、と齒噛みした。水妖。

言葉の通り、水に属する比較的下等な魔物だ。精神生命体のような存在で、実体を形成できないほどに力が弱い。個体差はあれど、大抵の水妖は水から長く離れることができないとされる。

だからある意味、ヴァスーラの行動は「当然」でもあった。

水妖は「水中」を好むのだから。

「…私に、断りもなくとは、あんまりでしょう」

そう、反発するのがエルの精一杯だった。

水妖と明言した以上、助け出すわけにはいかない。それではスノウの正体に余計な詮索をされてしまう。付けいる材料を与えてしまう。それだけは、避けなければならぬ。

水鏡に映り込む己の顔を見つめ、エルは細く息を継ぐ。

真紅の双眸にはつきりと浮かぶ怒りの色。表情は抑えきれぬ感情に歪み、到底愛想など振りまけそうになかった。まだヴァスーラを振り向くわけにはいかない、と自身に言い聞かせる。

「ああ…そうか、悪かったよ。お前の玩具ケットだったね」

「ええ…いえ、いいのです、過ぎたことは。それより兄様、火急の用がおりだったのでは」

問答をしている時間はない。早く去って貰わねば、とエルは尋ねる。胸の内の焦燥と苛立ちが声に滲まぬよう、そつと唇に乗せる。

「いや？急用ではないよ、言っただろう、早くお前に会いたかっただけさ。何せ数十年ぶりの再会だからね」

ヴァスーラは機嫌よく言う。

「そうですね…本当に」

どうやら成功、とエルは静かに深呼吸をする。水盤に映った表情は、幾分落ち着いたように見えた。

青い水の奥に小さくなっていく白い体を努めて見ないようにして、

エルはヴァスーラを振り向く。

「私も兄様とお会いできるのを楽しみにしていました。立ち話も何ですし、別室へ行きましょう」

白々と言って、エルは笑みを浮かべた。それこそ無邪気な「弟」らしく。

それに、アイシャが目を丸くしているのがエルの視界に入る。

その反応はどうなんだ、と思うが注意もできない。

ヴァスーラは気を良くしたようで、同じくニコやかに笑って、

「やはり母親似だな。美しい人だったが…お前が女だったら私も放っておかないのに」

と、何やらキワドイ発言をした。

アイシャが「変態め」と毒づくのがエルの耳にもはっきりと聞き取れた。勿論隣のスイから鋭い肘鉄を食らっているのも視界に入る。

これだけはつきり言われていても、ヴァスーラは涼しい顔だ。

聞こえていないはずはないだろうが、気にならないらしい。むしろ彼の背後で控えた従者の方が剣呑な空気を放っている。

「それは光栄です。…ああ、スイ、ここの後を頼むよ」

ヴァスーラの台詞を軽く流して、エルはスイを顧みた。

束の間視線が絡み合う。

「…心得ました」

僅かな間の後、スイが首肯する。

上手く伝わったことに安堵しつつ、エルはヴァスーラに歩み寄る。

何がどうあれ、ヴァスーラには早急にここを去って貰わねばならない。

そして一刻も早くスノウを水から出さねば。

「行きましょう」

息が持っただろうか、と内心焦りながらも、ヴァスーラを促して部屋を出ようとする。

だが、肝心のヴァスーラがなかなか動こうとしない。

エルの焦りを見透かすように。

或いは、エルの動揺を誘うように。

「ところで、あのネコは…スノウと聞いたか？」

「…え？」

「白猫に白雪姫とは、随分と愛らしい。お前の考えそうな名だな」
思ってもいなかった指摘に、エルは面食らう。

エルが付けた名ではないし、第一そんな意味などと知らなかった。勇者として乗り込んできた青年。名の意味など思いもしない。しかもそんな愛らしい…人間の文化は知らないが、男子に付けるにはいささか不似合いともとれる名などは。

「どうした？お前が付けたのではないのか？」

に、と笑ってヴァスーラが問いかける。

「いえ、私が。…ただ、貴方がそんな話をされるとは、意外で」
言い繕いながら、エルは気がでない。

胸の内を探るようなヴァスーラとの会話は骨が折れるし、スノウの様子も気になる。

そろそろ時間的に危ない。息は保つだろうか。

そのとき、不意にエルの肌が粟立った。

恐怖故でも寒さでもない。

「何か」の存在を感じた。

無意識に水盤を振り返る。

エルの反応にヴァスーラが眉を顰め、次いで双眸を鋭く眇めた。

彼らより一瞬遅れて、スイとアイシャが動いた。

「エル様」

アイシャが咄嗟に主を庇おうと前が出る。

水盤がぼこぼここと泡を吹き出した。

逆流する水。水面から球体となった水が幾つも空中に飛び出す。

そして、ひときわ大きな球体が水面から顔を出し、空中ではちんと弾けた。

現れたのは白い体。

雪のように白い体には一滴の水もついてはいない。

水盤に落ちる前と変わらないふわふわの毛並みのまま、目を閉じて水の球体とともに空中に浮いている。

半ば呆然と見詰める魔物たちの中で、白い猫はゆっくりと身じろぎし、

目を開けた。

深い青に彩られた双眸がエルを射抜く。

何の感情も浮かんでいない青玉。サファイア

猫のものとも人のものとも思えない、その深い色。

よく見ていた筈のその色が、見知らぬものに思えて。

「水妖か…なるほど」

呪縛を解いたのは、ヴァスーラの低い呟きだった。

我に返って、エルはヴァスーラを振り向く。

「使い魔にしては少々弱いが、まあ悪くはないね。水の属性ならばお前に似合いだろうし」

一体何の話、とエルが見つめていると、ヴァスーラは意地悪く笑う。

「悪く思わないでくれよ、エル。投げる時へネスに少し細工をさせた」

「細工？」

「首輪の鈴」

ずっとエルの表情が強張った。

「お前がご丁寧にも鈴にまで魔法をかけていたから…少し気になってな。魔法の干渉を遮らせてもらったのさ。もちろんほんの一部だ

「ただ」

「それでは、」

「ああ、そう怖い顔をしないでくれ。水妖の力を見てみたかっただけで、お前のものをどうしようよなんて気はない。ふふ、悪い癖だね、新顔とみると腕試ししてみたくなるのさ」

その言葉の真偽はさておき、彼がしたことは「魔法の遮断」だけであることは間違いのないように思えた。スノウから感じられるエルの魔力はだいぶ目減りしている。

けれど、それに混ざるようにしてエル以外の魔力を感じるのだ。

スイヤアイシャとは違う、ましてヴァスーラのもでもない、別の魔力。

微弱なそれは、魔法を発動した確かな証でもある。

「実戦においては…あまり使えそうではないがな」

幾分つまらなさそうに言つて、ヴァスーラは従者に合図を送る。

「さて、案内して貰えるかな」

空中に浮いたままのスノウを凝視していたアイシャに、ヴァスーラが声をかける。

アイシャは慌てて居住まいをただし、頭を下げた。

「はい、こちらへ…」

アイシャの案内に従つて、ヴァスーラが背を向ける。それに従者とヘネスが従い、部屋から出て行った。その姿が廊下へと消えたあと、立ち尽くしているエルにスイがそつと近寄る。

「後は私が」

スイの言葉に、エルは緩く瞬く。

「…ああ、頼む」

言つて、エルは踵を返し、後ろも見ずにヴァスーラの後を追つた。あれは何だ。

微弱ではあるが魔法としか思えない、あの現象。

魔法が使えないと言つていたスノウ。

混乱する脳裏に、一対の青玉サファイアがちらつく。

よく考えろ、とエルの本能が訴える。だが、今それを考える時間はない。

これからが本番なのだ。他のことに心囚われている場合ではない。己にきつく言い聞かせ、エルは部屋を後にする。

今は、この厄介な「兄」をどうにかしなければならぬ、と肝に銘じて。

12・白い猫（後書き）

文中にある「白雪姫」スノウ」は、私の勝手な解釈です。完全な造語です。

ちなみに英訳では「白雪姫」スノウホワイト」のようですので、「」注意を。

「このワールドではそういう意味なのね」とファンタジーに読んで頂けると嬉しいです^^;

13・帰還（前書き）

人間側のお話です。主にメリル。

これまでの話

魔王を倒すために立ち上がった勇者、スノウ。

ところが彼は記憶を失い…どうしようもないへタレになってしまふ。乗り込んだ魔物の城で、仲間の後ろで泣きだすわ、撤退しそびれるわで…結局、変わり者な魔物の思いつきで、スノウは猫にされてしまった。

一方、よもや勇者がネコにされているとは思えない仲間たち、メリルとフレイ。

命からがら城を脱出した彼らは、勇者が「捕らわれている」と信じ、援軍を求めて王都を目指していた。

襲い掛かる魔物を退けながらの旅は過酷を極め、彼らはやっとの思いでたどり着く。

王都、バルカイトへ。

「西の真珠」と譬えられる王国、パールディア。

大小の国が犇めく大陸にあつて、唯一海を望む王都をもつ。

王都バルカイトは、その周囲を六つの高い塔で囲んでおり、「六塔の都」とも呼ばれる。

その中心部に聳えるのが、国王ロンギオン？世の居城「白翼城」である。

白を基調とした美しい城は、パールディアが「西の真珠」と譬えられる所以のひとつだ。

一際小高い丘に立てられた美しい城。広大な城内には贅をつくした美しい部屋が幾つも存在し、風情ある庭園が作られている。

その、最も奥まった場所に作られた小庭園。数本の木々と美しい季節の花々、四方を囲まれた小さな箱庭を、慌ただしい足音が行き交う。

「あら」

ふと、そこを行く少女が足を止めた。ふんわりとした、大人しいつくりのドレス。踝くるぶしのあたりで断ち切られた裾から、ブーツが覗いている。城の侍女に与えられる、いわば制服のようなものである。

「どうしたの、虫でもいた？」

隣を歩く、こちらも侍女と思しき娘が問いかける。年の頃は、少女より幾らか上だろうか。

「いいえ、落ち葉が…」

掃除しなきゃ、と続ける少女に、相手は笑って言う。

「いいのよ、今日は放っておきなさいな。それよりこれを届けることが優先よ」

その両腕には大量の布を抱えている。前方が見えるぎりぎりの高さ
にまでつまれた布は、傍目にも結構な重量感がある。綺麗に折りた
たまれた、シーツのような布。

「これだけ忙しいんですもの、葉っぱのひとつやふたつ、誰も気付
かないわ」

ちらりと周囲をみやる。

普段は静寂に支配される回廊。さまざまな装飾を施された天井や壁、
支える柱も美しい模様が描かれている。複雑な装飾がそれでも華美
に映らないのは、そのすべてが白を基調としているが故だろう。

真珠と謳われる白翼城、その中に眺えられた小庭園を望む、美しい
回廊のひとつ。

侍女たちもそう滅多に通らないそこを、今日は慌ただしい足音が行
き交う。

走り回る者こそいないものの、荷物を抱えた侍女や様々な立場の使
用人が過ぎていく。

彼女たちもまた、その中のひとりであった。

「でも、何だつて今日はこんなに…」

「仕方ないわ。客室をいつでも使えるように、とのご命令なんです
もの。…あの方が戻ってらしたんですって」

ため息ついてはやく少女に、わけ知り顔で娘が話す。戻った？と未
だピンと来ないらしい相手に、顔を寄せてひそひそ話を。

「勇者さまよ。ほら、あの凜々しいお方」

まあ、と少女は喜ぶ様子だが、続く言葉に顔を曇らせた。

「でも不思議なのよ。勇者さまはいないみたい。戻ってきたのは仲
間だけで…しかもたったの二人ですって」

「…なんだか妙ね、嫌だわ」

「ねえ、不吉よねえ…」

勇者さまはどうされたのかしら…と、明日の天気でも憂えるような
風情の侍女たちだ。

血生臭さや戦いとは無縁の、彼女たちがそつとみつめる先には、豪

奢な扉。

明るい小庭園を経て、回廊の先、一際美しい扉がある。

そこは「双翼の間」と呼ばれる、来賓を迎えるための謁見室だ。

普段は使われないその部屋には、いま、国王ロンギオン？世と数名の重臣がいるはずである。

謁見に訪れたのは、国境付近の小さな街、カデイスからの帰還者。

「勇者の仲間」であるメリル・ファガードとフレイ・マルセナ、ただ二人であった。

「援軍をお願いに参りました」

お決まりの口上を述べたあと、恭しく頭を垂れてメリルは言った。

メリルとフレイが佇むのは、玉座よりかなり離れた場所である。

その間には重臣の列。その後方に王室お抱えの魔法使いの一団が控えている。

水を打ったような静寂。そうでなければメリルの声など国王の耳には届かないだろう。

「援軍、ですと」

反応したのは王ではなく、重臣のひとり、メヌキア公。

西方に領土を構える、国内でも5本の指に入る有力貴族だ。王家とは姻戚関係にあり、当然ながら発言力も影響力も大きい。王ですら無視できない存在の、重臣。

メリルは、失礼にならない程度にそつと視線を向ける。

髭を蓄えた、恰幅の良い姿が目に入る。

その鋭い眼光、若々しい風貌からは、彼がそろそろ壮年に差し掛かる年齢だとは想像しがたいものがある。けれど良く見れば、綺麗に整えられた髪や、雄々しさを際立たせる髭にも白いものが混じっていた。

メヌキア公は、己の顎に手をやり、重々しく尋ねる。

「それは人手が必要ということですか。それとも、陛下の剣が必

要と？」

勇者の「仲間」か、或いは王国軍の兵が必要なのか。メリルはひっそりと息をつく。

後者となればそれは国を挙げての戦争につながる。メリルにはそれを進言する勇氣も、またその権限もない。まして、メリルはただの「勇者の仲間」であり、任を解かれれば庶民に戻る身の上。

任を解かれても貴族に次ぐ力を得られる「勇者」とはわけが違う。メリルなりに、分はわかまえているつもりだった。

「…それは、お任せ致します。」

お恥ずかしながら、私たちは敗れました。彼の地の脅威はまだまだ取り除かれてはおりません」

「…なるほど、敗れたと仰いましたな、メリル・ファガード」

「はい」

「他の仲間はどうされた？」

「…故あって離れ離れに」

「皆が皆殉死というわけではないのですな？」

故あって、とはどういう意味。

言外に匂わせた問いかけに、メリルは用意していた言葉をつむぐ。

「不測の事態が起きました。カデイスに着く前に、勇者が負傷したのです。そのため何日も足止めとなり…彼らには一度離脱して貰いました」

信奉者の多かった「勇者」。

この城を出立する際には、勇者を含め17名の大所帯だった。この問いかけは尤もなもので、だからこそメリルはすらすらと嘘をつくことができた。

これはひとつの賭けだった。

勇者の下から去った仲間たちが、報告している可能性は捨て切れない。

即ち、勇者が記憶喪失になったと。

既に報告されていれば、メリルの嘘は意味のない物になる。

ただ、「己の意思」で勇者の元を去ることは「脱走」とみなされ、場合によっては死罪だ。

彼らがそのリスクを冒して報告に戻るとは思えなかった。勇者を見限った彼らが。

だからこそ、メリルは嘘をつくことにした。

誰も脱走なんてしていない。彼らは、「やむなく」離脱したのだとこの嘘が露見すれば、勿論メリルもただでは済まない。

だがメリルには真実を告げる気などなかった。

勇者を見限った仲間たちを許せない気持ちはある。

けれどその気持ちも、理解できてしまうから。

「なるほど…しかし少数での討伐とは、無謀だったのではありませんか」

「今となれば、申し開きようもございません。ですが、魔物の長の姿は確認できました。…カデイスにあるあの城が脅威であることは確信しています」

「魔物の長まで辿りつきながらの敗退…勇者はどうされた？」

最も知りたかったであろうことを、メヌキア公はさりげない口調で尋ねた。最前、仲間の行方を尋ねた時と同様に。

「勇者は」

鉛を呑んだように、胸が重い。告げなければならぬ事実。嘘偽りのないそれを、言葉にするのが苦しい。

「今も魔物の城に」

違う、と脳裏で冷静に指摘する声がある。わかっている。これは逃避でしかない。フレイのように一途に信じるだけの純粹さも、無垢な心もない。

「城に？…それは、勇者が捕えられたということか？」

「…はい」

メリルの僅かな逡巡に、何かを感じたらしいメヌキア公は、黙って首肯した。

「それではメリル・ファガード。援軍の要請は勇者救出のため、と

仰るか」

は、と見上げた先、鷹のように鋭い双眸とぶつかった。試すような、疑うようなその視線の意味がわからないほど、メリルは愚かではない。救出。

それが可能ならどんなにいいだろう。

そのつもりだと、真っ直ぐに頷けたらどんなにいいだろう。

メリルは深く呼吸をする。

視界の端に、怪訝な表情のフレイが映った。

『救出のために援軍を呼ぼうと帰還したはずなのに、どうして躊躇うの』

そんな、声なき声が聞こえる気がする。

「いいえ」

その視線を振り払うように、メリルは力強く言った。

「最優先は彼の地の脅威を取り除くこと。むしろ勇者の救出が可能ならばそれに越したことはありませんが…カデイスの脅威と私たちが目にしたことをお伝えし、魔物を討ち果たすことを…勇者も望むでしょう」

「…メリル…？それ…」

あたかも、勇者は既に存在しないというような。救出など無理と言わんばかりの、その言葉。

気付いて、フレイがメリルにぎりぎり届く声量で呟いた。

肩越しにフレイを顧みて、その表情にメリルは胸が痛む。

「何、いつてるの…？」

理解できない、と言いながら、フレイの双眸には絶望の色がある。聡い少年。

そのまっすぐな瞳を見ていられなくて、メリルはすぐに視線をそらす。

「なるほど。勇者が捕らえられたとなれば、それは確かに脅威といえよう。何を見たというのかね」

さあ、と促されて、メリルはほつと息を吐く。

「恐れながら申し上げます。彼の地に存在する魔物は私たちの常識を覆すものでした。長と思われる魔物は、外見はまるで人間と変わりなく、人語を話し、強力な魔法を操ります。あの城にはこれまで戦ったことのないような、膨大な数と種類の魔物が存在していました」

周囲がざわめいた。

だが、メリルが思っていた程の混乱や反発は見られない。それを不思議に思いながらも言を継ぐ。

「事前の情報通り、彼らは長の元に統率の取れた…軍隊のようなものを形成しているようです」

二度目に訪れた「城」の光景が思い浮かぶ。扉からあふれだす、魔物。列をなし、明らかに統率のとれた動きをしていた。

「それは…魔王ではないのか」
どこからともなく漏れた囁きに、ざわめきが漣のように広がっていく。

違うだろうとメリルは思う。確かに対峙した魔物は強大な力を持っていたし、すべてが初めて目にする光景だった。

だが、魔王と呼ぶには何かが違う気がする。

あの魔物はなんといっていたらう。藍色の髪をした、人のような姿の魔物。

『今は兵力が惜しい』

それはまるで、何かと戦うための準備のような。

人間と？それともそれ以外の何か？

ぞくり、とメリルの背に戦慄が走った。

冰山の一角

「メリル・ファガード」

不意に響いた声に、メリルは我に返る。

ずしりとした、重みのある声。さして大きな声ではなかったが、他を圧倒してその場に重く響いた。

誰もが息を呑み、口を閉ざす。

仰ぎ見る先には、玉座のロンギオン？世。

「…はい」

居住まいをただし、メリルは頭を垂れる。

「よくぞ無事戻った。カデイスからの道程、決して易くはなかっただろう。余はそなたらの働きに満足している。…勝敗の行方は時の女神の掌、そなたらの責だけではない」

ロンギオン？世は、まずはそう労ったあと、言葉を継ぐ。

「実に興味深い報告であった。…これで、余も確信がもてたぞ」
僅かな間を置いて、低く呟かれた言葉。

確信、とは何の。

「…は」

思わずメリルは息を詰める。冷静さを取り繕おうとして、失敗した。

「魔法使い」

ロンギオン二世の呼びかけに、大臣たちの後方に控えていた魔法使いの一団が動く。

白い衣服に身を包んだ20人程の集団。目深に被ったフードのため、どの人物の顔もよくわからない。その中から、一人の魔法使いが静かに進み出た。

足元まで覆う長い衣に、指先まですっぽりと隠れる広い袖。両肩から垂らされた青い布は、王室お抱えの魔法使いの証だ。他の魔法使いと目立った違いはみられない。

痩せた体を低く屈め、深く腰を折る。体の前で組んだ両手を頭より高く掲げると、魔法使いの頭部は広い袖の向こうにすっかり隠れてしまった。

「この者は遠見の力を持つ。そうだな、キュステ」

問われて、キュステと呼ばれた魔法使いはゆるゆると頭を上げた。それでも目深に覆われたフードに遮られ、容貌は判然としない。僅かに覗く薄い唇が、うつすらと笑みのようなものを象った。

「…仰せの通りにございます」

落ち着いた、中性的な声。

「その目で見た事を再度申せ」

促されて、キュステは再び頭を下げると、恭しく語りだす。

「人とよく似た形の魔物が、龍を駆る姿が見えました。天空を幾つもの巨大な龍が飛翔し、その下には漆黒の城と不毛の土地。そこには数多の魔物が集い、血の饗宴を繰り広げております」

答える声には淀みがない。まるで今しがたその光景を見てきた、と言わんばかりのその口調。

メリルは息を呑む。

人に似た魔物と言った。それは先だつての戦いでメリルたちが直面した現実に他ならない。そして、たったいま報告したばかりの、事実。

「そしていまひとつは、巨大な岩山」

びくり、とメリルの肩が強張った。

「真紅の魔物、その足元に横たわるは白金の髪の若者」

「っ！！」

「嘘だ！」

馬鹿なと叫びかけたメリルの背後で、フレイが絶叫する。

「違う！スノウは…違うっ」

幼い顔を今にも泣き出しそうに歪めて、フレイは首を振り続ける。

その取り乱した様子に、メリルはたと我に返った。

知らず呼吸を止めていたことに気付き、密かに深呼吸をする。

…冷静にならなければ。

ここに戻ったのは、打ちのめされて泣くためではないのだから。

「フレイ…落ち着いて。陛下の御前よ」

だから、フレイの肩にそつと手を置いて宥めようとした。

その手は、予想もしない激しさで弾かれる。

メリルをまつすぐ射抜いたフレイの目は、燃えるように激しい。

怒り。焦り。

飾ることのない一途なその感情が、メリルの胸を抉った。

「…申し訳ありません、陛下」

一呼吸置いて、大人びた口調でフレイが謝罪した。

「…いや、よい。そなたには、辛すぎたかもしれぬ」

ロンギオン？世は言つて、深く息をついた。

「余はこの遠見を7日前に聞いたのだ。俄かには信じがたい話だったが…こうしてそなたらの報告をきくとそうもいっておれぬようだ」
王の合図で、大臣が進み出る。

緊張した面持ちで手にした羊皮紙の巻物を解く。

「審議の結果、5代目勇者スノウ・シュネーは殉死と認定。その功を称え爵位と報奨金」

「…お、お待ちください！」

咄嗟にメリルは口を挟む。

本来ならば、許されない行為だったがそれを気にする余裕はない。確かに、スノウが生きている可能性は低い。だがその遺体も確たる証拠も確認しないうちに、こんなに早く「殉死」にされてしまうとは。

反面、それも仕方ない、と思う気持ちもある。だが、心が付いていない。冷静な部分では確かに理解しているのに、心がうまく理解できないでいる。

内心の葛藤に躊躇いが生まれる。勢い込んで言ったものの、言い淀んだ。

「…まだそうと決まった訳では…」

「決まったも同然でしょう」

メリルのぎこちない訴えを遮ったのはメヌキア公だった。

「魔法使いの言葉もさることながら、勇者が捕えられたということは何よりの証ではありませんかな」

「…ですが、生きてます！」

力強く反論したのはフレイだった。メリルを押しつけるような勢いで叫ぶ。

メヌキア公の目が僅かに細められた。

「魔物の特性は、一番わかっておられるだろう。魔物は狂暴にして残忍、捕えられた勇者がいつまでも無事でいると？」
無事なはずはない。

これまで散々染みついてきた戦いの記憶が、冷静にメリルに宣告する。

「…生きてるにきまつてる。スノウが…スノウが死ぬはずなんかないんだ！」

拳をぎゅっと握り、フレイは力強く言い切る。

魔物がどんなものか、フレイにわからないはずはなかった。それでも、自分に言い聞かせるように、支えにするように、フレイは言う。
「信じたい気持はわかる。だが…現実を受け止めねばならん。そなたは、本当は勇者の死の報告にきたのだろう」

憐れむようなメヌキア公の眼差しが、メリルを捕える。

ずきりと胸が痛んだ。

そうだ。

援軍なんて、口実。

仮に要望が通ったとしても、援軍を率いて再びあの城に戻る気など、メリルにはなかった。

あの城にあつては、半端な援軍など無意味。無駄な屍を増やすだけ。救出は難しく、かといって自分ひとりで死ぬ訳にもいかない。

だからメリルは「救出のための援軍を」と言った。

ことの全てを誰かに委ね、フレイの身を安全なところに委ねよう、そう思った。

それでメリルの責務は終わる。ほんの一端ではあるけれど。

「嘘…だってメリルは…スノウを助けるために、援軍を」

「…勇者さまはきつともう、生きていない」

「メリルっ…！」

フレイが悲鳴に似た声を上げる。

「あの状況では…もう無理よ。わかってるでしょう」

罪悪感にきりきりと胸を締め付けられながら、メリルは言う。フレ

イはメリルから視線をそらし、大理石の床に視線を落とす。悔しげに歪んだ唇は小刻みに震え、顔色は青さを通り越して白い。

「…っうそつき」

苦しげに、フレイの唇から洩れる。

予期していた筈の非難に、メリルの胸に痛みが走った。わかっている。こんなものでは済まない。

フレイには、メリルを糾弾する権利がある。メリルはその全ての糾弾を受けなければならぬ。

わかつてはいたが、ほんの少しの短い言葉だけでメリルの胸は押しつぶされそうだった。

フレイの顔がまともに見られず、視線を外して押し黙った。

重苦しい沈黙が両者の間に流れ、大臣は慌てたように文面を読み上げ始める。

報奨金の額。支給先。勇者の葬儀から埋葬に至るまでを滔々と読み上げ、最後に言った。

「よって、これに新たな勇者を選任、6代目勇者としてクロス・エセルを任命するものとする」

つかの間、時間が止まる。

「な…」

声が出ない。

6代目の、勇者？

メリルは呆然と大臣を仰ぐ。役目を終えた大臣は、ちらりと憐れむようにメリルを一瞥し、羊皮紙を元通り巻き直してすると下がっていった。

「勇者…？」

フレイがぼつりと呟く。

「そんな…」

意味もなく喚きたい衝動を、メリルはどうにか飲み下す。

報告に戻っただけのつもりだった。誰かに役目を押し付けて、後はどうなっても関係ない。

勇者の死の可能性は、いずれ次代の勇者の選出へと繋がるだろう。だがそれは、メリルには関係のない話の筈だった。

次代の勇者の選出の時、メリルは既にいない、そのつもりだった。スノウ以上の勇者など、考えられなかったから。

スノウはメリルにとって尊敬できる唯一の勇者だから。

責務を誰かに託して、そのまま单身とって返すつもりだった。

救出など愚か。犬死など愚か。けれど、愚かだと分かっても止められない。救出できないのなら、せめて殉死したいと。

なのに、これはどういうことだろう。

この場で次の勇者の名を聞く事になるうとは、思ってもいなかった。勇者が戻らないと報告したこの場で、新たな勇者が用意されていようとは。

ぎこちなく視線を彷徨わせるメリルに、ロンギオン？世が優しく告げる。

「案ずることはない。そなたに仇討ちの機会をやるう」

「仇……」

空回りする思考で、言葉を反芻した。状況をうまく処理できないでいる「勇者の仲間」たちの前で、事態は着々と進んでいく。

幾人かの兵士が動いた。は、と視線を転じると入口の扉がゆっくりと開くところだった。

その先には、見慣れない人影がある。

大臣や兵士たちとは違い、正装らしい正装もしていない。貧しさはないが、至って簡素な福をまとった青年。

自分たちと大差ないその装いに、メリルの中で予感がむくりと首をもたげた。

「勇者クロス・エセルとともに、カデイスへと向かえ」

ロンギオン？世が声高に告げる。

見慣れないその青年が、深々と腰を折った。

13・帰還（後書き）

> i8271 | 288 <

ご立腹なフレイ。熱血12歳ですが、設定年齢より上になりがちな私のイラスト…。うーん。子供って難しい。

14・勇者（前書き）

人間側のお話です。

これまでの話

魔王を倒すために立ち上がった勇者、スノウ。

ところが彼は記憶を失い…どうしようもないへたレになってしまふ。乗り込んだ魔物の城で、仲間の後ろで泣きだすわ、撤退しそびれるわで…結局、変わり者な魔物エルの思いつきで、スノウは猫にされてしまった。

一方、よもや勇者がネコにされているとは思ひもしない仲間たち、メリルとフレイ。

彼らはやっとの思いでたどり着いた王都バルカイトで、新たな事態に直面する。それは、6代目の勇者が既選ばれていたという現実だった。

花瓶が、派手な音をたてて割れた。

床に飛び散る白磁の破片。水と共に色とりどりの花が床に溢れる。

城の侍女が丁寧に活けたであろうそれが、ばらばらと崩されていく様を、表情ひとつ変えずメリルは見つめる。

「いいよ、もう」

メリルの方を見ずに、震える声でフレイが呟いた。彼の手は、水と、花瓶の欠片で傷つけたのだろう、血で濡れている。

「もう、言い訳はききたくない」

「フレイ……」

メリルは声を詰まらせる。

メリルにあてがわれた、城の一室。

寝台と机があるだけで華美な調度品は殆どないが、美しく整えられた上品な部屋である。

城の滞在用にと詭えられた、メリルの為の部屋だ。

重厚な机の横に、フレイはメリルに背を向けて佇む。足元には今しがた割れたばかりの花瓶。

その衣装は常の質素な旅装ではなく、上質な貴族服である。そうした格好をしていれば、元々の愛らしい容貌もあって良家の子息でも十分に通る。

そして、メリルもまた旅装ではなかった。赤いドレス、豪華な装飾品、綺麗に結い上げられた金色の髪。

まるで貴族の娘のような、仮初めの姿。

王に謁見してから、2日が過ぎようとしていた。

この夜は、帰還の労をねぎらうためと、新たな勇者の選任の祝いという名目で晩餐会が開かれたのだ。

だが、当然ながらメリルの気は重かった。

喪った存在と未来、仲違いしてしまった仲間を思うと、胸がふさいだ。

人々の会話も祝いの言葉も、すべてが上滑りしていく。豪勢な、けれども殆ど味わうことのできなかつた食事をなんとかやり過ごし、部屋へと引き上げた。

途中、同じように重い足取りで引き上げるフレイを見かけ、気付けば呼び止めていた。

『少し…話をしない？』

フレイは無言のまま、メリルに近づく。それを肯定と受け取って、メリルはフレイを部屋へと招き入れると口火を切った。

あの時のこと。援軍のこと。謁見室でのこと。見苦しい弁解であることは自覚していた。けれど、このままではフレイと分かりあえないままだと思った。できてしまった溝をなんとか埋めたかったのだ。

「僕だつてわかつてる」

ひとつ息をついて、抑えた声でフレイは続ける。

「アイツは強すぎたし、僕らだけじゃどうしようもないってことぐらいわかつてるよ。でも…スノウを助けるって、そういったよね」「それは」

「スノウを助けるために援軍を呼ぼうって！そういったじゃないか！メリルは違ったの？最初から、あのときから諦めてたの？」

「っ、違うわ！私も」

「じゃあどうしてあんなこと！」

勢い良く振り向いたフレイの双眸は、思わず息を呑むほどに激しい光を宿している。

「スノウが死ぬはずない！生きてるんだ！あの瞬間まで、僕たちは一緒だつたんだから！」

血を吐くような、フレイの叫び。

耳をふさぎたい気持ちを必死で耐えて、メリルは拳を握る。
あの時は。

フレイにそう言い聞かせたときは、まだメリルも可能性を信じていた。
きつと生きている。今戻ればまだ間に合うはずだと。

けれど時間が経つにつれ、冷静になるにつれ、現実がのしかかってくる。

仲間はなく武器もなく、こちらは既に満身創痍。

片や魔物は何の痛痒もみせない。

諦める、と冷静な自分が囁いた。

己が可愛いなら勇者を見捨てると。

他の仲間はそうしたのだからそうしたところで何が悪い、と。

「…フレイ」

フレイの気持ちは痛いほど分かった。

信じたい気持ちも。

けれど、それを闇雲に信じ続けられるほど、メリルは強くも純粹でもない。

現実とは現実として。より確かな道を進まねばならない。

乾いた唇を舐めて、口を開く。最も聞かせたくない現実を告げなければ。

「でも…今頃は、もう…」

「聞きたくないッ！」

ぴしゃりと遮られた。

「生きてるよ！メリルだってそう言ったじゃないか。スノウは死なないって！」

今更ごまかしだったなんて言わせない。

燃える栗色の双眸が、メリルを射抜く。

声にならない叫びが、けれど確かにメリルの耳に届いた。

フレイは許せないのだ。

メリルが、スノウを切り捨てる発言をしたことを。

尊敬する勇者。大切な仲間。その彼を、あっさり「死んだ」と切り捨てたメリルが許せない。例えそれが真実だとしても、切り捨てたその行為が許せない。

そうと気づいて、メリルは言葉が継げなくなった。違うとはいいきれなかった。

見捨てることも選択の内にあつたから。

「…ごめん」

卑怯だと思いながら、メリルは呟く。

フレイはそれきり押し黙った。

床に散らばった花が、水に浸って形を崩していく。

その様をメリルはただ眺めていた。そうするより他に動けなかった。

沈黙を破つたのは、扉を叩く音だった。

はっとして、メリルは扉を振り返る。

視界の端でフレイが体を強張らせたのが見えた。

正直なところ、この状態で誰かと会話をする気にはなれなかった。

勇者の仲間として敬われるのも、恭しく頭を下げられるのも、苦しい。

胸の中で鬨ぎ合う罪悪感。

澱のように凝ったそれを努めて見ないようにして、メリルは扉に向かった。

取っ手を掴む手がやけに重く感じる。

不在のふりをしてしまおうか。

束の間脳裏をよぎった考えを、メリルは緩く首を振って否定する。

逃げて、どうにもならない。

もう逃げることはできないのだ、と深呼吸をして、扉を開けた。

「やあ、突然悪いな」

果たして、扉の外に見出したのは侍女や兵士といった、「城の人間」ではなかった。

その服装から、ある程度の身分であることが見受けられる、青年。この地方ではよく見かける、明るい亜麻色の髪。空色の双眸は活き活きと輝き、健康的な肌の色と相まって爽やかな印象を与える。貴族の若者にしては、違和感のあるその特徴。少し首を傾げて思案して、メリルはふとひらめいた。

「…あなたは」

「はじめまして、メリル・ファガード。おれはクロス・エセル…晚餐会じゃ碌に話もできなかったから。改めて挨拶に来たんだ」

メリルが言い当てるより先に名乗った。浮かべられた屈託のない笑みは、年相応の少年らしさを覗かせる。

6代目の勇者。

細められた青い色彩に、メリルの記憶が鈍く疼く。

同じ年齢、似た色の瞳の、同じ立場にあった青年。

脳裏に浮かぶのは憧れてやまなかつた彼ではなく。

頑ななメリルに困ったような笑みを浮かべた、あの日の凡庸な青年。優しい面影を無理やり意識から追い出して、メリルは言葉を搜した。

「…はじめまして」

ぎこちなく挨拶をする。なんと続けて良いかわからず、メリルは視線を逸らした。

「ああ、ほら。だからいったでしょう、クロス」

不意に第三者の声割って入る。

「女性の部屋に不躰ぶしつひに押し掛けるものじゃないって…すみません」
視線を上げると、クロスの後ろに背の高い姿が目に入る。

ほっそりした姿の若者。年のころはクロスとそう大差ないだろう。

濃い茶色の髪はやや長めだ。首の中ほどまで伸びた髪、メリルを見つめる両目は、メリルのそれより幾分暗めな緑色をしている。

見るからに剣士といった様子のクロスとは対照的に、おとなしげな容貌や柔らかな物腰は戦闘などとは無縁のものに思われた。

怪訝なこちらの視線に気づいたのだらう、相手はメリルに向けて柔らかに微笑んで言う。

「私はレリック・ソーン。彼の仲間で…魔法使いというやつです。治療系は得意ですよ」

「うそつけ、攻撃系の方が得意なくせに」
穏やかな自己紹介に、クロスがささず割って入った。
それを咎めることなく、レリックは軽く肩を竦めて言う。

「得意な訳じゃないさ。向いてる、と言われたことはあるけど」
「だろうな。お前の火系魔法はえげつないもんなあ」

「失礼なやつだな、それで助かったことは一度や二度じゃないだろ？」

「言ってる」

二人の間の気安いやりとりをメリルはぼんやりとみる。

どうやら、彼らは本物の「仲間」であるらしい。付け焼刃のメリルたちとは違って。

自分たちの絆が細いものだったとは思わない。
互いを尊敬していたし、尊重していた。けれどこういう形の「仲間」もあるのだと思うと、何やらひどく眩しく思えた。

仲間が全てバラバラになってしまった今だからこそ、余計に。

「…ですか？」

問いかけの言葉に、メリルは我に返る。

目を上げると、まっすぐな視線とぶつかった。

「あ…ごめんなさい、ぼんやりしていて」

聞いていなかったのだと暗に告げると、首をふってレリックが言った。

「いえ、お疲れの所に押しかけてすみません。それでも、なるべく早くお話しておきたいことがあります」

「お話…？」

メリルは顔を曇らせる。あまりよくない想像が脳裏に閃いた。

それをすばやく看取って、クロスが慌てたように口添えをする。

「違う違う、そんな大した話じゃなくて！お前も！そんな紛らわしい前置きするなよ！」

クロスに指摘され、レリックは困惑気味に頬を掻く。

「これは…すみません。不安にさせてしまいましたか…」

己の失態に気付き、メリルは唇を噛む。このところ、どうにもマインスな方向に思考が傾いてしまっている。

勇者の記憶喪失から端を発し、様々なことが短期間に頻発した。それだけでもメリルにとっては許容量を遥かに超えていたのだが、そこにきて「新たな勇者」が既に出出されていたという事実が、思いのほか心に重くのしかかっていた。

希望などないのだという、絶望にも似た感情と恐怖が常につきまとう。

つい2日前まで、魔物を相手に切り結んでいたのだ。その余韻の為か、平和な感覚をなかなか取り戻すことができずにいた。不測の事態、最悪の事態ばかりを想像してしまう。

ここは違う、とメリルは己に言い聞かせる。

ここは魔物の蠢く「外」ではない。
気を取り直して、努めて明るい声を出した。彼らにこれ以上気を遣わせるのは申し訳ない。

「いいえ。…それではどういった用件で？」

「いえ、よろしければ、ご一緒に食事でもと思ひまして」

紳士の笑顔でレリックが言う。こんなきらきらしい笑顔で言われれば、大抵の女性は眩暈を起こすだろう。状況が状況ならメリルも陶然としたかもしれないが、生憎今の彼女にはそれだけの余裕がなかった。しきりと瞬きを繰り返し、レリックの言葉の意味を考える。

その様子を見ていたクロスは、おもむろに腕を上げるとレリックの後頭部を軽くはたいた。すぱん、と小気味良い音がして、レリックがつんのめる。

「ちよ、何を…」

抗議の声を上げるレリックを見ることもなく、クロスが補足した。

「お前が言っているとナンパにしか聞こえない…じゃなくて、今後の話を

したいんだ。おれたちはカデイスに行くのは初めてだし…できる限り情報がほしい。それにこれから一緒に旅をするんだ、お互いのことをよく知るためにも」

クロスが言うことはもつともで、理解はできた。仮にも「仲間」として旅をする以上、話し合うことは必要だろう。

「…けれど、これから？」

先ほど晚餐会が終わったばかりなのだ。食事などする気にはなれないし、第一外出が許されるとは思えない。渋るメリルに、クロスは慌てて言い募る。

「あ、違う違う。日を改めて…明日でも明後日でもいいんだ。出立前に一度話ができればそれでいい」

どうか、と促されてメリルは戸惑う。

戸惑う理由などないはずだった。

メリルはカデイスに再び戻ることができ、新たな勇者と王の兵士という心強い「援軍」も手に入れた。図らずもフレイに言っけかせたような、理想どおりの方向に動いている。

万にひとつの可能性でスノウがまだ生きているなら、救出が可能なら、これに勝る結果はないだろう。

しかしそれでも、メリルは迷った。

クロスの「仲間」となること。

それはまるで、スノウを捨ててしまうようで。

今更、と晒う気持ちもある。

幾度となく「見捨て」てきたではないか、と。

けれど、それでもメリルにとっての勇者はスノウただ一人だった。

目の前の青年は、確かに勇者だろう。

技量、力、人格共に高い資質を持つ、選ばれし者。

その彼を「勇者」と呼ぶことが果たしてできるだろうか。

スノウが死んだと、そう判断しても尚、納得できないでいる自分が。メリルはつかの間目を伏せた。

戸惑いに揺れる気持ちを、相手に見透かされたくはなかった。

ひとつ呼吸をおいて、頷いた。

「いいわ」

クロスがぱつと顔を輝かせた。レリックも安堵したように息をつく。「よかった、いつに…」

勢い込んで言ったクロスが肩をレリックが軽く抑える。

「今夜はこの辺りで失礼しよう。…また明日にでもご連絡します」

「あ、そうか…こんな時間だもんな。悪かった」

上品な仕草で礼をするレリックの隣で、クロスは困ったように頭を掻きつつ言う。

「いいえ…わざわざ、ありがとう」

少しだけ心がほぐれて、メリルは礼を述べる。

咄嗟に笑顔を作っていたのだろう、クロスが明るい笑みを返してきた。

「あ、そうだ。これからよろしくな！」

去り際、思い出したようにクロスが手を差し出してきた。

真っ直ぐな眼差し。正義感にあふれるその瞳と、歪みなど知らないような純粹な笑顔。

メリルは僅かに目を細める。

太陽のように眩しくて、正視するのが酷く辛い。

「…こちらこそ」

言って、手を伸ばした。

勇者、とは呼びかけずに。

14・勇者（後書き）

> i10719 — 288 <

6代目勇者クロス・エセル（左）と、レリック・ソーン（右）です。当初新キャラはクロスだけでしたが、急遽お仲間の登場となりました。人間側の話はどうしても暗くなりがちなので、今後彼らが活躍してくれる…かもしれません。

次話で主人公サイドに戻ります。多分、少しシリアス展開です。

<http://288.mitemin.net/i10719/>

15・目覚めたら(前書き)

……ほんと、遅筆ですみません！

来年もこんな調子でまったり更新ですがよろしくお願ひしますm)

——) m

15・目覚めたら

怖い、と誰かが問いかけた。

その言葉に頷いた。

そうだ。怖い。怖くてたまらないんだ。

認めてしまうと少し心が軽くなった。こんな言葉ひとつ、自分は碌に主張できなかったのだと気づく。

何が怖い、と声は再び問いかける。酷く不思議そうに。

唇を舐めて、言葉を搜した。怖いことはたくさんある。けれどそれをどう説明すれば伝わるだろう。なんと言えば相手は頷いてくれるだろう。

視線を地面に落とした。草臥れた長靴と、足元に伸びる自分の影が目に入る。影が手にしているのは剣だ。実際のそれは鞘に入ったまま。けれど影だけでは、抜き身のようにも思えた。

それはまるでもうひとりの自分。それが心に巢食う闇なのか、勇敢な猛者なのか、自分ではわからない。解き放ち相対するまでは、正体は謎のまま。

目を伏せて、吐息とともに呟いた。

怖いのは……

目覚めたら、目の前ぎりぎりにナイフの切っ先があった。

「……」

驚き過ぎて、声もでない。

一体何事が起きているのか全く認識できずに、スノウはただ切っ先を見詰めた。

「おや、お目覚めですか」

落着いた声音が問いかけてくる。つられて視線を上げると、林檎酒色の目とぶつかった。水色の長い髪を垂らした、冷たい美貌の魔物。

スイだ。

「う、うん……」

頷くと刃先が突き刺さりそうな気がしたので、スノウは硬直したまま応じた。

スイは暫くスノウの様子を観察しているようだったが、ややあつてナイフをひっ込め、

「異常はありませんか」

と至極事務的な口調で言った。

異常も何も、とスノウはまだ上手く回らない頭で考える。

起きたら目の前に刃先、なんて事態が既に異常以外の何物でもない。たださすがに「それはこっちの台詞だよ！」とは抗議できないでいた。下手に機嫌を損ねようものなら、ぶっすり刺されそつだ。眉ひとつ動かさず。

そんなスイが容易く想像がついて、スノウは寒気を覚える。

何やら夢を見ていたような気がするが、寝起きの一連で夢の残滓が吹き飛んでしまった。

「……ないみたい」

軽く頭を振りながら、自分の置かれている状況を考える。

そう明るくはない、どこかの一室。スイがいることから城内のどこかであることは間違いないだろうが、見覚えのない部屋だった。

木製の椅子と机、いくつかの家具が整然と置かれた、落ち着きのある部屋。エルの部屋のような重厚感はないが、どこか古風な雰囲気漂っている。淡い陽光の漏れる窓には重厚な生地のカーテンが掛けられ、その若草色の生地には鳥の羽のような美しい模様が織り込まれていた。

ふと視線を落とすと、スノウの体の下に敷かれているクッションにも同じ模様が織り込まれている。背もたれのある、木製の椅子に幾重にも置かれたクッション。その上にスノウは寝かされていた。

「それは良かった」

にこりともせず言って、スイは手近な椅子に腰かけた。

「それで、何か覚えていますか？」

出し抜けにそんな問いかけを投げってきた。

「何か？」

一瞬、スノウの脳裏を記憶喪失である事実がよぎった。その件に関して言えば、まったく思い出せない。少々寝ていた程度で思い出すなら苦勞もしていない。

そう考えて、スノウはあれ、と首を捻る。

寝ていた？

何かおかしいと気付いて、スノウは記憶を辿る。

城の中が騒がしかったのはつい最近のこと。「あの方」とやらが到着したのは。

ヴァースラの顔を思い出したところで、スイがくつと笑った。スイを包む空気が僅かに変質する。それはお世辞にも友好的とは言えない、緊張を伴うもので。

「私はどうやら、貴方を少々甘く見すぎていたようです」

スノウの返答も待たずに言って、スイは品の良い笑みを浮かべた。

その目は、少しも笑っていないかったけれど。

「……？」

スイの言わんとすることが分からず、スノウは首を傾げた。

一体何の話をしているのだろう。

「覚えてないのですか、勇者」

スノウの様子に、スイは動じることもなく問いかけてきた。予測の範囲、そんな気配すら感じられる。

「覚えて？ 何を？」

だから、すんなりと疑問を口にした。

覚えていないのは、この城を訪れる前の記憶。勇者として魔物を倒していたという自身の記憶。だがそれは、魔物たちが知るはずのない事実だ。

もしかや記憶喪失であることを感づかれただろうか？

「可能性はあると思っていましたが……やはりですか」

溜息をついて、スイが首を振る。
ますますわからない。

「……えーええと？」

戸惑って意味もなく周囲を見回す。

そんなスノウの様子に、スイは再び嘆息して言った。

「魔法を使った記憶は？」

「ないけど？」

即答する。

あるはずがない。人であった時に散々試したのだ。拳句、仲間であった魔法使いから「魔力が感じられない」と断言された苦い思い出がある。言った相手の顔すら、今となれば思い出せない。

「真実とすればあまりに愚か。演技とすればあまりに陳腐、といった処ですね」

スイは唇に薄い笑みを履いて、スノウには理解不能なことを呟いた。
「スイ？」

何のことかわからないスノウはただ首をひねるばかり。

「いえ、覚えてないようですからお教えしますが、貴方は魔法を使つたのですよ」

優しげともとれる口調でスイが言った。

「……は？」

今度こそ完全に頭が混乱して、スノウはぱかっと口を開けた。

「大層なものではありませんでしたが……そうですね、水に属する魔法の類です。私たちもまさか貴方があのような行動に出るとは思ってもいませんでした。驚きましたよ」

「……っ、ちよ、ちよっと待って」

軽く酸欠になりながら、必死でスノウは口を挟む。

何が何だかわからなかった。スイの話の聞けば聞くほど混乱が加速しそうで、なんとか時間を稼ごうと急いでまくし立てる。時間を稼いだところでどうなるとも思えないが、今のスノウに気付く余裕はない。

「いやあの……違うよ、俺魔法使えないし……一度も使えたことなんてないんだよ？」

「以前はどうあれ、貴方が行使したのは間違いなく現実です」
さらりとスイが応じる。

「してないよ。使えないんだったら」

ムキになってスノウは言い募る。そんなはずはないのだ。第一、使えるのなら今頃ここにこうして猫でいる必要はない。

「勇者、ひとつ忠告をしておきましょう」

噛み付かんばかりのスノウを軽く手で制して、スイは目を伏せる。

金色の輝きが、淡い色の睫の奥に潜められた。

「貴方が魔法を『使えない』ことにしたのであればそれで構いません。貴方の思惑など私には関係ありませんからね。ただ、エル様に関わるとなれば話は別」

伏せていた瞼を上げて、スノウを射抜く瞳は限りなく真剣だった。

氷山のように冷たく乾いて、けれども炎のような闘志が揺れていた。

「エル様に牙を剥く素振りがあれば……わかりますね」

穏やかな声音。その裏にひそめられたスイの本気に気づかないほど、スノウは鈍くも愚かでもない。

「……そんなことは、しないよ」

勇者である以上、無理なことなのだけけれど。いつかはエルと対峙せねばならない。互いに敵である事実は変わらない。

それは分かっていたが、気づけばスノウはそう答えていた。

「いい心がけです」

言って、スイは小馬鹿にするように笑う。

何を言ったところでスイが信用しないことは、スノウにもわかっていた。魔法の云々はともかくとして、スイはスノウを信用することはない。

エルを守るためには、危険分子は少ない方がいい。スイが自分を快く思わないのも理解できた。

エルが、唯一無二の主なのだから。

「……………」

急に、胸の中がもやもやして、スノウは首を捻る。もやもやする理由がわからない。ひどく曖昧な、不快な感情。一体なぜ、と自問しても明確な答えは見当たらなかった。

理由を分析する間もなく、スイの立ち去る気配に顔を上げる。

「失礼します」

スイは優雅な身のこなしで立ち上がり、そのまま出ていくのかと思いきや、つかつかとスノウに近寄ってきた。

「えっ」

先ほどのナイフの一件が脳裏をかすめ、スノウは思わず身を引く。しかしスイは指一本動かすことなく何事かを呟いた。言葉に呼応してか、周囲の空気がざわめく。

「さ、何の異常もないとあれば、とりあえず退室を願います」
退室？

きよとんとしてスイを見やると、スイは相変わらずの冷静な表情で言う。

「ここは私の部屋ですから」

スノウの体をふわりと風が包み込んだ。慌ててもがくスノウを難なく抱え込んで、風は勢いよく開け放たれた扉へと走る。

そして、扉から出た瞬間に文字通り放り出された。まるで、ごみでも放り捨てるようなぞんざいさで。

間髪いれず勢いよく閉まる扉。

廊下にぽつんと放り出されて、スノウは呆然としていた。

「……………困ったなあ」

呟いて、溜息をつく。

スノウは現在、見知らぬ場所に来ていた。勿論城内には違いないのだが、スノウには馴染みのない階層である。エルの部屋がある階層

より下の、スイやアイシャたち下級貴族の階層だと思われた。

スイから乱暴に放り出された結果、自力で階層を移動する術を持たないスノウはひたすらに彷徨っていた。以前は偶然にもエルの部屋へとたどり着いたが、偶然は何度も起きるものではない。あれは単なるまぐれにしかすぎないことは、スノウ自身よくわかつている。だが、スノウが悩んでいるのは現在「ここ」にいることではなかった。

確かにこの事態は困ったことではあるのだ。自力で戻れないのだから。しかしそれよりも、たった今判明した事実の方が重要だった。それは、記憶の欠如。

どうやら、再び記憶喪失になっているようなのだ。

初めはスイの勘違いだと思っていた。

散々「魔力がない」と言われてきたスノウにしてみれば、己が魔法を行使したなど信じられない話である。誰の口から聞こうとも信じなかっただろう。だから当然、何かの冗談か間違いだと思えなかった。そして、スイが冗談を言う姿など想像もつかないので、「スイの勘違い」と結論づけた。

胸の中に一抹の不安を残しつつもそう納得していたのだ。

ところが、スイの部屋から放り出されて暫くのち、アイシャと鉢合わせた。

スノウの中でスイの発言は「勘違い」に分類されていたので、これ幸いと近寄っていったのだが。

アイシャは過剰なまでの反応を見せた。初対面の時より格段に強い敵意。殺意とまでいかなかったのは、アイシャの理性が働いた結果だ。その一瞬後、アイシャは敵意を綺麗に目の奥に隠し「驚かせるなよ」と笑ってみせた。

鈍い相手ならきつと見間違いだと思っただろう。それほどに、僅かな間の出来事だった。

けれどスノウには分かった。

あの一瞬の警戒は「何者かの気配」に向けられたものではなく「ス

ノウ」に向けられたものだということ。アイシャは、ただのネコでしかないスノウに警戒したのだ。

今までのアイシャからは考えられない、その態度が意味するところは明白。

『魔法』

思い当る節といったらそれしかなかった。使った記憶はないが、少なくとも周囲はスノウが使ったと認識しているのだ。スイヤアイシヤ、そして恐らくエルも。

それは淡い衝撃をスノウにもたらした。

自分の知らない自分。

記憶を失い、人々の前に姿を現したとき味わったものと同じ感覚だった。周囲の目が己を通して違う何かを見詰めている。期待も好意も、自分に向いているすべての感情が辛く悲しかった。それに応えるだけの力が手の中にないから尚更。

そして今度は、周囲の目が敵意と疑いをもって自分を見詰めている。知らない主張したところで、その目は変わらない。元々が敵同士なのだから。

何も問題ない、と「勇者」なら言うだろう。同じ屋根の下にいる現状こそが異常で、憎み反発する姿こそが本当のだと、そう理解はしている。

けれどこの状況にすっかり馴れてしまったスノウにしてみれば、寂しく感じる気持ちも確かにあるのだ。

「何してる」

動揺している胸の内を分析していると、声が降ってきた。

反射的に顔を上げる。

視界に飛び込んできたのは紅い色彩。真紅の長い髪を、相変わらず黒づくめな肩に流した青年風の魔物、エル。首を少し傾げ、廊下の壁に寄り掛かるような格好でスノウを見下ろしていた。

「え、エル……」

上擦った声が出た。心臓が大きく脈打つ。

別に疾やましいところなど、スノウにはない。ない筈だ。けれど脳裏にスイの言葉が蘇よみがえって、アイシャの態度が蘇よみがえって……スノウは逃げ出したい衝動に駆かられた。

スノウが揮ふるったと思われている魔法を、スノウの想像通りならエルもまともに見ているはずである。多分、一番近いところで。

無意識に体がぐぐつと縮まる。身を低くして、いつでも走りだせる体勢に入る。

そんな警戒心、もとい怯おそえ丸出しなスノウに、何を思ったかエルは溜息をついて言った。

「……ああもう、我慢できない。可愛すぎる」

スノウ、完全にフリーズ。

ぽかん、とした表情で固まった。言ってる意味がわからない。

その隙にエルは体を屈めて、混乱のあまり停止しているスノウの体を抱き上げた。

スノウの体を抱き締めて、顔を寄せる。

「可愛い」

スノウの耳元で低めの美声が囁く。嬉しくて愛しくてたまらない、といった様子で。

これが少女相手なら、こんな状況にでもなるうものなら軽く気絶してしまうだろう。それだけの……ある意味破壊力があつた。

「……ちょ！ 何言ってるのっ！」

一気にスノウの脳が覚醒した。あまりの、トリハダに。

じたばた暴れると、エルが酷く名残惜しそくに顔を離れた。

「何って……可愛いものを可愛いと言って何が悪いんだ？ ここんところずつと我慢してたんだ。もうアイツも帰ったことだし、存分に遊べるぞ、なあ？」

うきうきと話す口調はいつも通りのものだった。その表情に裏はない。少なくとも、そうは見えない。

思い返せば、こここのところエルの姿を見ていなかった気がする。

ヴァスーラ来訪に備えて忙しく動いていたのだらう、と簡単にスノ

ウは結論付けていたのだが、もしかすると「ネコ禁止」中だったのかもしれない。

つまりは軽く禁断症状なのではなかるうかとスノウは分析する。ぎゅぎゅ抱かれながら。

「別に遊んでもらう必要はないんだけど」

ネコの姿ではあるが、人間だ。更に言うなら天敵である「勇者」で、実年齢18歳。どう考えても遊んで貰うような中身ではない。

「そうか、じゃあずっとこうしとこう」

言って、エルはスノウの心境などお構いなしに、腕に抱いて毛並みを撫でている。スノウにとっては迷惑極まりないが、エルはご機嫌である。

「……ネコなんて飼う筈ないって？」

その手が鬱陶しくなり、スノウが皮肉を言った。

エルはに、と唇を歪める。

「ネコは飼ってない。勇者は飼ってるが」

嘘はついてないぞ、とエル。嘘ではないが、激しく語弊がある。

「……その言い方ちょっと」

さすがに突っ込んだ。飼われている身には、色々と突き刺さるものがある。

「何故ネコがダメなんだろうな？こんなに可愛いのに」

なにやらぶつぶつとぼやいているエルに、スノウは複雑な気分である。その対象が自分の外見であるだけになおさら。

そこまで考えてスノウははたと気付いた。

エルは相変わらずの調子である。スノウがしでかしたであろう「魔法」に関して警戒する素振りも、追及してくる様子もない。

「エル」

「何だ」

「……えっと」

話しかけたものの、何と問えばいいのかわからず口籠る。

「ええと……ごめんね」

「何が？」

わからない、といった風情でエルが首を傾げた。

「見つかつちゃって……」

スノウが真実尋ねたいのはその後のことだったが、いきなり切り出すのは躊躇われた。自分が揮ったという魔法のことは気になる。それについてエルがどう思っているのかも。だが、事と次第によってはエルがぐるりと掌を返してくるかもしれないと思うと、聞くに聞けなかった。ネコの姿で魔物と戦端は開きたくない。勿論人の姿でもごめんだが。

とりあえず周りから攻めるかと、魔物の顔を伺いながら尋ねるスノウ、もとい勇者である。

それに、エルは軽く目を瞠って、

「ああ、別に大したことじゃない」

と、あっさりと首を振る。あの状況では「たいしたこと」だとは思うのだが、エルの態度からはそういった気配が一切感じられなかった。

「アイツは……兄は難癖さえつけられたら何だっていいんだから、気にするな」

面倒なヤツだよな、と他人事のように言う。

「で、でも、その、なんか迷惑かけたみたいだし……」

口ごもりつつと水を向けると、エルがちらりとスノウに視線を落としました。

「迷惑？」

真紅の双眸に閃いた一瞬の光。鋭い眼差しは、エルがスノウの「魔法」について無関心ではなかったことを表していた。エルもまた気に留めていたらしい。もしかしたら、スイやアイシャ以上に。けれどそれは瞬きひとつの間に綺麗に拭い去られている。

スノウに問いかけた時には既に、常の悪戯っぽい輝きだけが宿っていた。

「う、あの、俺……なんかしたらしいし……って、スイが」

単純そうに見えて、エルは感情のコントロールが上手いようだ。内心の動揺をモロに態度に出して弁解しながら、スノウは思う。

「……ああ、あれはむかついたな」

エルは少し首を傾げて、思い出すような口ぶりで言う。

「む、むかつ……？」

あまりにも直球な不快表現に、スノウは更に動揺する。快く思わないことは明白だったが、よもやエルの口から直球の言葉がでるとは思っていなかったのだ。

「アイツときたら勝手に遮断しやがって」

「……え？」

エルの言わんとするところがつかめず、スノウは間の抜けた声を上げる。

「アイツ」が指すのはどう考えてもスノウではない。スノウの「魔法」がむかついたというわけではないのだろうか。

「ええと……遮断？」

何のことだかわからないスノウは、恐る恐る問いかける。

「アイツが　兄が俺の魔法干渉を遮断しやがったんだ。自分の方が上だと言いたいんだらう、嫌な奴」

口調自体は決して激しくはないが、著しく口が悪い。「しやがる」などと、アイシャならいざ知らず、エルの口から飛び出すのは非常に珍しいことだ。エルの言う「むかついた」点はどうやらそこらしい。

スノウは軽く記憶を辿る。スノウが目にしてきた限りそれらしい事態はなかったように思えた。恐らくスノウが水盤に落ちてからの出来事だらう。

魔法に明るくないスノウにしてみれば魔法干渉だの遮断だの、イマイチわからない。

「ソレにかけた魔法のことだ」

ぽかんとした様子のスノウに気付いたのだらう、エルが視線を落としてスノウのリボンを示した。

「あーなるほど」

スノウは曖昧に相槌を打つ。発信機兼所有物の証。原理はわからないが、エルの魔力が織り込んであると以前聞いた記憶がある。分からないけれど分かったような気になって、スノウは納得する。これでヴァスーラと揉めたのだろう。大の男がりボンを巡って火花を散らす図は、想像しないようにした。……字面だけ見ると、色々残念な気分になるので。

「まあ、だからだろうな。仕方ない」

ぼんと放り投げるようにエルが言った。

「え？ だからって？」

「俺の魔法が遮断されたから、綻びが生まれた。そこから封じられてた力が漏れた…そんな所だろ」

スノウが最も聞きたがっていた事を、明日の天気でも話すような気軽さで締めくくる。なんでもないことだと言わんばかりに。

スノウはエルの言葉を反芻して考える。

エルの魔法が遮断されて、封じられていた力が漏れた。

封じられていた力？

「魔力がないの？」

思わず疑問が口をついて出た。

魔力と魔法はイコールではない。魔力はあくまでも魔法を使うための下地。そもその魔力がゼロならば、魔法はゼロ以上にはならない。

つまり、魔力が存在しないならば魔法は使えない。

そのはずだ。

記憶を失ってからこちら、魔力がないと散々言われていた。スノウ自身、魔力を感じたことはない。

けれど、記憶を失う以前のスノウは魔法を使っていたという。たいそうなものではなかったとはいえ、メリル並みには扱っていたのだと誰かが言っていた。それが真実ならば、スノウには魔力が存在していたということになる。

その力が、今頃になって発現したというのだろうか。

「知らん」

あっさりとエルは突き放す。

「そんなことは自分で考える」

ぐ、とスノウは言葉に詰まる。確かにその通りだ。

ネコにしたのはエルだが、それによつて魔法が使えない訳ではない。ネコにされるより以前から使えないのだから。喪われた「勇者」の記憶と一緒に、彼方に消えてしまったのかもしれない。

どうやらエルもまた「スノウ」が魔法を使ったと認識しているようだ。と言うことは、疑っているのは当の本人であるスノウの他にいないということになる。誰の目からみてもそうならばそうなのかもしれない、とスノウの心はぐらぐら揺れていた。けれど例えそうだととしても覚えていない以上、スノウにはどうすることも出来ないわけ

「そういえばあの人、ヴァスーラだっけ？ もう帰ったの？」

思考がどうどう巡りになってきたことに気付いて、スノウは無理やり思考を切り替えた。次いで、思いついたことを口にする。

スノウのそんな内心の葛藤など知らぬげに、エルは軽く頷いて言う。

「ああ、昨日追い返した」

「追い返し……って、え？ 昨日？」

「スイから聞かなかったか？ お前三日は寝てたぞ」

投げられた爆弾に、スノウは顎を落とす。

「み、三日？」

「珍しくスイが付きつきりだったな」

不思議そうにエルは首を傾げるが、スノウには大体の予測はついていた。スイは危惧したのだ。スノウがエルに仇を為す可能性を。

だから目の前に刃を突き付けた。

目覚めて、何かしら敵対行動に出れば「処分」するために。

「まあ、これで当分大人しくしてるだろ」

ああ疲れた、と首を回しながらエルが嘆息する。

ふと気付くと、エルの部屋は目の前である。いつの間にか階層を移動したらしい。エルは慣れた仕草でスノウを抱え直して扉を開けた。「当然……」

「数年か数ヶ月か、もしかしたら数日かもしれないけどな」
迷惑がる口ぶりでエルが続ける。

「あの様子だとまたそう遠くないうちに来るだろうなあ。うう、面倒臭え……」

恐らく、スイヤアイシャの前では見せないであろう、疲弊した表情であつた。本気で嫌らしい。

スノウはふと首を傾げる。

エルがヴァスーラを苦手にしていることは分かる。迷惑だと思つ気持ちも理解できる。だが、ヴァスーラは歓迎されていないことは分かりきつているだろうに、何故そんなにもエルの元を訪れるのだろうか。この城を乗っ取るためというにはあまりにも……直接的すぎやしないだろうか。

「どうしてヴァスーラはまた来るの？」

「納得してないだろうからな」

「納得？」

「俺が近頃急に動きだしたことについてさ」

その言葉にヴァスーラのセリフが脳裏に蘇つた。エルと対峙した時、ヴァスーラは言っていた。

『いきなりやる気をだしたと聞いた』と。

「以前は今ほど頻繁じゃなかったんだ。魔物も滅多に人間の前に出ることはなかったし、この城だつて長いことただの岩山だと思わせてきた。まわりからみればさぞ『やる気』なさそうに見えただろうな」

存在をひた隠しにするなど、ヴァスーラのような力ある魔物からすれば軟弱にしかみえないだろう。ヴァスーラのエルを軽んじる態度の意味が垣間見えた気がした。

「それがまあ事情が変わつてね、引きこもっていられなくなつてき

た。だからこうして活動を始めたら、アイツが早速さぐりをいれてきたって訳だ」

「家督争い…みたいなこと言ってたよね」
思わず口にする、エルが軽く目を見張る。

「そんなところから聞いてたのか？ ああ、兄にとつての最大の関心はそこらしいな。正直俺にはどうでもいいことなんだが。この程度でいちいち騒ぐなんて困ったもんだよ。余程俺が目障りらしい」
肩を落としてそう息をつくが、言葉の割に大して困っている風には見えない。

真紅の双眸は変わらず強い輝きを宿しているし、唇には不遜ともとれる笑みが浮かんでいる。どこか状況を楽しんでいる気配すら窺えた。

ふと、スノウの脳裏にヴァスーラと相対した時のエルが浮かんだ。自信に満ちた表情はなりを潜め、口元に浮かぶ笑みは覇気のない弱々しいものだった。実力者の前だから萎縮するということもあるかもしれないが、あまりにも彼らしくなかったように思える。

「何だ？」

黙って見上げていると、視線に気付いたエルが首を傾げた。

「ううん……エルだよなあと思って」

「は？」

何言ってるんだ、と言わんばかりに眉を顰めるその表情は、紛れもなく普段の彼である。

ヴァスーラを前にしていた時のような、大人しく従順な風情など欠片もない。

「なんかあの時は別人みたいだったから」
違和感に突き動かされるまま、スノウは何も考えずにぼんと言葉を返した。

けれど、その言葉はエルには意外だったらしい。真紅の瞳を大きく見張り、すっと表情が強張った。

その変化にスノウの方が驚く。別にそんな大層なことを言っただつても

りはなかった。ただ、見たままを言っただけだったのだから。

「エル？」

動揺して声をかけると、エルは軽く息を詰めて、ゆるゆると首をふった。

「……ああ、なんでもない。そうか、そう見えても無理ないな。実際アレは演技だからなあ」

ため息をついて言う表情は、既に常と変わらないものだった。

「演技？」

「下手に刺激すると厄介なんだ。刺激しないには極力大人しくして
るしかないだろ？」

言って、エルは軽く肩を竦めた。

「アイツと戦うのはさすがに嫌だからな」

ぴりぴりとしていたアイシヤやスイの姿がよぎる。彼らが警戒する程の相手。そしてエル自身が戦いたくないというのだからヴァスーラの實力の程は計り知れない。

「こ」

ふと口から飛び出しかけた言葉を、スノウは慌てて飲み込んだ。

「ん？　なんか言ったか？」

エルが顔を寄せて来るが、スノウはふるふると頭を振る。

口にするわけにはいかなかった。力が全ての、戦闘を好む魔物。その長に対して言うていい言葉ではない。下手に機嫌を損ねてしまつたら、スノウの命は風前の灯である。

「変なヤツだな」

エルは笑って、スノウを窓辺に放り出す。

聞けるはずがなかった。

「怖いのか」などは。

なぜこんな言葉が浮かんだのやら、とスノウは首を振った。

15・目覚めたら(後書き)

もう何書いてるかわからなくなってきました……私はどこにいこう
としてるんだろう……
や、ラストは決まってるんで大丈夫です！

16・ネコと勇者（前書き）

ちよつとした息抜き気分で書きました。そんな感じで読んでください（笑）

ふとした拍子に、まるで今までのことが夢だったような錯覚に陥ることがある。

目の前に広がる光景が、慣れ親しんだありふれたものだった時。

ここに至るまでの全てが夢の中の出来事で、自分自身はあの時のままなのではないかと。岐路となった時点から実際は一步たりとも進んでいないのではないか。何もかも良くも悪くもあのときのまま、何も変わっていないのではないか。

そんな錯覚に束の間陥って、視線を落として気付く。

視界に飛び込む艶やかな白い毛並み。人間のものではないそれが、確実に自分自身である現実。

「……何だか、へこむなあ」

ぼつりと呟いて、その響きに「今」が夢などではないことを思い知る。

諦めにも似た感情を胸に抱いて、スノウは往來を見遣った。

綺麗な石を敷き詰めた石畳。中央には石造りの水溜めがあり、水が張られたその中では少女の彫像が猫と戯れていた。勿論、猫も彫像である。

街のオブジェとしても十分美しいが守護としての意味も込められているだろう、とスノウはぼんやりと考える。魔物は猫を嫌う。つくりものとはいえ、苦手なものに躊躇するのは魔物も人も同じだ。例えほんの一瞬だとしても。

水溜めの周囲では小さい子供がはしゃいで走り回っている。それを諫める母親と思しき娘。行き交う人々は微笑んでその光景を見守る。物売りの声に、誰かを探す声。慌ただしく歩く若い男、店を覗く老女、声高に話す若い女に、水溜めの縁に腰掛ける老人。

そこにあるのは、日常を懸命に生きる人々の営みであった。穏やかで平和な、ごくありふれた風景。

スノウは何度目かになるため息をつく。

こうして眺めていると、自分が何をしているのかわからなくなりそうだった。あれほど焦がれた人間の街。そこに、実際に足をつけているのに。

自分は一体何をしているんだろう。

「とにかく宿か酒場を探さなきゃ……」

泣きたい、とごちて、スノウは足を踏み出した。

ヴァスーラ来訪の一件以来、スノウは居心地の悪さを感じていた。特に待遇が変わった訳ではない。相変わらず、虜囚なのか愛玩動物なのかわからない奇妙な立場は続いているし、魔物たちの態度も常と変わらない。

けれど、ふとした拍子に見えない壁のようなものを感じて、一線を引かれていることを思い知らされる。

元々そんなに親しい間柄でもない。一線どころか、考え方も何もかも遠いところにある相手だということは分かっている。分かりあうことなど無理だと、散々周囲から聞かされてきたのだ。だから「仲良く」なることなどないとスノウ自身よくわかっているつもりなのだ。

穏やかな表情から垣間見える硬質な空気。はつきりと敵意を示された方がどれだけ楽だろう、とスノウは思うのだ。

そんな状況にすっかり疲弊したスノウは、彼らの前ではなるべく目を合わせない手段をとっていた。つまるところ、狸寝入りである。

この日も、食事を用意してくれたアイシャに申し訳ないと思いつつ、熟睡のフリを続けた。アイシャから疑いの眼差しを向けられるのも嫌だったし、下手な言動で穿った見方をされるのも嫌だった。それ

に、アイシャを前にしたらその表情の裏を探してしまうだろう。そんな自分が分かるから、尚更顔をあわせたくなかったのだ。何度かスノウを呼んでいたアイシャだったが、反応がないことに諦めたらしい。しょうがないなといったげなため息が聞こえて、アイシャが部屋を出て行く気配がする。

扉が完全に締まったのを確認して、スノウはのそりと身を起こした。スノウが寝そべる窓辺は、今日も麗らかな午後の日差しが心地よい。窓越しに外の風景を一瞥して、床へと視線を移動させる。室内のいつもの場所に、見慣れた椀が置いてある。中身は煮干のようだ。食事でもするか、と猫らしくのびをしたところで、視線を感じた。不思議に思っただけ振り向いて、心臓が口から飛び出さんばかりに驚く。いつの間にも現れたのか、壁に背を預けた姿勢のエルがいた。

「ふうん、狸寝入りか」

口元に意地の悪い笑みを浮かべ、硬直したスノウを楽しげに眺めている。

スノウは意味もなく口を開閉させた。あまりの驚きにどう反応していいかわからない。

まさしく突然、としか言い様のない登場である。つい先ほどまではアイシャの気配しかしなかったのだ。鈍いと言われれば返す言葉もないが、それにしてもアイシャの無反応は不自然だ。エルが室内にいれば、無言で立ち去るなど部下としてあり得ない行動である。

「ち……違つよ、今、締まる音で目がさめて。あれ？ ご飯置いてくれたのエル？」

スノウは首を振りながら必死に頭と口を回転させる。食事を用意したのはアイシャだと知っていたが、敢えて知らぬフリをする。

「良い時に目が覚めたみたいだね、ああお腹すいた」

「そうか？ 俺の目にはアイシャが出て行くのを待ってたように見えただけだな？」

「そんなことない。気のせい、エルの勘違い」

エルに凶星を指されて、スノウはぶるぶると首を振る。動揺のあま

り微妙にカタコトになってしまっていたが、気を回す余裕はない。必死で否定を繰り返す。

その混乱振りをエルは面白そうに眺めて、にやりと笑う。

「で、何故あいつらを避けてるんだ？」

「さ、」

「避けてないとは言わせねえぞ。ここ最近目を合わせないようにしてたな？ しかもここにアイシャとスイが来ている時は、決まって散歩に出てるだろ」

スノウの反論を封じて突きつけられた言葉に、思わず息を詰める。事実、彼らがエルの部屋に集まる時はなるべく席を外すようにしていた。勿論気遣いなどではなく、逃亡だ。そうでなくても居心地が良くないのに、こんな状況下では更に身の置き所がない。スノウとしてはさりげなさを装っていたつもりだったのだが、この様子ではバレバレだったようである。

「ええと……そ、そうだった？」

この期に及んで、白を切ってみる。

「ああ。理由を言え。まさか今更勇者としての矜持がどうかという訳じゃあるまい？」

エルが笑みを深くする。真紅の双眸が穏やかに狭められ、その笑顔だけみれば爽やかな好青年だ。しかし、向けられたスノウにとって は心臓に悪いことこの上ない。

「そうじゃないけど……ただ、その、ちょっとばつが悪くて。ほら、色々迷惑かけたし」

まさか魔物に「居心地が悪い」と主張するわけにもいかない。主張したところでどうしようもないだろう。そう思い、スノウは適当にはぐらかした。ばつが悪いのも事実だし、全くの嘘ではない。本心の全てでないだけで。

「……そうか」

エルは納得した素振りを見せたが、その双眸は探るような輝きを秘めている。あの程度の説明では完全にエルを納得させることは難し

いようだ。

「うん……ええと、あ、そうだ。そろそろ散歩行くから」

エル視線から逃れたい一心で、スノウは窓辺から床に飛び降りた。散歩はスノウの日課のひとつになっていた。始めは気が向いた時にしていたのだが、スイヤアイシャが部屋に来るたびに「散歩」という逃避に出ている内に、完全に習慣化してしまっていた。今では散歩に出ないと何やら大切なことを忘れている気持ちになる。

「散歩？ 空腹なんじゃないのか」

すかさずエルが訝しげに声を掛ける。視線で示す先には煮干の入った椀。

「なんか、そんなに空いてない気がして。帰ってきてから食べるよ」
苦しい弁解だと自覚しながら、スノウは急ぎ足で戸口に向かった。

エルに捕獲されてしまう前に逃亡しなければならぬ。今追及されて、白を切りとおせる自信がなかった。

「待て」

そこにエルの待ったがかかった。

ぐ、とスノウは息を詰める。できることなら聞こえなかったふりで脱兎のごとく走り出したい。けれど、そんなことができる性格ではないことはよくわかっている。そつとため息をついて、諦めのスイツチを入れた。

「何？」

「俺も行く」

「……へ？」

間抜けな声が出た。予想していたものとはかけ離れたエルの発言に、処理が追いつかない。「行くって……散歩に出るだけなんだけど」
勿論城内、しかもこの階層に限られている。このあたりをぐるりと回って終わりだ。ネコの身にはそこそこの散歩になるが、人間、ましてや魔物にとっては運動にも入らないような規模である。

「ああ、たまにはいいだろう。暫くそこで待ってる、準備するから」
エルはそう言い捨てて、足早に部屋を出て行った。

そんなエルを半ば呆然と見送り、スノウは首を傾げる。
意味がわからない。

散歩、それも城内をうろつくだけの行動にどんな準備がいるというのか。長らしく豪華で華美な外套マントでも羽織って、視察よろしく歩き回るつもりだろうか。

想像してあり得ないと首を振る。あのエルが、そんなごてごてした装飾を好むとは思えなかった。

釈然としないまま、それでも大人しくスノウは扉の傍に座り込んでいた。

やがて、いくらかも経たない内に、扉の向こうから足音が近づいて来る。少し急ぎ足だが、エルにしては靴音が

「よし、行くぞ！」

勢い良く言って扉を開けたのは、見覚えのある、けれども見たことのない姿だった。

「……と言っわけで何とか辿りついたんです」

腰に履いていた剣を不慣れな手つきで外しながら、青年はため息で締めくくる。

賑わう宿屋の食堂。その賑わいも、例年ほどではない。ここ最近魔物の動きが活発になり、この街の周辺も安全とは言えなくなってきたためだ。以前は行商人を始め遊山客も訪れていたのだが、最近の客は専ら地元の住人と魔物討伐を生業とする「賞金稼ぎ」ばかりであつた。

「あらまあ、大変だったねえ」

女将はそう相槌を打って、料理の皿を次々と並べていく。その量に軽く目を瞠って、テーブルについた青年は慌てて言った。

「いえ、俺が未熟なだけで……あの、こんなに注文してないんですが」

「いいのいいの。うちは量を取り得ですからね。勇者にサービスしたからって誰も文句いいやしないだろ」

そんな彼に、女将は人の良い笑みを浮かべて応じた。

日常を脅かす「魔物」を命を賭して退治しているのだ。料理程度では何にもならないだろうが、それがせめてもの人情というものだ。そう女将は思っている。

魔物を討伐しているという点では賞金稼ぎも勇者も大差なかったが、女将はどうにも賞金稼ぎが好きになれなかった。両者の決定的な違いはその目的である。賞金稼ぎは魔物を倒す見返りに莫大な報酬を国や依頼人から受け取る。その分仕事はきつちりこなすがそれ以上は存在しない。賞金首にもならないような魔物が現れた所で進んで撃退はしてくれないのだ。誰かが依頼をしない限り。

方や「勇者」はそうではない。彼らの報酬とは形ない名誉である。勿論実質はそれだけではないが、少なくとも誰に依頼されずとも魔物を退治するだろう。一介の宿屋の女将にとって重要なのは、その一点だけであった。

目の前に次々と並べられる皿に困惑の眼差しを向けて、青年は言い継いだ。

「俺はその、まだ……」

「わかっているって、新しい勇者さまが選ばれたばかりだっていうし、あんたはまだ見習いみたいなものだろ。次のトーナメントあたりに出るのかい？」

はい、とはにかんで頷く青年は、女将の目から見ればまだ十分に「子供」だった。日に焼けてやや赤みがかかった黒髪。不揃いな前髪の奥では、同じく黒い双眸が好奇心に輝いている。顔立ちは若く、ともすれば幼さを覗かせる。年の頃は十七、八かそこらだろう。

簡素な旅装に身を包み、革製の防寒着を羽織っただけの出たちである。

「へえ、兄さん勇者志望かい」

そこへ、隣のテーブルについていた男がひよいと顔を覗かせた。テーブルの上は既に空になった皿が並んでいる。男の手にした木製のマグからは仄かな酒精の香りが立ち上っており、青年はその気配に少し気後れしたようだった。一瞬引きかけた体を誤魔化すように、表情を緩めて頷く。

「はい。是非6代目の勇者にと」

「ほほう、若えのに立派なもんだね」

男は赤みの差した顔でうんうんと頷く。この店の馴染みの客だ。見かけの割りにそう酔っていないことは女将にはわかっていたが、青年の方はそうではないだろう。気後れしている様子の青年を助けてやるつもりで、女将は割って入る。

「ばかだね、若くなきゃ勇者なんてなれやしなよ。あんたじゃせいぜい荷運びだ」

「言ってくれるな女将。それでも昔は斧使いのゲイルつつたら有名だったんだぜ」

「何が斧使いさ。樵きしだろ」

「まあそうとも言うなあ」

ほれみる、と女将は鼻息荒く言つて、男の目の前にあつた空の皿を片付ける。テーブルの上にはつまみの小皿二つとマグが残された。

「あれ、でもさ……あんた6代目っていったかい」

「ええ、どうかしましたか？」

「いやね、確かこの間お触れが来てたのは6代目勇者だったはずだよ」

ううん、と首を捻りながら女将は記憶を辿る。

「え？」

「5代目が……ええと何て言つたかな、なんかこう……花みたいな名前」

「シユーなんとかじゃなかったかい」

こちらもうろ覚えらしい男が、同じように首を捻りながら言う。

「ああ、そうだ。思い出した、スノウ・シュネーだよ！わざわざ選任式を見にいった娘たちが良い男だって騒いでたんだった」

「良い男ねえ……優男だって話じゃねえか」

男は無精ひげの伸びた己の顎に手をやり、つまらなさそうな口ぶりだ。

「でも勇者は勇者さ。何でもすぐく強いつて話だったけど」

「まあでも魔物には敵わなかったってヤツかね」

ため息とともに呟かれた言葉に、青年は困惑気味に尋ねた。

「……亡くなられたのですか？」

「だろっねえ。次の勇者の触れが回ってきたからね。…ミリア、ミリア！ちよいと、あれ持ってきておくれよ。あのほら……何日か前にきてただろ、勇者の！」

頬に手を添えて深く息をついたあと、女将は厨房の奥に向かって声を上げた。奥から小さな応えいらいがあつて、程なくして娘が小走りに出てきた。手には丸められた薄い紙。

「これだよ」

言つて、女将は娘から受け取った紙をそのまま青年に手渡した。

青年の手の中で広げられた紙には、大きく「6代目勇者」の文字が踊っている。その下には王室お抱えの絵師に書かせたものだろう、凛々しい表情の若者が描かれていた。

「どういう……」

愕然とした様子で呟いた青年を、女将は気の毒な思いで見遣る。

「ちよつと出遅れちまつたみたいだねえ。まあ、そう慌てなくてもまた次つてこともあるからね」

気を落とすんじゃないよ、と女将は青年の肩を叩いて、再び皿を持ち直した。気遣わしげな視線を向ける娘を促して、厨房へと戻って行く。

「なんでえ、そいつは知り合いか？」

そんな女将を見送つて、再び視線を向けた男が青年に問いかけた。青年は未だ紙面から目を離さずにいる。余程衝撃だったのだろう。

「……あ、いいえ。知らない人です。ただ……ちょっと驚いて」
「そうだなあ。今度の勇者はすごい猛者だって話だったからな。かなりの功績を挙げたみてえだったから……もうちつと長生きすんじゃないかと思ってたんだけどなあ」
後半小さく呟いて、男はマグの中身を一気に飲み干した。
「なあ、勇者になろうつつうあんたに言うもの何だが、命はひとつきりだけ。その志は立派だが、長生きしてくれよ」
おれの知り合いも勇者ぶって死んじまったよ、と乾いた笑いを漏らす。ふらりと立ち上がり、店の奥に会釈をする。青年の肩を軽く叩いて、男はやや心もとない足取りで店を出て行った。

その姿をしばし見送って、青年は手元の紙に再び目を落とした。若々しい似姿。知らない顔だった。

「クロス・エセル…知ってるか」
トーンを落とした呟きに、にゃあ、という泣き声が答える。

「……知らないよ。俺の後になるんだから知るわけないよ」
控えめな小声が告げる。青年が視線を落とすと、テーブルの下に小さく身を縮めた白い物体が目に入った。真っ白な毛並みの、若いネコ。

その青い双眸と目が合って、青年は口元を僅かに歪める。
「死んだことにされてるぞ、勇者」

不敵、としか言い様のない笑み。その唇の端から僅かに除くのはやけに鋭い犬歯だ。

「……だろうね」
嘆息して白いネコ　スノウは相槌を返した。

さすがにあの状況で、この結果は想像もつかないだろう。死んだと思わない方が不思議だ。それよりも、メリルやフレイが無事に帰還できたらしいことがスノウを安堵させた。

勇者が「死んだ」と王都にもたらしたのは、メリル達であることを

スノウは疑っていなかった。いくら自分がメリルの言う「勇者さま」と同一人物であるとはいえ、ここまで変わってしまった自分を救助にくるとは思っていなかったこともある。けれどそれ以上に責任感の強いメリルだから、こうなれば必ず王都に戻るだろうとも思っていた。

「それよりエル、一体何のつもりだよ。散々探したんだけど」詰る口調のスノウに、軽く肩を竦めたのは誰あるう、人に扮したエルである。といっても、その容姿は本来のエルと大差ない。外見上は、衣装と色彩が変化しているだけのように思える。緋色の髪と双眸を漆黒に塗り替えて、質素な旅装に身を包んだだけの、簡単な扮装だ。

けれどただそれだけで、どうみても普通の人間にしか見えなかった。しかも人間にしても決して強そうな部類ではなく。

どちらかと言えば俺側だよ、とスノウは内心呟く。先だって男に言われていたような、俗に言う優男。

「それはご苦労なことだな。何ならそのまま逃げてもよかったのに」そんなスノウの心中を知ってか知らずか、エルは端整な顔に「無害」そんな笑みを浮かべ、テーブルの下から手招きをした。似姿をスノウに見せようというのだろう。

「正直迷ったけどね……エルが悪さしてないか気になって」

一応勇者だし、とエルに近寄りながらスノウが言う。迷うどころか、当初は逃亡する気満々だった。

エルの魔法で街の近くに降り立った時には、戸惑いながらも嬉しかったのだ。久々の人間の街である。嬉しくないはずはない。同時に何故エルがここに来たのか謎だった。しかし当のエルは、スノウに口を挟む隙を与えず「ちょっと散歩してくる」と言い置いてさっさと姿をくらましてしまったのである。突然のことで止める間もなく、気付けばスノウはひとりぽつんと町外れに取り残されていた。

さすがのスノウも真剣に逃亡を考えた。こんな絶好の機会、そうはない。

けれどよく考えてみればスノウの首には発信機よろしくリボンが巻かれていた。ただの猫の身では王都にすぐさま戻るなど無理な話、となるとエルに捕獲されるのは時間の問題だろう。下手に逃げた攻撃でもされてはたまらない……とも思う。

勇者らしくないヘタレな思考の結果、自分を捕獲した魔物を探して街を走りまわるといふ、何とも奇妙な事態に陥ったのである。

「……で、何をしてるの？」

非難を込めて問いかけると、エルは悪びれる素振りもなく首を傾げて言った。

「何、と言われても困るんだがな。何だろうな？ 情報収集？」

「……俺にきかれても」

「特に目的があったわけじゃないからな。うん、気分転換をかねた情報収集だな。戦う相手をよく知ることが大事だし」

ひとりうんうんと頷きながら言う。その自信に溢れた態度と口調に流されがちだが、どう聞いても弁解にしか聞こえない。ひよっとすると無計画に飛び出してきたのではないだろうか。

「アイシャとスイは知ってるの？」

ぴたりとエルが停止した。表情が硬化し、視線が明後日の方向に泳ぎだす。痛いところをついたらしい。

「……ずっと城に籠っていると肩が凝るからな。運動不足だし。あと変化の魔法の鍛錬も兼ねて……」

兼ねることは多いようだ。

「へえ……」

無意識に馬鹿にする口調になっていたのだろう。エルが剣呑な眼差しを寄越す。

「別に悪いことをしてるわけでもなし、文句はないだろう」

「まあ人間側としては文句ないけどね」

むしろこの宿屋にとっては大事なお客である。エルの有益な情報収集は、スノウに安堵と軽い衝撃をもたらしたただけであった。

「新しい勇者：クロス・エセル」

自分が死んだ後の世界を見ているのは、生きている身としてはなにやら不思議な感覚だ。自分が死んだ後はこうなるのか、とまるで幽霊にでもなった気分である。

似姿を眺めてぼんやり呟くと、エルが片手に水の入ったマグを持ちながら言う。

「何だか妙だな」

漆黒の双眸には、訝しげな光が瞬いている。

「妙？ 何が？」

「新しい勇者だ。お前が乗り込んできて何日経つ？ 仲間がすぐさま報告に戻ったと仮定しても、あまりにも早過ぎないか」

「でも……勇者は必要だから」

「だから、だろ。なくてはならない程重要な存在なら、慎重に吟味するはずだ。お前もそうして選ばれた。違うか？」

否とも是とも言えず、スノウは口を噤む。確かに、選出には何やら難しい基準が幾つか設けてあると以前メリルだかフレイだかが言っていた。技術や知力のみならず、人格者たることが必要だと。残念ながら、その全てをクリアしたという稀代の勇者は自分の中に見当たらない。

「ならばこうもあっさりその後継者が選ばれるのはおかしいと思わないか。少なくともお前が選ばれるまで、先の勇者の死亡から半年は要したはずだぞ」

「……詳しいね」

その当たりのことにとんと記憶がない身としては、そう返す以外に言葉が見つからない。正直なところエルの言葉は初耳なのだ。記憶があればまだ何とか返しようもあるのだが。

「調べたからな。案外お前より詳しいかもしれんぞ」

にやりと笑ってエルがそんな軽口を叩く。案外どころか凶星過ぎて、スノウは笑うに笑えない。

「そうかもね……こうやって調べたの？」

「いや？ 大概は偵察を出して調べたが……こうやって調べた方が

効率がいいんだよなあ」

スイヤアイシヤには散々言われるがな、とエルがぼやく。やはり、今回の「散歩」は二人は預かり知らないところであるようだ。

「で、先代勇者としてどう思う。随分と速い決断だろう？」

「……そ、うだね。確かにそう考えたらちよつと不思議だとは思っけど」

けれどそんなものではないだろうか。

先の勇者が死亡したなら、後継者が現れるのは当然のこと。それが早い登場だとしても、その勇者が勇者にたる資格があるのなら、なんら問題ないだろう。それより勇者が不在である事の方が、人にとって不安材料なのではないのだろうか。

例え名ばかりだとしても、実力が劣るとしても、盾となる勇者がいることで人々は心の安寧を得ているのではないだろうか。

「まあ色々と事情があるんじゃない？」

思うことは多々あったが、スノウは随分と適当な相槌を打つにとどめた。記憶のない現状で憶測を述べるのは躊躇われたし、第一手な発言でエルに怪しまれでもしたら困る。エルが一体どこまでの情報を入手しているかわからないのだ。スノウとしては、極力自分の記憶がないことは伏せておきたかった。

「……お前、仮にも勇者だろうが。その投げやりな態度はどうなんだ」

エルが呆れ顔で言う。その言葉は相変わらず正論だ。

「だって何も思いつかないし……にゃあ」

反論を封じ込んで、スノウはネコの声で鳴いた。その声にエルが顔を上げると、ちょうど奥から娘が水差しを持ってきたところだった。娘はエルの視線ににこりと笑いかけ「おかわりいかがですか」と声を掛ける。

「ありがとうございます」

エルの方も人畜無害な笑顔を浮かべて、物腰柔らかかに礼を述べた。そのまま一言三言、当たり障りのない世間話をしている。

そんな光景を見遣って、相変わらずのエルの変わり身の早さに舌を巻く。娘も、よもやこの勇者志望の好青年が魔物だとは思いはすまい。しかもその長たる魔物だとは。

この光景の方が余程不思議だと思いつつ、ぼんやりと二人を眺めていると、ふと娘の視線がこちらに向いた。

「まあ、ネコ」

娘の声が弾む。浮かんだ表情は魔物たちとは対照的な喜びに満ちたもので。

「可愛い。真つ白だわ……どこから入ってきたのかしら？」

首を傾げる娘に、エルがすばやく合図をした。

「すみません、実は俺のネコなんです。……すぐ外に出しますから、内緒に」

「あら、構いませんわ。ネコはいつでも歓迎なんですよ、ましてこんな綺麗な白猫なら。この街では当然ですよ。……てつきり他の街でもそうだと思っていたのだけど、違うのかしら？」

不思議そうな娘の反応に、当惑したのはエルの方だった。

「え、ああそれは助かります。いえ、他の街では連れていかなかったので……最近、知人に貰ったものですから」

たどたどしい嘘は、娘にはさほど不自然には思われなかったらしい。「いいご友人ですね。そうだわ、何か食べられるものを持ってきましようか」

娘はそう言っただけを返すと、エルの返事も待たずに店の奥に消えていく。慌てて上げたエルの声も、周囲の喧騒に紛れて届かない。

「あー……」

珍しく呆然とする様子のエル。

「……そうか、人間の街だもんなあ」

ぼつりと、途方に暮れたような呟きを漏らした。

「まあ、人間にとつては……ネコは神聖で親愛なる生き物だからカデイスにもネコは沢山いたよ、とスノウは囁く。

「いや、分かってただけだな。こつも反応が違うものかと……面

白いもんだな」

浮かしていた腰を下ろし、エルは苦笑した。なみなみと注がれたマ
グに手を伸ばすその表情を見上げて、スノウは違和感を覚える。

エルの表情や言動は「軽すぎる」気がする。

勿論、数多の魔物を束ねる長だ。威厳やカリスマといった、スノウ
の中にはさっぱり見あたらないものを備えている。だから当然、そ
の言動が軽いものであるはずはない。

軽いのは、人間に対する反応だ。

魔物と人間は相容れない存在。常に敵対し、憎み合い、殺しあつて
きた歴史がある。その長い年月の中で培われた感情は、おいそれと
覆るものではない。魔物を知らない子供ですら魔物を憎む。同じよ
うに、人間を知らない魔物ですら人間を嫌悪するだろう。それは、
記憶を喪つたスノウにでもわかる現実だ。

だが、エルにはそれが無い。

アイシャやスイが見せたような嫌悪や、憎悪。そういった負の感情
が殆ど見えないのだ。

始めは、強さゆえの余裕なのだろうと思っていた。恐れる必要がな
いから、蟻が逃げ惑うのを楽しむように遊んでいるのだろうと。

けれどこうして人間の前にいるエルをみていると、そうではないよ
うな気がしてならない。

エルの見せる表情や行動のひとつひとつが、純粹に「交流」を楽し
んでいるようにしか見えないのだ。勇者しゆうに対する態度といい、こう
して然したる用もなく人間の街にきていることといい、まるでエル
の中には「人間」に対する負の感情がないとも言つうような。

これが街を襲つた「魔物」の姿だろうか。

本当に、エルは人間を嫌悪しているのか。

「何だ？」

あまりに真剣に見詰めすぎたのか、エルが低く問いかけてきた。

「うっん、何でも……」

慌てて首を振ると、エルは顎に手をやり、思い出したような口ぶり

で言う。

「ああ、そろそろ腹が減ったか？　そういえば今朝食ってなかったもんな……」

試しにコレでも注文してみるか？　と、エルが取り出したのはテールブルに備え付けてあったメニューらしき紙である。エルの、今は漆黒に塗られていない指が示したのは『牛煮込みシチュー』の文字。今までの当惑が吹き飛んで、思わずスノウの目が釘付けになる。メインが煮干ばかりの日々が脳裏を過ぎり、生唾をこくりと飲んだ。そんなスノウの分かり易い反応を見て、エルは満足げに微笑んできた。

「割りといい肉使ってるな……クロツサス牛らしいぞ。だが残念、所持金が足りない」

あとこのくらい足りないな、と差額を計算するのまばかばかしい程の金額を提示されて、スノウは低く唸った。因みにクロツサス牛というのは、クロツサスという地方で育てられているいわばブランド牛である。高級というほどではないが、庶民には軽い贅沢になる程度のブランドであり、特別な祭日などには飛ぶように売れる。

「はじめから分かっているなら言わないでよ」

むくれて抗議すると、エルはメニューの紙を爪先で弾いて笑う。

「何かいいたそうな顔でこっち見てたからな。ま、これはからかっただけだが、たまには煮干以外のものを食わせてやってもいい」

こっから下のやつだからな、ときつちり示すところを見ると、所持金がないというのはあながち冗談でもないらしい。それでもどうやら美味しいものを奢ってくれる気だと踏んで、スノウは食い入るようにメニューを見詰める。

そこに、頃合良く娘が現れた。手にした盆の上に小さな碗を載せている。

「よく懐いていますね。羨ましい」

言って、娘はかがむと、碗をスノウの目の前に置いた。

「冷ましてきたから大丈夫だと思うけど……余り物でごめんなさい

ね」

てつきり煮干の類を想像していたスノウだったが、椀の中に視線を落として目を瞠った。

褐色のスープに、細切れの野菜、幾つかのごろりとした肉の塊が浮かんでいる。

「……あの、これ……」

同じように椀を見詰めていたらしいエルが、動揺した声を上げた。珍しいことだったが、それに気を回す余裕はスノウにはない。

「『牛煮込みシチュー』の残りですわ」

さらりと言われた言葉に、スノウが胸中で快哉を叫んだのは言うまでもない。人間の世界では、ネコは親しい隣人であり聖なる動物。勿論、与えられるものもただの残飯な筈もなく。

エルの呆気にとられた顔が目に見えるようで、けれどそれを確かめる間も惜しんでスノウは食事に勤しんだ。

食事に夢中なあまり、スノウは先ほどの疑念などすっかり忘れてしまっていた。だから気付かなかった。

魔物の、人間に対する態度の非常識さ。嫌悪や憎悪が全く見えないこと、不自然さ。

それは、そのままスノウにも言えることだった。

憎むべき魔物の傍にあって、難なく順応している。憎悪に駆られることも、嫌悪に身を震わせることもない。わが身が、獣に変えられていても尚。

人間として非常識で不自然な己の思考を、スノウはまだ気付いていなかった。

同じように、エルがそのことに疑念を抱いていることにも。

今は、まだ。

16・ネコと勇者（後書き）

> i19054 — 288 <

こっちの方がいっそ勇者らしい……と思うのは私だけではないと思うのです。段々とシリアスな展開になっていくので、ちょっとした休憩のつもりで読んで頂けると有難いです。

17・パンドラの箱（上）（前書き）

これまでの話

魔王を倒すために立ち上がった勇者、スノウ。

ところが彼は記憶を失い……どうしようもないヘタレになってしまふ。乗り込んだ魔物の城で、仲間の後ろで泣きだすわ、撤退しそびれるわで……結局、変わり者な魔物^{エル}の思いつきで、スノウは猫にされてしまった。

魔法を使えないスノウだったが、どうやら気を失っているうちに魔法を使っていたらしく……またしてもその記憶が抜け落ちている事実に愕然として。

とりあえずビーフシチューは美味しいと思うスノウだった（なんのこっちゃ……）

半年放置記念が出てしまい……申し訳ありませんでした。ようやく更新を再開することになりました。今後はここまで放置することはありませんので、もう暫くお付き合い頂けると嬉しいです。

17・パンドラの箱（上）

人間の街を訪れてから、2日が経過していた。

やはりスノウの思っていた通り、あの日は無断外出だったらしい。城に戻ってから側近二人に山のような小言を貰った。雷も落とされた。勿論、スノウが、である。

それに懲りた訳でもないだろうが、エルは大人しく仕事に励む日々を送っていた。スノウの方も相変わらずの日常を送っていたが、ひとつ問題があった。

この日も日課となった散歩から戻り、スノウはぶるりと身震いをする。

毛皮が濡れた時のネコそのものの行動だったが、濡れてはいない。散歩といっても城内の、最上階のフロアに限られている。外に出るわけでなし、雨に打たれることも泥まみれになることもあり得ない。スノウが身震いをしたのは、そんな身体の問題ではなくごく心理的なことであった。

スノウはこっそりと執務机の方を窺う。

机上に堆く積み重ねられた紙の束。その隣で筆記具を片手に、おそらくは何か仕事をしているらしいエルの姿がある。

エルの視線は当然ながら手元へと落ちている筈なのだが。

見てる。

スノウは努めて視線を外しながら、確信する。

問題なのは、エルの視線を以前よりよく感じるようになったことである。

ネコ好きを自認している彼が注視するのは、わからなくもない。

当初は「またか」と思う程度で特に気にも留めていなかった。だが頻繁に感じる上に、その視線の中に今までなかった気配を感じれば、そう呑気に構えてもいられない。

それは何かを探ろうとする視線。今までが愛玩物を愛でる視線だったのに対し、どちらかといえば観察に近い。心当たりを探して真っ先に浮かんだのは魔法の一件だったが、すぐに打ち消した。直後ならまだしも、これだけ時間が経ってからというのはおかしい。

「……何？」

耐えかねてスノウはエルを振り向く。エルはそれにぱちりと瞬きをして「どうした」と返してきた。

訊きたいのはこちらなんだけど、とスノウは思う。

「……なんかおかしい？」

自分に異変は感じなかったが、見るなとも言えず微妙な問いかけになる。

「いや？ 相変わらず可愛いけど？」

「か、」

相変わらずなエルのぶっ飛んだ発現に、思わず絶句する。そういう台詞は本物のネコ相手にしてほしい。或いは女性相手にでも。残念ながらそのどちらでもないスノウにとってみれば、見た目を言っているのだと分かっても鳥肌をたてずにはいられない。

完全に硬直したスノウを樂しげに見遣って、エルは柔らかく微笑む。その表情に悪意めいたものは感じられなかった。

「冗談だ。何を神経質になってる？」

「……」

原因から指摘されて、スノウは口を閉ざした。

どうやらエルに自覚はないようだ。或いは、意図してはぐらかしているのか。どちらにしろこれ以上の詮索は無駄だろう。

やれやれと首を振って、スノウは踵を返す。ならば尚更エルにかわる必要はないのだ。よくわからないが、気の済むまでさせておくしかないだろう。

「また散歩か？」

今戻ったばかりだろう、と怪訝な口調のエルである。それに曖昧に頷いて、

「他にすることもないし」

と適当な言い訳を口にする。それは真実ではあったが、本音ではない。観察されている感覚というのは、どうにも居心地が悪いものである。それよりは一人でぶらぶらしている方がまだ気が楽なのだ。「ああ、それなら……これはどうだ」

けれど、エルの方はスノウを逃がすつもりはなかったようで、書類の山から何かを引っ張り出してきた。

「え……」

スノウは気乗りしない様子を隠そうともせず、表情を曇らせる。といつてもネコの姿なのでどの程度反映されているかは本人にも謎だ。

エルが取り出したのは、分厚い装丁の書物だ。元は赤い色の表紙だったのだろうが、年月の重みに耐えかねてか随分色褪せていた。タイトルと思しき文字も、判読不能なまでに傷んでいる。机の上に置いたその動作だけで、もうもうと埃が立ち上った。傷みの激しさは年月のせいだけでもないらしい。

「なにそれ……」

あからさまに嫌悪する様子でスノウが尋ねる。口調は尋ねるといふより非難に近い。

「魔法書だ」

エルはそんなスノウを気にする素振りもなく、上機嫌に言う。

「読んでみるか？ 退屈しのぎにはなるだろ」

「読むって……見てわからないよ」

スノウはため息をついて首を振った。

魔法書というものは、得てして特殊な文字で書かれていることが多い。元々魔法という分野には広く知られることをよしとしない風潮があり、ごく一部の人間にだけその術を伝えてきた歴史がある。

今でこそ魔法兵士だのお抱えの魔法使いだが一般化しているが、長く培われてきた習慣はそう廃れるものではない。

特殊な文字がその名残のひとつだ。端的に言えば、暗号のようなものである。魔法に通じ、その道で学んだ者でなければ読めない。ただびとにとつては、ただの意味不明な模様の羅列だ。例えばスノウに記憶があつたとしても、剣士であるスノウは読めないだろう。魔法がある程度使えるメリルですら読めない筈だ。読むことができるのは、あくまでもその道を専門に学んだものだけである。まして、記憶のないスノウが読める筈もない。

「見てみなきゃわからんだろ？」

だが、エルは首を傾げて不思議そうに言う。

魔物であるエルにはそのあたりの事情はわからないのだろう。特殊文字も人と魔物では違うかもしれないし、もしかすると魔法専用の文字などというものがないのかもしれない。

ならばスノウの消極的な態度の意味がわからないのも、理解できる。

できるが。

結果は火を見るより明らかだ。挑戦するしないの次元の問題ではない。そうは思ったが、手招きするエルを無視して散歩に出るだけの度胸もなかった。

「魔法文字だつたら読めないよ」

読めるくらいなら使えてるよ、とぼやきつつ、スノウはおとなしくエルの手招きに応じる。

ネコの跳躍力で机の上に飛び乗り、古めかしい本に視線を落とすた。

改めて見れば、相当古い本のようなだった。紙はどこどころ黄ばみを通り越して茶色に変色している。そこに黒いインクで文字が流れていた。ミミズののたくったような文字を想像していたが、予想に反してすっかりと形になっている。スノウの記憶にある言語のどれでもない文字だ。勿論、これが魔法文字なのかそれとも魔物特有

の文字なのか、或いは他の地域の言語なのかも、スノウには判断つかなかつた。

「この本、この間地下でみつけてな。初歩中の初歩が書いてあるみたいだし、折角だから苦手を克服しようと思ってきたんだ」

「苦手？」

降ってきたエルの声に、スノウは顔を上げる。エルに「苦手」な魔法があるとは、と意外な気持ちになる。

それへエルは軽く頷いて、

「ああ、こういうのは苦手なんだ」

スノウを指差した。

「は？」

「自分が変化するならともかく、他の対象を変化させるとか……苦手でなあ」

ぼかんとするスノウの前に、溜息をついて述懐するエル。言われたスノウはたまつたものではない。

「ちょ……今頃？」

今頃も今頃。余程でない限り大丈夫、と太鼓判を押したのはこの誰だったか。今更失敗の可能性を示唆されても、スノウにはどうしようもない。なにやら急に息苦しくなってきた気がして、スノウは無駄に喘ぐ。

「今頃だな。ま、成功したからいいじゃないか？」

当のエルは頷いて、何でもないことのようにあっけらかんと言いつ放った。

「いや、成功とか言う前にさ……」

結果がすべてじゃないと思うんだけど、というスノウの精一杯の反論はもごもごと喉の奥に消えた。そんなスノウの様子に頓着することなく、エルは手を伸ばして本のページを繰る。

「頻繁に使う魔法でもないからな、色々忘れたり欠けたりするのが問題で。後はよく使うところで水系の魔法を覚えようかと思ってな」
めくるたびに細かい埃がふわりと舞い、スノウは顔を背けて咽る。

「ああ、悪い」

「いいけど……エル、水の魔法が苦手なの？」

「そうだな。使えないわけじゃないが……あまり得意じゃない」

それよりは火の方が楽だな、と呟いてエルは爪先に小さな炎を生み出す。漆黒の爪に触れるか触れないかの位置で、赤い炎がゆらゆらと揺れている。その色は、エルが指を動かすたびに七色に変化する。指の微かな動きだけで変えているのだと見取って、スノウは純粹に感動していた。口を開け、なんとも間抜けな格好で炎を見つめている。

エルはそんなスノウを一瞥し、再び炎に視線を戻してさりげない口調で続けた。

「お前は確か水系だったな」

ぼん、と放られた言葉。

スノウの心臓が、大きく脈打った。

17 パンドラの箱(上)(後書き)

「17 パンドラの箱(下)」に続きます。

次回更新は12月の10日になります。

17 パンドラの箱(下)(前書き)

後編です。

17・パンドラの箱（下）

何を言われたかわからなかった。

思考より先に体の反応の方が早く、大きく脈打つ心臓の音で自分が動揺していると知った。

漂白された頭の中で懸命に言葉を探し、僅かな間をおいてスノウは答える。

「……なに言ってるの。魔法なんて使えないよ」

心臓の音がやけにうるさい。別に疚やましいことなど何一つないのに、と考えて気づく。この動悸は恐怖だ。スノウは怖れているのだ。

何を、と自問する間にもエルの言葉は続く。

「ああ、知ってる。お前は人間だし」

エルはひとつ指を鳴らす。爪先の炎が跡形もなく掻き消えた。

真紅の双眸が瞬いて、スノウに向けられた。

「勇者はたいした魔法は使えなかった」

スノウの背筋がひやりと冷えた。

その口ぶりはまるで「勇者」を知っているような。

会ったことがあるのだろうか、と考えて打ち消す。魔物の長が「勇者」と面識があるはずがない。

けれどももし、記憶がある頃の勇者を知っていたとしたら？ 知った上で、まるで別人のようになったスノウもまた知った上で、今こうしているのだとしたら？

それは、エルがスノウの記憶喪失にかかわりがあるとは思えないだろうか。

「だがお前は魔法を使った……あれは確かに水系だった」

考えたくない事柄がぐるぐると巡る。二の句が継げないスノウに気付いていない筈はなかったが、エルは淡々と続けている。

「……」

口の中が渴いて言葉がでてこない。纏まらない思考をなんとかか

き集め、言葉を並べようとスノウは必死になる。ここで何も言わずにいるのは不味い気がして、焦燥を募らせる。

何か言わなければ。何か誤魔化す言葉を。

「今なら上手くいくんじゃないか？」

そこにエルの言葉が降ってきた。その口調に変化はないが、内容が著しく予想と違う。

何か恐ろしい核心をついた台詞が来るものと構えていたスノウは、拍子抜けして瞬きを繰り返す。

「……何？」

「聞いてなかったのか？ 魔法が使えたのなら、魔力がない訳じゃないってことだろ」

「う、うん。それが本当なら……」

「なら鍛えればいいだけの話じゃないか」

こんなこともわからないのか、と言わんばかりのエルの口調に、スノウはぱかっと口を開けた。

「は？ 鍛え……？」

「剣と同じだろ。何度も練習しているうちにコツが掴める」

自信たっぷりなエルが言う。考えていたこととのあまりの差に、スノウは混乱する。空回りする頭を軽く振り、必死に考える。

鍛錬でどうにかなる、とエルは主張している。確かに魔法には鍛錬……もとい、ある程度の訓練が必要だというのは常識である。荒削りの才能を、研鑽し磨き上げて初めて「魔法」として力となる。

だが、スノウの場合は少し事情が違う。魔法がある程度使える者が練習するのとはわけが違うのだ。魔力の存在すら自覚できない状態で、闇雲な努力が実を結ぶとは思えない。

「なんだったら教えてやるから練習してみろ」

更の上機嫌で、エルが自ら協力を申し出た。

だが、スノウの方はとてもではないがそんな気分ではない。自分

のあずかり知らないところで発現した魔力によって、どうにも肩身の狭い境遇に置かれているのである。中途半端な魔力ならいっそ消えてくれれば、とすら内心思っているのだから。

「え。いいよ、別に……」

「何言ってる、これでその姿から解放されるかもしれないぞ」

「え？」

エルはごく軽い口調でそんなことを言うが、言われたスノウには訳がわからない。

「以前教えただろう、元に戻る方法」

そういえばとスノウは思い出す。ネコに変えられた当初、元に戻る方法をと迫ったスノウにエルが言ったのだ。

「勇者になれ」と。

即ちそれは、かけた本人であるエルを倒せということだった。ネコに変えられた身で、武器らしい武器もなく魔法も使えない。そのためスノウの中ではそれはすぐに廃案となっていた。だからエルの弱みを握って元に戻すよう脅すしかない、そう考えていたのだが。

「……無理だよ」

魔法を使ったことすら半信半疑なのだ。今から特訓したとしても、エルと互角に張り合えるだけの魔法を使いこなせるとは思えない。

「やってみなきゃわからないだろう。お前はいちいちすぐ諦めるな」

呆れたようにエルが言う。

「別に諦めてるわけじゃないよ、現実的なだけ」

エルの言うことは一理ある。だが、自分を倒すための特訓をしてやろうというその考え方も問題ありだとスノウは思う。

エルには絶対的な自信があるのだろう。スノウがどれだけ本気になるうとも、倒されないだけの自信が。自分とはあまりにも違うその姿に、スノウは虚しくなる。わかりきった現実だというのに胸の中がもやもやして、気づけば苛立った口調で反論をしていた。

「だってこんな状態の俺がいくら頑張っても、エルに敵うわけじゃないか」

「状況が悪いって？」

「そうだよ、こんな姿じゃなきゃ俺だって」

「確か出会った時は人の姿だったと思うけどな？」

それで仲間の後ろに隠れて泣いていた。更にはぼんやりして逃げそびれた。戦闘は仲間任せ、仲間に護られながらの進撃だったのは、城内の魔物の間では有名な話だ。

つらつらと挙げられる自身の行動に、スノウは無言。

「……」

確かにエルと言うことは正しい。今よりいい条件が揃っていても、スノウは同じ選択をしてしまうだろう。つまり「逃げる」という選択を。

「では勇者、もし今お前が元の姿に戻り、その手に剣があればどうする？ 魔物の命ひとつくらい容易く奪えるほどの聖剣があれば？」

エルが長の口調で問いかける。悪戯っぽく輝く真紅の瞳を見返し、スノウは考えた。

ふと、以前にも同じ質問をされたことを思い出す。

城に取り残されてすぐのことだ。あれからまだ一月程度しか経っていないのが不思議だった。まるで、遠い昔のような気がする。

「……逃げる」

それでも、以前と同じ選択しかできない。

その理由はスノウ自身わかっている。エルは単なるヘタレぐらいにしか思っていないだろう。それも間違いではない、悔しいことだが、スノウの中にはもう一つ理由があった。

殺すことが恐ろしい。その対象が強者だとか弱者だとかは関係ない。命あるものを傷つける。命を奪う。その感触が恐ろしい。

たとえ相手が魔物であっても。

かつて、魔物は血に飢えた化け物だと教えられた。それがスノウの生きてきた世界の常識であり、魔物を倒すことが正義だった。それが間違いだとはスノウも思わない。

スノウが出会った魔物はみな好戦的で、闘うことに喜びを見出し

ている。その様は、平穩に生きる人間からすれば「野蛮で狂暴」だと映るだろう。人には理解しがたい魔物の生態。だからこそ、魔物は「悪」の象徴となり、正義を貫くが為に魔物は「心ないただのケダモノ」だと言われる。

けれどそれは、魔物という生物の一端でしかない。

図らずも魔物の城で過ごしたことで、見えてきたことも逆に見えなくなったこともある。

そうして思うのだ。

『魔物も人も、同じ』

黙考する胸に落ちてきたのは、そんな呟き。その簡潔な言葉にスノウは震える。

それはスノウの本心だった。記憶を失ってから何もかもが曖昧にぼやけた世界で、それだけが色鮮やかに胸に浮かぶ。

人も魔物もそう違いはない。それをどこかで……もしかしたら、エルと対峙する前から気付いていたような気がする。

記憶を喪う、その前から。

「どうした？」

ぼんやりとしていることに気付いたのだろう。エルが問いかけてきた。

思わず体を揺らして、スノウは首を振る。

「……別に。やっぱり俺に魔法は無理だよ」

言って、ぱつと踵を返す。この話はこれで仕舞だと無言で訴えた。それが通じたのか否か、机を蹴って床に降りてもエルは特に咎めもしなかった。スノウは止められる前にと急いで部屋を後にする。不自然すぎる退出の仕方だったが、スノウには立ち去るだけの平静を装うので精一杯だった。

問い詰められれば、自分でも何を言うかわからない。相手は憎むべき魔物だというのに。だからそうなる前に、早くエルのいないところへ。

そんな焦燥に駆られて、スノウはエルの前から逃げ出したのだ。

だから気づきもしなかった。

呼び止めることさえしなかったエル。その真紅の双眸もまた、何かを考えるように沈黙の中に揺れていたことを。

濃い霧の向こう、霞を掴むようだった自分の記憶。その糸口を初めて見つけたような気がしていた。

本来ならば喜ばしいことだというのに、胸の中にあるのは喜びとは対極の感情だった。

鍵をかけられた箱の中身。それが、宝物だと無条件に信じる事が出来ない。

その箱の中に納められているものが、怖くてたまらなかった。パンドラの箱。

果たして、今ここにこうしている自分は本当に「自分」なのか。

そう思うと、手繰り寄せた糸から手を放してしまいたくなる。

今のままでもいいじゃないか、と囁く声がある。

記憶を取り戻してどうする？

空白の記憶。そこに埋まっているのは決して優しい記憶ではない。己が己であることを形作ってきた記憶と激情が、そこに眠っている。

取り戻したとして、果たして自分は「自分」でいられるだろうか？

恐ろしいのは、「今」の自分が消えること。

記憶に上書きされて、今の自分が変わることが怖い。

今の己も、この状況も「クライではない」と思える、この自分が変わることが恐ろしい。蘇った記憶と感情に引きずられて、相手を殺そうと思うかもしれない、自分が怖いのだ。

そんな未来を望まない自分だからこそ。

そんな未来を選ぶかもしれない自分だからこそ。
自分が、怖い。

それがきつと、正しい姿なのだとわかっているても。

17 パンドラの箱(下)(後書き)

次回更新は12月17日です。

18・勇者たちの事情（上）（前書き）

スノウがまさかネコにされているとは思ひもしないメリルとフレイ。やっとの思いで王都に戻った二人を待ち受けていたのは、新たな勇者の存在だった。

そして、再びカデイスを目指すことになる。新しい仲間と勇者と共に。

真面目な人間側のお話。

18・勇者たちの事情（上）

赤く、暗い夜の気配を帯びていく空。

風に揺れる木々が刻一刻と闇に塗り潰されていく。けたたましい鳴き声と共に塹^{ひく}へと飛んでいくのは漆黒の野鳥の群れだ。

「この辺りはもう銀の森ですか？」

列を成して飛んでいく野鳥の影を目で追いながら、尋ねるのはリックである。

首の半ばまで伸ばされた、濃い茶色の髪。暮れゆく空を見つめる双眸は、メリルのそれより幾分暗めの翡翠だ。戦場とは無縁そうな、端的に言えば女性受けしそうなその穏やかな容姿を目に留めて、メリルは同じように空を仰ぎながら答える。

「いいえ、まだね。もう少し近くだとは思っけれど」

「へえ、そうなのか。どこでわかるんだ？」

メリルの言葉に身を乗り出して反応したのは、クロスである。

癖のある亜麻色の髪に、青い双眸。その色彩にメリルは一瞬の痛みを覚える。それはクロスに対して失礼なことだとわかっていたら、メリルは思案する様子を装いつつ答えた。

「そうね……なんとなくの雰囲気と、あと街道の具合かしら。銀の森^{セルバ}に入ると、割と荒れ方が酷いの」

わかりにくいかもね、とメリルは付け足して、木立の向こうに見える街道を指差した。

そこは彼らがついさつきまで歩いてきた街道である。綺麗に均^{なら}された路面に、道の左右に並べられた縁石。一見すればごく一般的な街道の姿ではあるが、よくみれば石はところどころ欠けて崩れ、路面もちらほらと草の侵食を受けている。

それもそのはず、ここは旧街道なのだ。

この先にひろがる森が、まだ銀の森と呼ばれていなかった頃に利用されていた街道だ。銀の森の拡大によって人の往来が減少し、更

に大街道が整備されたことで、半ば打ち捨てられた格好になつてしまつた。

^{ブラータ・セルバ}銀の森は、国土の実に半分を占める大森林である。元々はコーダ山脈の裾野に広がる森林のことを指していたのだが、そこが危険な場所だつたこともあり、いつしか「危険区域」という意味合いを持つようになった。そのため、魔物の出没するような危険な森はすべて^{ブラータ・セルバ}銀の森に分類されるようになったのだ。だが危険区域とはいえ、そこには元々の人々の生活が存在している。街や村ごと移住させるわけにも行かず、結局は^{ブラータ・セルバ}銀の森の中に街や村が点在しているのが現状である。そうして行われたのが大街道の整備であつた。

^{ブラータ・セルバ}銀の森に至るまでの大街道をさらに延ばし、森の中に点在する街と村をつないだ。比較的安全と思われる箇所を選び森を拓いていったために、大街道はぐねぐねと曲がり、ともすれば目的地まで倍の日数がかかる場合もある。

カデイスもまた、そういった街のひとつであつた。

^{ブラータ・セルバ}本来の銀の森により近い位置にあるため整備がままならず、大街道を利用すれば一月の道のりが一月半かかることになる。

そのため、カデイスを目指すメルルたち勇者一行と王国軍は、改めて旧街道を進んでいた。

王都バルカイトを発つたのは、一週間ほど前のことだ。勇者を総指揮官とした王国軍は、東に進路をとり大街道沿いに幾つかの街を経由して、^{ブラータ・セルバ}銀の森を前に旧街道へと移行することとなつた。

そうして、うら寂しい旧街道を進む王国軍が、野営の合図をしたのがつい先ほどのことだつた。殆ど人の往来のない旧街道だからと、兵士の大半は街道の上に野営の準備を始める。木立の間に灯る幾つものあかりは、街道から溢れた兵士たちだろう。

クロスを含めた勇者一行もまた、小さな焚き火を前に軽めの晚餐を開いたところであつた。街道に場所がなかつたわけではなかつたが、敢えて木立の中を選んだのだ。その理由は幾つかあつたが、理由はどうあれ少なくともこの方がメルルにとっては気が楽だつた。

「荒れ具合ですか……ここも結構荒れてるとは思いますが……」
首を傾げてレリックが呟く。木々の向こうの街道を見渡す。大街道に比べれば、荒れていると思っても無理はない。

「あくまでも私の感覚だから。人によって感じ方は違うと思うの」
確かフレイはもつと違うことを言っていた気がする、と思い返して、メリルはふと隣に視線をやる。

そこにはいつもいるはずの少年の姿はない。泳いだ視線が捕えたのは、傍の木に立てかけられた荷物だけである。

勿論メリルのものではなく、持ち主は奥の暗がりの中だ。

メリルがそつと窺う先、乱立する木々の奥に細い人影が見えた。単独行動は避けるのが常識だが、フレイはこの場にいることが耐えられないらしい。野営を始めてしばらくすると、「一人になりたい」とひとけのない方に行ってしまった。

本来ならば、仲間としてひき止めなければいけなかった。ここは
ブラータ・セルバ
まだ銀の森ではないが、決して安全ではないのだ。夜盗も出れば野性の獣も出る。最悪、魔物が出ることもそう珍しいことではない。

だが、メリルは何も言えなかった。

弓の名手であるフレイだ。きつと魔物が現れてもなんとかできるだろう、そうメリルは思っていた。

「違うわね……」

思い返して、メリルは胸の内を呟いた。

それは単なる弁解にすぎない。

フレイがいかに強くとも、メリルの助けなど必要ないくらいの猛者だとしても、メリルはフレイを止めるべきだったのだ。王国軍を含めた大所帯で、身勝手な行動は許されない。一人の考えなしの行動が全員の命を縮めることだってある。まして、自分たちがこれから戦う相手はただの獣などではないのだ。

そう、常ならばメリルもそう判断したに違いなかったが。

ただ怖かったのだ、とメリルは述懐する。

フレイに再び激しく拒絶されることを恐れた。フレイの糾弾を受

ける覚悟をしたつもりだったが、それは本当に「つもり」にしか過ぎなかったのだろう。

「どうしました、具合でも？」

いつの間にかぼんやりとしていたらしい。正面に座るレリックが首を傾げて問いかけてきた。

「あ、いいえ、大丈夫。ちよつと考え事をしてて」

慌てて首を振ると、レリックは「そうですか」と微笑む。

いつの間にか話題は別なことに変わっていた。彼らの話題に入れる筈もなく、メリルが何とはなしに二人のやりとりを眺めていると、クロスがおもむろに己の荷物を漁り始めた。

取り出したのは少し小ぶりな乾燥パンである。

旅人は乾燥した食べ物を持ち歩く。保存がいいことと多く持ち運べるのが理由のひとつだ。ちなみに、ついさつき夕食として食べたのも乾燥パンであった。

「お前、まだ食べるのか？」

呆れたようなレリックの問いかけに、クロスは「育ち盛りだ」と反論する。

「育ちざかりって……食うのはいいけどまだ先は長いんだぞ。保つか？」

目的のカデイスまでは、短く見積もってもあと2週間程度はかかる。途上にも幾つか町はあるものの、これだけの大所帯が野営できるようなところはそう多くはない。自然、ここから先の野営は街道上になるのは軽く予測がついた。

「大丈夫だ、問題ない！」

「その自信はどこからくるんだ」

「ここかな」

言つて、クロスはびしつと己の胸を指す。その様子は堂々と誇らしいが、片手にパンを持った姿ではあまり様にならない。レリックが溜息をついてこめかみを揉みほぐす。

クロスは手をかざし、更に言い募る。

「待て、ちゃんと根拠はある。途中幾つか町に寄るから足りなくなったら補給する。それでも駄目な場合は」

「……場合は？」

レリックが促す。その顔には場違いなほど爽やかな笑みを浮かべている。

「レリックのがある！」

クロスの高らかな宣言に、周囲の温度が2、3度下がった。クロスが笑顔を崩さないまま、パキ、と指を鳴らす。

雲行きの怪しさを感じて、メリルは忙しく二人を見比べる。

と、焚火にかけられたままの鍋に目が止まる。焚火を起こしてすぐ、レリックがどこかからか借りてきたものである。水面から僅かに白い蒸気が出ていた。

「えーと、レリック、お湯が沸いてるわよ」

何かするのでしょうか、とメリルは首を傾げてレリックに話しかけた。気を揉むメリルの心中を知ってか知らずか、レリックは愛想のよい笑みを閃かせてメリルに向き直る。

「ああ、忘れるところでした。ハーブティを淹れようと思いましたが、実家から持ってきたのだ、とレリックは荷物から袋を取り出す。

中から取り出されるのは鮮やかな緑色をした葉だ。パンと同じく乾燥させてあるのだが、その色合いは少しも褪せていないようである。

「へえ、ハーブ……」

どうやら危機は回避できたらしいとメリルは安堵して、鍋の中を覗き込む。

レリックの入れた葉が数枚、湯の中で踊っている。湯気にほんのり薬草のような香りが混じる。

「よかつたらメリルさんもいかがですか？」

「……じゃあ、少し頂いてもいい？」

にこやかなレリックに勧められ、メリルもまた自分の水筒から水を供給する。冷たい水の混入に、鍋の中が瞬間静かになる。ぐらぐらと揺れていた葉が、水に沈んでいく様をメリルは見るともなしに

見ていると、クロスが話しかけてきた。

「そういえば、フレイは大丈夫なのか？」

亜麻色の髪は焚火のために幾分明るさを増し、ところどころ金色に輝いている。メリルをみつめた青い目には、心配げな色がちらついていた。

ある程度の事情はクロスもまた理解している。これまでの経緯や、メリルが話して聞かせた魔物の情報と共に、先代勇者の最期もまた伝えられていた。

問いかける声にはフレイを案じる気持ちが込められていたが。

現実には口に込められていたのはパンだった。

折角の気持ちと言葉はパンという障害物に遮られ、ただモゴモゴという音を発するだけである。

肝心な内容はメリルの上を通過し、メリルは首を傾げてクロスを見返すことしかできなかった。

「まったく、そんな食い方誰に習ったんだよ」

レリックがため息と共にクロスの背中を叩く。その衝撃に咽ながら、クロスは涙目で反論した。

「うるせえな！ 腹が減ってんだよ、文句あるか！」

しかし、その言葉もモゴモゴいうばかりで聞き取りにくい。

レリックはクロスの言うことなど予想がついている、といわんばかりに、落ち着いてクロスの背中をさすってやっている。

クロスの咳き込む様子に、誰かが心配してはいないかとメリルは周囲に視線を走らせる。

何せ、今やこの王国軍の総指揮官はクロスなのである。本来ならばこの場に王国軍の尉官がいてもおかしくないのだが、現在クロスの周囲にいるのはメリルやレリックといった王国軍の所属でないものばかりだ。それは立場の違いという理由もあったが、クロス自身が断ったというのが大きい。

というのも、実質軍を動かしているのは王国軍所属の尉官に他ならず、勇者の肩書きはあくまでも名目上のことなのだ。勿論、相応

の権限は与えられているため、その気になれば事実上の指揮官になることも可能である。だがクロスにはその気がなかった。

クロスは『軍人でもない人間が指揮を執るのは悪戯に混乱を招くだけ』と主張して、指揮権を尉官に渡したまま、自身は王国軍に同道しているだけという格好を取っていた。尉官の手にした情報はすぐに入ってくるものの、それに対して命令や指示をすることはない。そのため、自然と「勇者一行と王国軍」という図ができあがり、クロスを含めた4人で固まって行動することが殆どであった。

そうした経緯からか、クロスが盛大に咳き込んでも様子を見に来る兵士の姿は見当たらなかった。

木々の間に見える焚き火の灯りからいっても、そう離れた距離ではない。そもそも森に入るとは言っても、街道がはつきり見える程度の距離である。微かな話し声や、時折ひそやかな笑い声が聞こえるのだから、聞こえないはずはないのだが。

周囲を眺めて首をかしげるメリルの耳に、落ち着き払ったレリックの声が届く。

「だから、腹が減ってるのは皆一緒だってば」

クロスの言葉を正しく聞き取ったらしいレリックが、呆れたように言う。それで初めてメリルは、クロスの言葉の内容に思い至り、

「ああ、足りないわよね。私のでよかつたら……」

何かを勘違いして、自分の荷物からもう一つパンを取り出した。

「ちっ、違う！ 足りる！ もう腹いっぱいだから！」

クロスは慌てて飲み下すと、全身で否定する。しかし急いで飲み込んだために、再び咽ることになった。

レリックが呆れ顔で眺めて、手近なマグに鍋からハーブティを注いだ。

「飲めよ、空食いしてただろ」

言って、レリックはクロスにマグを押しつける。再び湯気がたち始めた鍋から注がれたそれは、ハーブの色見もまだあまり出ていない。お茶というよりはぬるめの白湯だろう。

「そうじゃなくて……ああ、ありがとう」

弁解しようとしていたクロスは、温かい感触にはっとしたようでレリックに礼を言ってお受け取る。そのまま、まだ調子の悪い喉に流し込もうとして。

不意に、クロスが硬直した。

「クロス？」

驚いたメリルが呼びかける。固まってしまったクロスの隣で、レリックも不思議そうにクロスを見遣る。

クロスはぶるりと身震いして、勢いよくレリックを振り向いた。

「おま……これ何だ！ 何飲ませた！ なんか苦……甘っ？」

目を白黒させてレリックに詰め寄る。

「え？ 何ってお茶だよ？ 自家製ハーブティー。といってもまだ味なんてしないだろ？」

殆どお湯だぞ、とレリックは首を傾げる。とぼけているわけではなさそうである。

「ハーブ？ これが？ これハーブなのか？ なんか……なんか辛え！」

クロスは掴みかからんばかりの勢いでまくしたてている。

よほど強烈だったらしい。

まだ殆ど色のついていない白湯状態でその反応なのだから、しっかりハーブティとなったらその味や如何。メリルはうっすら寒気を覚えた。自分も、などと早まったかもしれない。

何やら冷え切った両手をこすり合わせ、メリルは焚火で暖をとる。鍋の中身は努めてみないようにした。

踊る炎を眺めていると、ふと酒場での話を思い出した。

今後の話がしたい、と誘われた王都の酒場。

下町の喧噪が、故郷を思い出して懐かしかったことを思い出す。

案内された場末の酒場の、暖炉の炎が目の前の炎と重なる。

店内は騒々しく、店員も客も隣が何処の誰などと気にする様子はなかった。誰もが楽しく騒ぎ、ともすれば一瞬で喧嘩にも発展しそ

うな、そんな危つい雰囲気か思いのほか楽しかったとメリルは記憶をたどる。

クロスとレリックの騒がしい声が次第に遠のき、焚火の暖かさに思考がほどけていく。うつらうつらとまどろみ始めた自分を自覚しつつ、メリルは膝を抱えなおした。

18・勇者たちの事情（上）（後書き）

次回の更新は、12月24日を予定してします。
クリスマススイブ？ 何それ、美味しいの？

18・勇者たちの事情(下)(前書き)

続きです。

18・勇者たちの事情（下）

王都を出立する、二日前。

メリルはクロスとレリックに誘われて、下町の酒場を訪れていた。メリルが案内されたのは、馬の看板が掲げられた店である。下町独特の喧噪と、乱雑な店内。上品さとはほど遠い様相に、故郷や旅先の様子を重ねて、思わず肩の力が抜けるのを感じた。

クロスがおすすめだという料理は、確かに美味しかった。その店構えや雰囲気から、正直期待していなかったのだが、出てきた料理は素直に美味しいと称賛できるものばかりであった。

「まあ晩餐会の料理とは比べ物にはならないけど」

クロスはそう言って笑ったが、メリルにはこちらの方がずっと美味に感じられた。晩餐会では、碌に味などわからなかったのだ。ただ義務的に手を動かし、咀嚼していたにすぎない。王都に帰還してきて、美味しいと思ったのはこれが初めてかもしれない。

そんなことを思いながら、メリルは二人にカデイスの様子を話して聞かせた。

カデイスへの道程や街の様子、出没する魔物の情報に弱点など。そして、メリルにとって辛い記憶に繋がる、魔物の城の様子についても細かく伝えた。

勇者の詳細については幾つか省略した。仲間の離脱も含め、記憶喪失のことも触れずに、ただ「城からの撤退の際に共に逃げられなかった」と伝えるに留めた。

それに対し、二人は特に詮索することもなく「こちらの情報」だとして国王から軍隊を借り受けること、軍隊の指揮官たちとの会議の詳細をメリルに話して聞かせた。

「実は、二ヶ月前からこの作戦は始まっている」

クロスはそう切り出した。

「……二ヶ月？」

それは、スノウが記憶を失った頃辺りである。そんな時期から「作戦」を立てていたのだろうか。

「そうだ。二ヶ月前　ああ、勿論後から聞いた話だぞ」

おれはまだ勇者じゃなかったし、と前置きをしてクロスが続ける。遡ること二ヶ月前。

王室お抱えの魔法使いから、非公式の「予見」が伝えられた。伝えられたのは「勇者の危機」と「不吉な未来」だった。予見を行った魔法使いは、王室の中でも古参で国王の信頼も厚い。事態は重く受け止められ、国王は重臣を集めて協議した。

勇者たち一行は、無事にカディスにある。下手に介入するより、このまま静観すべきではないかとの意見が多数を占めた。いくら不吉な予見だとしても、その兆候がないうちに軍を動かすのは避けるべきだというのが結論だった。

しかし、調べるうちに問題が出てきた。

問題となったのは、勇者たちが掴んだという魔物の城の情報、その出所だった。

「……それは賞金稼ぎの」

説明の途中で、思わずメリルが口を挟む。賞金稼ぎが快く思われていないのは常だが、助力を頼んではいけないという法はないはずである。

「それはそうなんだけどな、問題はその賞金稼ぎがどこから掴んだかってことだったんだよ」

密偵を放ち、その賞金稼ぎを探し出して接触した。

情報の真偽とその出所を探るため。

だが、賞金稼ぎは何も知らなかった。

「知らない……？」

「ああ、あらゆる方法で問い詰めたらしいけどな。掴んだ情報どころかそれを話したことも何一つ知らなかった」

「そんな馬鹿な！　私も確かに聞いたのに……ッ」

ざわりと背筋を這う嫌な感覚に、メリルは蒼白な顔で声を上げる。

それを冷静な目で見遣って、クロスは軽く肩を竦める。

「まあ、今となつてはわかんないけどな。……とにかく、それで偉いさんたちは慌てた訳だ。勇者がもしかしたらガセネタを掴まされてるかもしれない。それだけならいいが何か他の……極端な話、敵国の罠にでも嵌められているかもしれないってな」

そんなことで「勇者」を失うわけにはいかない。

そこで一月ほど前に、少数の部隊が王都バルカイトを発った。俗に「黒鷲部隊」と呼ばれる、諜報活動や作戦行動に長けた精鋭部隊である。目的は勇者一行との接触と、魔物の城に関する情報の確認だった。

「多分今頃はカデイス周辺に着いてる頃じゃありませんかね？」

レリックは己の皿の料理を片づけながら言う。

「私たちと入れ違いになつたのね」

「ああ。で、その間にこつちはこつちでばたばたしてた。例の魔法使い……遠見ができる魔法使いができてきた」

その魔法使い キュステは「勇者の死が見えた」と言った。

そして、重臣たちの前に召喚されたキュステは、淀みない口調で死の様子を語つたのだ。

もちろん、ただそれだけなら信用には薄い。キュステは重臣の誰もが知らないような、下位の魔法使いである。稀なる力であるが故、眉唾と思う者は少なくない。だが、今回は状況がすべてを裏付けていた。

「先見の予言に、怪しい情報。そこに遠見のトドメがきて、さすがに大臣たちも青くなつた。カデイスに走る部隊からも魔物の情報が入ってくるし」

さすがにこれ以上の静観はできない。その頃には勇者一行の生存は絶望視されていた。予見と遠見にあつたのは勇者の死のみであったが、仲間たちが無事に帰還するとは誰一人思っていなかつたのだ。なにかしらの対策を講じる必要に迫られた。

「そこで、次代の勇者を決めなければという話になつたんです」

レリックの言葉に、クロスは大仰にため息をつく。

「正式に勇者の死が確認されてからで十分だと思っただけだな」

上には上で事情があるらしい、とクロス。次いでメリルをまっすぐ見上げたクロスは、不意に口の端に笑みを浮かべた。

「メリル、おれは代役なんだ」

その表情と言葉に、メリルは気づく。

クロスは気づいたのだろう。メリルが『次代の勇者』の言葉に視線を逸らしたことに。

まだクロスを『勇者』と受け入れられない。否、勇者であること自体はわかっているのだが、メリルの中で折り合いが付かないのだ。勇者と呼んでいたのはスノウだけ。そのスノウの死をわかつてはいても、受け入れたくない。スノウ以外の誰かを「勇者」と呼んでしまふことで、メリルの中でスノウが死んでしまふ気がしていた。

「代役？」

素知らぬ振りでメリルは問い返す。

「ああ。実は、正式にトーナメントをしてないんだ。魔物討伐の名目で軍隊を動かすには、率いる『勇者』が必要らしくて。ま、侵略戦争を疑われないための他国へのアピールだな。

そこでおれに白羽の矢が立った。理由は簡単。おれの祖父が軍隊にいるんだけど、これがわりと重鎮でね。じゃあ都合がいいから孫を出しとこう、みたいなノリで任命されてしまったわけ」

軽い口調でクロスは話しているが、内容は重大である。

軍の重鎮の身内。明かされた身分にメリルは得心する。庶民でこれほど時勢に詳しいのは不自然だったが、それならば納得がいく。

「いわばお飾りですね」

手元のマグを弄びつつ、レリックが軽い口調で言う。食事の方は終わったらしい。彼の皿はいつのまにか綺麗に片付けられていた。

「だな。まあ何かあっても替えがきくからな。軍人の孫なんてある種の身内だもんなあ」

軍人も勇者も、名誉のために命を賭すのは変わらない。ただ、王

にとつての剣であり盾でもある王国軍は気軽に扱えるものではなく、動かすには相応のリスクが伴う。彼らの使命は「王と国を守る」とことであり魔物討伐はその一端でしかない。

対し、勇者は肩書きこそ立派だが、殆どが庶民の出身だ。組織に縛られない独立した存在である為、比較的動きやすく、そのため殊魔物に関しては勇者の判断が尊重される。

魔物討伐に命を賭ける。それこそが「勇者」の使命なのだ。

「そんな……」

思わず、メリルは眉根を寄せて呟く。クロスに不満があるわけではない。クロスを任命した重臣たちの考えに閉口したのだ。

それだけの情報があるならば、待ち受ける壮絶な戦いは予測できるはずだ。魔物に対する偏見が楽観視させたのだとしても、これまでのように簡単にはいかないことは明らかである。だからこそ、王国軍を動かすことにしたのだろう。

そんな戦場に、適切な勇者候補がないという理由で選任するのは。もちろん、そこにはメリルには考えもつかない色々な思惑があるのだろう。

だが、とメリルは思う。

勇者はその任を解かれても相応の地位が約束される。けれど現実には、存命のまま任を解かれた者はいない。勇者は魔物との戦いに、文字通り「命を賭す」のである。

だからこそ、自ら勇者を望む者を募らねばならなかった。命を賭ける、その覚悟が必要だから。そんな覚悟もなしにいきなり戦場に送られるクロスのことを思うと、メリルはいたたまれなくなった。

そのメリルの表情を、クロスは勘違いしたらしかった。

慌てて言い添える。

「あ、勿論ちゃんとするぞ。お飾りだからって手を抜く気はないし、任命されたからには勇者の名に恥じないよう努力するつもりだ」

「こんなんしてますけど、正義感は一倍強い奴ですよ」

頷いて太鼓判を押すレリックと、頼ってくれていいとばかりに胸

を張るクロスを見つめ、メリルは曖昧に微笑む。

こうして話している様子だけでも、十分勇者らしいと思う。何せ、先代勇者がああだったのだから。こんな頼りがいのある会話をした記憶すら、今となれば危うい。

記憶を失う前のスノウは立派だったというのに、思い出すのは記憶を失ってからのスノウばかりだった。渦中にあるときは苛立ちにしかならなかった事柄が、こうして振り返れば懐かしくて仕方ない。そんなメリルを見遣って、クロスは言葉を続ける。

「おれなりに勇者として戦う。この魔物討伐の間だけは」

「え？」

「言つたら、おれは代役だ。他の奴がなんと言おうと、おれはこの魔物討伐が終わつたら任を解いてもらう。勿論地位も返上する。正式に選ばれたわけでもないのに『勇者の器』だなんて思えるほど自惚れてないからな」

命を賭けるなんて今回限りで十分だ、と冗談めかしてクロスが言った。

「だからさ、おれのことにはクロスって呼んでくれよ」

勇者でなく。

言外に告げられた言葉に、メリルは大きく目を瞠った。

クロスはメリルの躊躇に気づいていたのだ。胸の中に残っているであろう葛藤も、おそらくは。

「クロスなんて呼び捨てで問題ありませんよ、遠慮なさらず。

……しかもお前、メリルさんをさりげなく呼び捨てにしてただろ？」

後半は隣のクロスに向けて、レリックが言う。

「ん？ してた？」

「してた。まったくお前は どうして そう粗野なんだか」

「粗野だって？ おれの何処が！ これ以上になく洗練されてんだろ。今日だってちゃんと洗濯済みだぞ？」

己の衣服を引っ張りながら、クロスがそんな自慢にもならない自

慢をする。

「そんなの当然だろ！ ていうかそういう意味じゃないし！」

なぜだか口喧嘩に発展した二人の会話は、そのまま、メリルが仲裁に入る隙もない勢いで繰り広げられていく。

諦めて食事を再開したメリルは、言い合う二人を前に忍び笑いを漏らす。

その様はまるで仲の良い犬がじゃれあっているようで。罵りあっているにもそこに悪意は感じられない。他愛ないやりとりを聞いているうちに、笑いがこみ上げてきた。

彼らと「仲間」になることは、とても楽しいことのような気がした。

まだ心の奥で、勇者の死が重い澱となって沈んでいる。この澱が消えることはないだろう。

けれど。

けれど、私はまだ笑える。

パチリ、と炎の中で薪が爆ぜる。

周囲はすっかり闇に覆われ、木立の向こうにわずかに覗く夜空には星が瞬いている。

「だからさ、フレイだよ。あいつ大丈夫なのか？」

具合でも悪いのではないか、と自身も苦しげな顔でクロスが案じる。騒ぎ過ぎたためか、こころなしくったりしているようである。

「まあシヨックだったのだとは思いますが……ここ一週間ほど彼の声を聞いてませんしね」

レリックの言うように、出立してからこちらフレイは殆ど口を利いていない。自己紹介の際に名乗ったきり、会話らしい会話を避け必要最低限の言葉しか発しようとしなない。

元々が無口な少年ではないだけに、メリルには痛々しくてしかたなかった。

「今は……そつとしておくしかないから」

目を伏せてメリルが言うと、クロスが洗面で頭を掻き繕る。

「あーまあ確かにそうなんだけどなあ……」

「時間が経たないとやっぱり駄目でしょうね。……生きてると信じたいんだらうけど」

二人の言葉にメリルは曖昧に笑って、視線を彷徨させた。彼らが言うような理由だけでフレイが沈黙している訳ではないことは、メリルにはわかっている。フレイは勇者を失った悲しみと同時に、メリルに怒っているのだ。

「けど一人で危険じゃないか？」

「大丈夫だと思うわ。弓も矢も持っていつてるみたいだし」

メリルはフレイの荷物を示して言う。矢筒と弓がなくなっていた。だが、クロスとレリックは心配げな視線を交わす。

「このあたりはもう魔物が出るでしょう」

レリックの問いかけに、メリルは頷く。

「そうね……夜行性のやつが少し」

野営をしているこの場所自体は、まだ銀の森ではない。出るのは

ブラータ・セルバ

主に野生の獣である。だが、近年は魔物の活動が活発化し、銀の森付近の森や村は決して安全とはいえなくなってきた。事実、カデイスからの帰途でメリルたちは幾度も魔物に遭遇している。その殆どが獣に近いものばかりではあったが。

「心配いらないわ、フレイに弓を持たせたら敵なしだから」

それは比喻でもなんでもなく事実だった。外見はまだ12歳の少年だが、その実力は計り知れない。彼が丸腰ならまだしも、弓を持たせれば大抵の相手はかすり傷ひとつつけられないはずだ。

フレイが、常どおりならば。

メリルの心配はその一点だった。今のフレイは普段とは違う。感情の処理が追いついていない状態だ。そんな状態で果たしてまとも

な判断などできるのか。

「はあ……実力のほどは聞いてますが」

それでもやはり心配してしまう、とレリックが頬を掻く。

それに何か安心させる言葉を重ねようとして、ふとメリルの感覚を何かが引つ掻いた。

「……メリルさん？」

「待って」

当惑するレリックに静かにするよう合図し、クロスを見やる。クロスの方もメリルと同じことを感じたらしい。普通の剣ではなく、国王から下賜された聖剣の柄に手をかけている。

「どうやら歓迎の挨拶らしいぞ」

クロスは唇をにやりと歪め、呟く。

途端に、近くの焚火から悲鳴が上がる。続いて上がる複数の声と、剣の抜き放たれる音。

「魔物だ！」

「魔物が出た！」

あちこちで上がる騒ぎに、メリルは静かに立ち上がる。

クロスとレリックもまた、落ち着いた仕草で身を起こして己の武器を手にした。

近くの闇から、気配。

メリルは無言で剣を抜き放った。

18・勇者たちの事情(下)(後書き)

ふいー、間に合った間に合った。

倒木のひとつに腰掛けて、フレイは息をつく。

一人になりたいと告げて、逃げるように飛び出してしまった。

視線を向けると、黒々とした木立の向こうに人影と炎の灯りが見える。森の中でひとりになることは、危険極まりない。何があっても単独で行動してはいけない、というのは当然の掟としてフレイの中にもあつたが、とても耐えられそうになかった。

新しく得た仲間。

勇者、という言葉が耳にする度、辛い記憶と感情が暴れだす。それを無理に押し込めて笑うことなど、フレイには到底無理だった。唇を結んで、喚かないようにするのが彼の精一杯だったのだ。

「このくらいなら、大丈夫」

仲間たちの姿を視認できる距離だ。炎の灯りも届いている。愛用の弓から手を放すことなく、矢筒はいつものように背負っている。何かあれば、すぐに対応できるだろう。

心配そうなメリルの顔がフレイの脳裏をよぎる。

一人になりたいと告げた時、メリルは特に引き止めなかった。気をつけて、と言ってフレイに水筒を渡しただけだった。

顔を見るつもりはなかった。けれど水筒を渡されるとは思っていなかったから、思わずメリルを仰いでしまった。

普段どおりの表情の中で、フレイを見つめた翡翠だけが心配とも悲しみともつかない色に揺れていた。そのとき咄嗟に思い出したのは、あの日のメリルの告白だった。

晩餐会から戻って、二人で話をした。あの時の、メリルの謝罪の声をなぜだか思い出していた。

それから、メリルの顔が目の前をちらついて離れない。

『ごめん』

メリルの声が耳の奥で蘇る。見たわけでもないのに、苦しげに表

情を歪めるメリルが脳裏に浮かぶ。

それが、ただの上っ面な言葉でないことはフレイにもよくわかってきた。メリルは心から謝罪している。それがわかるから尚、フレイは頑なになった。

口を開けば罵る言葉しか出てこない。メリルを必要以上に責めてしまふ。許せない気持ちは変わらないが、メリルの言うことも理解できるのだ。メリルがとつた行動もメリルの気持ちも、頭ではわかる。だからメリルからこれ以上の謝罪は欲しくない。

何も言うまいとして、フレイは口を引き結ぶ。胸のうちに溜めた怒りを、憚ることなく吐き出してしまいたい。

けれどそれはまるで「子供」のようで。

それでも周囲は許してくれるだろう。「子供だから仕方ない」とだがそれは、弓の腕を認められ勇者の仲間となったフレイにとつては屈辱でしかなかった。

かつて、フレイの大人びた態度は「生意気だ」といわれた。国内のトーナメントに出場すれば子供と侮られ、門前払いを食わされたことも一度や二度ではない。誰もがフレイの年齢を通してフレイを見る。フレイは幾度も唇を噛んだ。なぜ自分は「子供」なのか。

そんなフレイへの待遇が変わったのは、トーナメントで勝ち抜き、勇者の仲間となったときだった。初めて自分が認められたような気がした。

けれどそれが表面上だけだということにも、聡いフレイは気づいていた。

『よろしく』

言って笑ったその顔を、フレイは忘れたことがない。真実、彼を子ども扱いしなかったのは、スノウ・シュネー、ただ一人だった。

倒した魔物の屍を前に、スノウが立ち尽くしていた。

カデイスに向かう少し前のことだ。立ち寄った街で魔物被害に困っているという話を聞き、フレイたちは討伐に向かった。魔物が家畜を食い荒らすのだというのが、その内容だった。家畜を襲いに来た魔物を待ち伏せ、討伐に成功した。大型の肉食獣よりさらに二回りほども大きい、3つの目を持つ魔物だった。

血塗れで倒れ、既に動かなくなったその屍の前で、スノウだけがいつまでも動かなかった。他の仲間たちが街に戻った後も尚、スノウは一人残っていた。

暫く黙ってスノウを待っていたフレイだったが、やがて耐えかねてスノウの傍に行った。

スノウはフレイに気づいてない筈はなかったが、振り向くことなく、独り言のようにぼつりと呟いた。

「魔物は悪だ」

強い口調に似合わず、その声が震えていた。

「スノウ……？ どうしたの、寒いのか？」

驚いたフレイが思わず投げた問いかけに、スノウは微かに笑って首を振る。

「ああ……いや、これは……多分、怖いんだろう」

驚いた。稀代の勇者、誰よりも勇敢で強い彼が「怖い」なんて。

フレイの素直な驚愕に気付いたのだろう、スノウがフレイを見て笑った。

「なんて顔してるんだ」

「え……だって、スノウが怖いなんて」

「……フレイはまだ、子供だからな」

そっと伸ばされた手が、フレイの栗色の髪を優しく撫でる。スノウがフレイを「子供」と言ったのはこれが初めてだった。けれど不快な感じはしなかったから、フレイはその言葉をすんなりと受け入れる。

「僕にはわからないのか？」

「……どうかな。ただ、大人になると怖い物が増えるのは確かだけ

ど」

「増えるの？ スノウは何が怖いのか？ 魔物？」

矢継ぎ早な問いかけに、スノウは少し躊躇う素振りをみせてぼつりと答えた。

「……俺は、自分が怖い」

フレイは首を傾げる。魔物ならまだしも、自分が怖いなんて思ったこともない。スノウの言葉が理解できなくて、フレイは更に問いを重ねる。

「自分？ どうして？ スノウはちつとも怖くないよ？」

スノウは暫く視線をさまよわせた。言葉を搜しているようでもあった。

「……上手く説明できないな。そうだな、そのうちにフレイにも分かる時がくるよ」

「僕？」

「そう、きつといつか……いや、わからない方がいいのかもな」

言って、スノウは苦笑した。フレイは意味が分からず首を傾げる。更に何かを問いかけようとして、その先をスノウに遮られた。

「さ、そろそろ帰るか。悪かったな、待たせて」

「え、もういいの？」

そう問いかけたのは、仲間たちが帰ってから目の前の光景に何の変化もみられなかったからだ。フレイにはスノウが何をしたかったのか、何故残っていたのかわからなかった。

訳がわからない、といった様子のフレイに、スノウが微笑む。フレイの栗色の髪をくしゃりと混ぜて、促した。

「ああ、もういいんだ。宿に戻ろう。皆が待ってる」

その表情は優しく穏やかで、先ほどまでの曇った表情が嘘のようだった。いつものスノウだ、とフレイは思う。だから尋ねるのはやめにして頷いた。

フレイにはわからないことばかりだったけれど。

不意に思考がぶつりと切れた。

急速に覚醒していく感覚が、危険を察知する。

顔を上げないまま、フレイは静かにあたりの気配を探る。

目の前の闇の奥に、危険な気配。そのほかにも周囲に複数の気配がある。

微かに漂う獣の匂いに、フレイは覚えがあった。これは一度倒したことのある獣だ。

否、魔物の匂い。

それと気づいた瞬間、フレイの全身が粟立った。

恐怖ではなく、体中の血が沸き立つような感覚。自分の鼓動が鐘のように全身に響く。目の前が赤く脈動し、少し息苦しい。研ぎ澄まされる感覚で魔物の気配を探りつつ、フレイは弓へと手を伸ばす。そつと森の中を窺うと、赤く光る目が闇に幾つも明滅する。こちらを警戒するように、じわじわと闇から這い出してきたのは四足の魔物だ。輝く目は二つきり。大きく開かれた口腔からは涎が糸を引いている。一見すると野生の獣のようだが、相手が軽微な魔法を操ることを、フレイは知っている。

戦闘力は狼とさほど違いはない。注意するべきは軽度の幻覚魔法だ。強烈なものではないが、それでも作り出される一瞬の隙が生死の分かれ目になる。

一つ二つと現れる姿に、フレイは冷静に分析し弓を構える。

ならばその前に倒せばいい。

3本の弓を引き絞り、放つ。

矢は過たず2頭の急所に吸い込まれる。断末魔の鋭い叫びが虚空に木霊する。

その頃にはフレイの引き絞った次の矢が、闇の中の数頭に命中している。

現れた一頭が突然甲高く吠えた。咆哮は大気に振動して周囲に共

鳴する。

脳を揺すぶられるような耳鳴りに、フレイは瞬間息を呑んだ。

魔法！

慌てて狙いを定めるが、僅かに遅れた。

周囲の景色がぐるりと回る。滲む視界に、懐かしい面影がよぎった。

「魔物が怖いのか？」

尋ねたフレイに、スノウは困ったように微笑んだ。

記憶を失い、戻ってきたスノウ。まるで別人だと周囲は囁いた。

自信に溢れた表情は頼りないそれに、強く輝いていた目は追い詰められたウサギのように怯えて落ち着かない。そんなスノウを仲間たちは罵り、嘲った。

フレイは悄然とするスノウを必死に庇いながら、ずっと信じていた。スノウはただ忘れていただけだと。じきに思い出して、かつてのような勇者に戻ってくれると。

けれどそれは、いつ？

じわりと広がる不安に耐えきれず、フレイはある日スノウに尋ねた。いつまでも剣を揮えないでいる、弱虫と陰口を叩かれる彼に。

「そうだね、怖いよ。あの牙とか爪とかもっ」

言って、腕をさする仕草をする。それをいくらかの落胆と、諦めにも似た感情でみつめていると、スノウがぼつりと漏らした。

「……でも一番怖いのは、自分かな」

フレイは驚いた。強かったかつてのスノウも、同じことを言っていた。そのときは、その言葉の意味を聞いてもスノウは答えてくれなかった。大人になればわかる、と言っ

「自分が怖いのか？ どうして？」

かつてスノウにした問いかけを再びスノウに投げかけた。

また「大きくなれば分かる」と言われるだろうか？ ちらりと思
ったが、それでも再び尋ねたのは今度は答えてくれそうな気がした
からだだった。

スノウはそんなフレイの胸中は知らぬげに、首を傾げて言う。

「上手く言えないけど、多分、慣れていくのが怖いんだと思う」

「慣れ？」

「うん。魔物を殺すことに慣れてしまうこと。殺すことを何とも思
わなくなること。平気になってしまいかもしれない自分が、怖い」
言葉を探しながら、スノウが答えた。

「どうして？ いいことじゃないの？」

魔物は悪であり、滅ぼすべきものなのだ。人間に危害を加える、
悪。それを殺すのは当然だとフレイは思う。

そんなフレイにたじろぐように、スノウは視線を彷徨わせる。

「いいことなのかもしれないけれど……俺は」
命を奪うのは嫌だよ。

スノウがぼつりと言った。

『命』とスノウは言った。魔物は悪だと言ったかつてのスノウも、
そう考えていたのだろうか。悪だけれど、命あるものだ。それは
至極当然のことで、だからこそこうして耳にして初めて、フレイに
も意味がわかることだった。

優しい人なんだ、とフレイは思う。

魔物の命を思うことのできる、優しい人。

「スノウは、優しいんだね」

「え？ うーん、どうか、単に臆病なんだと思うんだけど」

頬を掻きながら言うスノウに、フレイは首を振る。

「うっん、臆病じゃないよ。スノウは、勇者だ」

そう、勇者だ。本当に臆病な人間は、討伐に参加したりはしない。
これまで訪れた街を思い出す。大人も子供も、魔物を前に逃げ惑
う姿。フレイやスノウよりずっと大人でさえ、武器をとることはな
い。逃げて、勇者に助けを求める。

それを臆病と思ったことはない。「そういうもの」だと漠然と思っていた。自分たちが「特別」で彼らにはその力がないだけなのだ。だからそうでない人々を守るのが、自分たちの使命なのだと、そう思っていたから。

けれど「特別」である筈のスノウが「特別」でなくなってしまう。そうしてみても思うのだ。特別でなくなったのなら、スノウもまた彼らのように逃げ惑ってもおかしくない。まして、スノウにはかつての記憶がないのだ。魔物を前に怯え、武器を捨てて逃げ去ってもそれは仕方ないことなのかもしれない。

けれどスノウはいつもその場にいる。魔物に怯えて、剣を揮うことはないけれど。それでも、背を向けて逃げ帰ることはない。

震える剣を握り締めて、それでも仲間を置いて逃げることはないのだ。

「スノウは、スノウだよ。僕の勇者だ」

確かに過去とは大きく変わってしまった。フレイが憧れてやまなかつたスノウはここにいない。だが以前と変わらず、彼は優しく強い心を持っている。

フレイがにこりと笑うと、スノウは困惑した表情を浮かべた。

不安定に揺れる、青い瞳。以前のスノウなら、見せなかつた表情だ。

「俺には、フレイの方が勇者に見えるけどなあ」

暫くして、そうスノウが笑った。柔らかな笑い方は、記憶を喪つてから彼が見せるようになった表情のひとつだ。凜々しいスノウをフレイは好きだった。けれど今の優しい彼もまた、決して嫌いではないのだ。

背中に悪寒が走り、無意識にフレイは弓を放つ。

鋭い叫びが耳をつんざく。目前に迫った魔物の爪が、弧を描いてフレイの腕をかすった。

額に矢を生やした魔物がそのまま地面に崩れ落ちていく。

フレイは暴れる心臓に呼吸を乱しながら、肩で息をする。周囲の風景を一瞥し、現実を思い出した。どうやら魔物の放った幻覚に、一瞬囚われていたらしい。

懐かしい、スノウの面影。

幻覚だ、とフレイは自分に言い聞かせる。スノウはここにいない。スノウは、もう《・・》いないのだ。

フレイはすぐさま矢を番え、周囲に放つ。矢を受けた魔物たちが次々倒れていく。吠えようとする魔物を優先して倒しながら、フレイは仲間達の方を確認する。

焚き火は変わらず赤々と燃えている。だが、焚き火をよぎる幾つもの影に、どうやらあちらにも魔物が現れているらしいことを悟る。合流しなければ、とフレイは思う。

この程度の数ならば一人でも片付けられるが、あちらの方にも魔物がいるとなれば話は別だ。こちらの魔物を早く片付けて、仲間たちを助けにいかなければ。

メリルに関してはそう心配しなくてもいいことは、これまでの経験からわかっていた。フレイが案じていたのは勇者一行ではなく、そのほかの王国軍の兵士たちである。

少しでも、人々を守らなければ。

それは、勇者の仲間として旅をするうちに沁みついた感情だった。始めはただ「認めて欲しい」という衝動だけだった。

それが次第に「守らなければ」という気持ちに変わったのは、スノウの影響が大きい。強く、優しく、正しい勇者。彼は常に人々の安全を優先していた。力ないものを力あるものが守るのは当然だと。『自分には魔物と戦う力がある。だから、魔物に苦しめられている人々を守る。』

まっすぐにそう言うスノウにフレイは憧れ、尊敬していた。

けれどそのスノウはもういない。

それを奪ったのは、魔物だった。国王でも、兵士でも、ましてやメリルではない。責めるのはメリルでも自分でもなく、魔物であるはず。

フレイにもわかってしているのだ。魔物の城から逃げ帰ったあの日から、ずっとわかっていた。

何を優先すべきなのか、次はどう行動すべきなのか。

勇者がいないと嘆くより大事なことはある。彼の不在を認め、彼の死を認め、彼ができなかったことを成し遂げること。

ぐ、と喉の奥に何かがかかる。喉が痛くて苦しくて、視界が滲む。頬を伝うぬるい感触に、フレイは自分が泣いていることに気づいた。

スノウはもういない。

「いないんだ」

食いしばった歯の間から、苦しげな声が漏れた。

こんな想いはもう二度としたくない、と思う。

したくないし、誰にもさせたくない。

自分に今出来ることは、一人でも守ること。

フレイは矢を番え、引き絞る。

キリキリと軋む弦の音が、フレイの胸に響く。

目の前の数頭がフレイの矢に倒れ、横倒しになる。形勢不利と看取ったのか、残った魔物たちは怯えるように後退し、フレイが次の矢を番えた時には、踵を返して森の中に走り出していた。

一頭が闇の中に走り去ると、残された数頭もそれに倣う。

瞬く間に魔物たちの姿は闇に消えていった。

静寂に支配されたその場で、フレイはそっと息をつく。どうやらこちらはひと段落したようだ。

心配がないことを確認し、加勢に行くために踵を返そうとして、

「フレイ！」

不意に響いた声に、思わずフレイは顔を上げる。

木立の間からメリルが駆けてくるところだった。

心配そうなその表情は、戦場では滅多にみせないものだ。そしてそんな表情をさせている原因が、自分にあることにフレイは気づく。フレイがいつものフレイであったなら、メリルはこの場で心配などしていない。フレイの実力は誰よりもよく知っている筈なのだから。

「大丈夫」

地面に転がる魔物の死骸に視線を落とし、フレイは呟く。

大丈夫。

ひとつ呼吸をして、確かめる。

もう、責める言葉は出てこない。

「そんな顔しないでよ、僕がこんなやつらに負けるはずないでしょ？」

いつものように生意気な言葉を唇に乗せ、フレイは笑う。久しぶりに動かした顔の筋肉は思うように動かない。上手く、笑えているといい。

メリルは軽く目を睨り、微笑んだ。少しぎこちない、けれどもどこか安堵したような笑み。

そう、僕らはまだ笑える。

19. できること(後書き)

更新停滞な一年でしたが、おつきあいありがとうございました。来年もよろしく願います。

来年の更新は1月6日から7日です！

窓から差し込む月の灯り。

漆黒の夜空にかかる満月が投げかけた光は、石の床を這い、室内を青白く浮かび上がらせる。埃ひとつない床には、うつすらと天井の装飾が映り込み、恰も磨き上げられた鏡のよう。静謐な夜の闇に時が止まったかのような空間が横たわる。

人の気配ひとつしないその空間で、窓にかけられた重厚なカーテンが、不意にゆらりと揺れた。

「想定外ですか」

そこに現れたのは高い人影だ。その面を闇に黒く塗りつぶし、辺りを憚るような低い声で闇に問いかける。視線の先には、カーテンの陰に覆われた、濃い闇。

「……何がだ？」

闇の中から、気だるげな声が応じた。

「そのように書いてあります」

「私の顔に、か。この暗がりでもよくわかることだ。……そうだな、想定外だったことは認めるよ。可愛い弟に一体何が起きたものやら」
ああも変わるとは、と含み笑いを漏らして闇から姿を現したのは、金色の髪をした男だ。漆黒の服に羽飾りのついた闇色の外套^{マント}。耳には鎖状の耳飾り、銀の腕輪を幾重にも巻いている。

ヴァスーラ・バルト。エルの兄にあたる魔物だ。

先だつてエルの城で見せたような上機嫌な様子はなりを潜め、その表情は憂いを帯びている。

「それほどまでにお変わりでしたか」

あまり気のなさそうな問いかけに、ヴァスーラは己の顎に手を当てて頷く。

「そうか、ヘネス、お前は知らなかったな。

エルは『お姫様』だったのさ。幼い頃から闘うことより読書の方

が好きでね。思えばそんなところも母親譲りなんだろうな。貴族にしては大人しい女性だったから」

遠い記憶を慈しむような表情でヴァスーラが語る。

所在なさに室内を歩き、片隅に置かれた白塗りのラウンドチェストの前で足をとめた。円盤状の卓上には白磁の花器が置かれ、花があふれんばかりに活けられている。元々淡い色彩の花なのだろう。月光を受けて紙の様に白い花弁を晒していた。

「エルは儂い花だった。爺どもに護られ、長兄あにに護られ、今は有能な部下に護られている。まるで深窓の姫君だろう？」

口調は穏やかなままだったが、そこに宿る響きは冷たく暗いものに変質していく。

「だが、お前の目から見てどうだ？ 今のエルは姫君か？」

「……いいえ。大人しい方という印象は受けましたが、別段」

姫と形容するほど軟弱そうには見えない、と高い影　へネスは答えた。

「大人しい、ね」

ヴァスーラは鼻で笑う。赤錆色の双眸に鋭い輝きが閃く。

「まあ、望ましい成長ということなのだろうな。兄としては」

溜息をついて、ヴァスーラは花器から花を一輪抜きだした。

「随分遅い成長期だと思えばまあ納得もできるさ。せいぜい盛大に祝ってやるとしよう」

愛でるように、花を手元で弄ぶ。くるくると回る花弁が、夜の中で白い軌跡を描く。

「……触らぬままの方が良かったのではありませんか？」

そんな主人の様子を見るともなしに見ながら、へネスが呟いた。

その不躰な物言いに、ヴァスーラは珍しく苦笑いを浮かべる。

「お前ときたら、本当に遠慮というものを知らんな」

へネスの問いには答えずに、ヴァスーラは片手で花を握りつぶす。くしゃくしゃになった花が、花びらの残骸を撒き散らして床に落ちていく。鏡のように磨かれた床に落ちた花は、花弁が全て落ちき

らないうちに不意に燃え上がった。

青白い炎を吹き上げて、花は瞬き一つほどの間に消えつせる。ちりひとつ、残骸ひとつ残さずに燃え尽きる。

「手筈は」

床から目を上げないまま、ヴァスーラが短く問いかける。

「整えてあります」

「ではそろそろ次の段階に移るとするか。勇者の動きは？」

「出立後一週間といったところです。まだ銀の森にも入っていません」

「まあヒトの足ではその程度だろうな。もう一方はどうだ」

「勇者一行よりは進んでおります。といっても一日二日の誤差ですが……」

ヘネスが淡々と応じるのへ、ヴァスーラは考えるような仕草をする。

「思いのほか遅いな。そう急がずとも良いかもしれんが……中と連絡は取れるのか」

「はい、今のところは可能です」

それにひとつ頷いて、ヴァスーラは言う。

「では感づかれる前に動くしかないな。予定通り部下共を移動させておけ」

「中はどうされます」

ヘネスの問いかけに、ヴァスーラは赤錆色の瞳を樂しげに細める。

「そうだな、存分に悪戯を」

天空に、青白い月が懸かっている。

『まるで青ざめた人の顔のよう』

そう例えたのは誰だったろう、と考えつつ、スノウは窓越しに空

を仰いでいた。

魔物たちは皆寝静まっているようだった。スノウの感じる範囲では気配一つ、物音ひとつしない。

魔物は夜行性ばかりではないと知ったのは、この城で過ごすようになってからの話だ。それまでは、魔物は夜行性が殆どだと思っていた。というのも、これまで対峙してきた魔物は獣により近く、メリルたちと行動していた頃に焚火を前に襲われた記憶が鮮明に残っているのだ。

しかし、現実には少々事情が違うらしい。

エルを含め、ある程度の力を持つ魔物は夜行性を「捨てて」いるようなのだ。元々が夜行性でない者も多いが、本来夜行性である者も、普段はその性質を制御しているという。それは、夜行性といわれる魔物の大部分が魔人や魔獣といった比較的「下等」とされる魔物に多くみられる為だ。そのため、夜行性の性質のままに振舞うことは「下等」であり恥ずべきことだという風潮があるらしい。

『なので幼いうちに制御できるよう訓練します』

そう淡々と講釈してくれたのはスイである。因みにスイ自身は本質的に夜行性ではなく、その教育は受けていないと言っていた。

『エル様は存じませんが、アイシャは酷く苦労したと言っていますね』

スイはそう言って、うつすら笑みを浮かべた。何を思い出したのか少し気になったが、スノウは深く突っ込まないようにした。きつと精神的に楽しいことではない気がする。

現在、城にいる魔物の殆どは昼間の活動が主体であり、夜に休息を摂る。ただ、この城にも夜行性の魔物は数多く存在している。人間でいうところの歩兵に近い存在で、彼らは城の下層部分で生活し、夜行性なりの生活サイクルを行っているらしい。その部分の層と上の層は魔法で分断されており、下の騒ぎが上層で伝わることはない。逆もまた然りである。

そのため、こうして息を潜めてじっとしていも下の喧騒は聞こえ

てこない。窓の外には夜の森と、夜の空。城の中は夜の静寂に満ちている。

そんな中、夜行性どころか本質は人間であるスノウがなぜ起きているのかというところ。

眠れないのである。

ここ数日、眠れない夜が続いていた。単に目が冴えているだけだと思っていたが、それでも連日こうも寝付けなければ、さすがに寝床に入る気も失せてくる。どうせ今夜も眠れはしないのだから、とここ2晩ほど空を眺めてぼんやりしている。上手くいけば、空が白んでくるあたりで眠りに落ちるだろう。

「いい加減寝たいんだけどな……」

眠気自体はしっかりあるのだ。ただ、どうにも頭の奥が覚醒してしまっているような感じがする。

そうなった原因が精神面にあるのなら、心当たりは数え切れない。普通の人間なら、今の状況すべてが精神を病むのに十分な理由である。ただそれがスノウに当てはまるかといわれれば、スノウ自身も首を傾げてしまう。それらが原因なら、何も今頃になって現れるのは不自然すぎる。最近の出来事が関係していると考えるのが妥当だ。

毎晩のように繰り返された問答を、いつものようにぼんやりと繰り返して、ふと思いつく。

エルの視線。

最近感じたことといえばこれしかなかった。だが、その視線がストレスになるかと問われれば、答えは否だろう。エルはただ「見て」いるだけなのだ。その視線に高圧的なものも、敵意も悪意も感じない。同時に、あれほど猫好きな彼にしては不思議なことに、好意の類も感じないのだ。

道端の石を眺めるような、或いは飛んでいく鳥をただ目で追っているだけのような。

「観察……というか、ただ見てるんだよね」

動いているから目が行く。それとも、何かを確かめようと見ているのか。まるで研究材料を見る研究者のような冷静な眼差しで。そこまで考えてはたと気づく。

『研究』

確か以前アイシャたちが言っていなかっただろうか。

『以前は研究に没頭していた』と。

そう思うと、スノウの中で急速にむくむくと好奇心が湧いてきた。エルの研究。その内容がわかれば、あの視線の意味がわかるかもしれない。それにエル自身言っていたではないか。「勇者になれ」と。

「そうか……研究だ。それを掴まなきゃ」

スノウの記憶では、アイシャは『地下の部屋に籠って』と言っていた。あの時は警戒されることを恐れて追究することはできなかったが、地下にも部屋があるのだとなんとなく思ったことを覚えている。

スノウは体を起こすと、エルの書斎机に飛び乗る。

机の上には、無造作に魔法書が置かれていた。古めかしい赤い表紙は、月の淡い光を浴びて一層草臥れて見えた。

『この本、この間地下でみつけてな』

エルの言葉が蘇る。地下にエルの部屋があるのは、間違いないだろう。話から察するに、以前ほど没頭していないとはいえ、研究自体はまだ放棄していないのだ。でなければわざわざ地下に足を運びはしない。

「……って、どうやって行けばいいんだろ」

地下室というならば、当然地下にあるだろう。そして現在地は最上階である。下の階層に移動するには、魔方阵を経由しなければならない。

結局ふりだしか、と溜息をつく和本の埃が舞い上がる。

それにひとしきり咽^{むせ}て、ふと思いついた。

では転移魔法なら？

魔方陣を経由せずに、かつ誰の目にも触れずに地下に移動するには、転移の魔法で直接地下に行くしかない。勿論、魔力がないことも、魔法が使えないこともよくわかつている。しかし周囲は、スノウが魔法を使ったという。スノウにしてみれば到底信じられる話ではないが、試してみる価値はあるだろう。

脳裏にアイシャやスイの顔が浮かぶ。はっきりと示された訳ではないが、彼らが疑っているのはスノウにもわかつていた。

どうせ誰からも信用されていないのだし、とスノウは半ば自棄になり、本に手を掛ける。

猫の手では表紙を開くことすらままならないが、何とか表紙をめくることに成功する。埃と乾いたカビの匂いが鼻腔をくすぐった。

「水の……魔法」

何からはじめよう、と考え、エルという言葉が脳裏で閃く。

水系の魔法を使ったのだとエルは言っていた。ならば、水系の魔法ならば上手くいくかもしれない。それを試してみても、万一上手くいったなら転移の魔法を試してみよう。

そう思いつつも、その実上手くいく可能性など少しも考えていなかった。自身に魔力がないことはこれまでの経験で明らかで、それが今頃になって現れたなどは俄かに信じがたい話だったのだ。周囲が何と言おうとも、スノウにとってはどこか他人事のように思えた。本人に記憶がないのだから当然といえば当然である。

だからこうして魔法書を開いていること自体、半分以上は「遊びに近い。眠りに入るまでの、気を紛らわせる作業。『やっぱり使えない』というそれを、確かめるための作業だった。

下手な期待などしたくない。同時に、あらぬ疑いもかけられたくない。

複雑な感情を抱え、猫の手で懸命にページを繰る。

「水、水……」

なかなか水に関する記述が見つからず、じりじりとしてくる。こんなことなら先だってエルに付箋でもつけて貰うのだった、と思っ

たところで、それらしい文字が飛び込んできた。

「あつた！ええと、『空間から水を取り出すには』」
夢中になつて読み始めて、ふと、スノウは気づいた。

「……読める……？」

呟いて、その事実には愕然とする。

先日、エルに見せられた時は確かに読めなかった。見たことのない文字の羅列。読み方も意味もわからなかったそれが、今はどうしてか簡単に読める。慣れ親しんだ本を読むような気安さで、魔法書の中身がするするとスノウの中に入ってくるのだ。

急に、体が熱くなつた。心臓が激しく脈打つ。

「なに、これ」

全く読めなかった文字が容易く読めるなどと、あり得ない事態だ。湧き上がる動揺と恐怖に突き動かされて、スノウは忙しくページをめくる。

火の魔法。

風の魔法。

召還の魔法。

どのページも簡単に読み解けた。それどころか、読めば読むほど自分の身に起きていることがわからなくなってきた。

文字を追うだけで、具体的なイメージが浮かんでくるのだ。使ったことのない、その感覚すら知らないはずの魔法が、恰もかつて使ったかのような感覚で蘇る。

「っ、やだ！」

思わずスノウは本から飛びのく。

恐ろしかった。知らないはずの感覚が自分のもののように蘇ることが、酷く恐ろしい。

きつと何かの仕掛けがあるんだ、とスノウは自分に言い聞かせる。エルがスノウにも読めるように何かの術を施していったのだ。そうでなければ説明がつかない。

懸命に自身に言い訳をするが、そんな魔法が掛けられていないこ

ともまた、スノウにもわかっていた。

今までならその苦しい嘘でごまかせただろう。だが、どういうわけか「ここには何の仕掛けもない」ということもはっきりとわかるのだ。スノウの直感が、何の魔法の痕跡もないことを告げている。

「なんで……どうして？」

口をついて出た呟きが、滑稽なほどに震えている。

魔法書を読めるのは、その道に精通している者だけ。そう聞いたのは、いつだったか。

メリルとフレイ、そしてまだ他の仲間がいた頃、仲間の誰かが魔法書を持っていた。読んでみると促されたそれは、到底読めるような代物ではなく。ならばと口頭で教えられた呪文も、何一つ反応しなかった。

彼らは首を傾げて、魔力の気配を感じないと言った。

『かつてのスノウには魔力の気配があった。たいそうなものではなかったが、今教えたような魔法は使えた』

そう、彼らは口を揃えた。

けれど、彼らはこうも言っていたのだ。

『かつてのスノウもまた、魔法書は読めなかった』と。

ざわりと、体中の血が引いていく。

記憶を失う前の「スノウ」は、剣も魔法も扱えた。対し、すべてを忘れた自分は、剣も魔法も使えない。

いつか記憶を取り戻すことができれば、すべては元に戻るものだと、スノウは思っていた。記憶も剣も魔法も。

けれど、取り戻したものが「スノウ」にないものだとしたら。

この「自分」は「何」だ。

口の中がからからに乾く。

底なしの沼底を覗いているような気がした。信じていた足元が不安定に揺らめく。水面に浮かぶ像のように、些細な事で正体が定ま

らないほどに乱れてしまう。

いつか見た悪夢が蘇る。自分が見たこともない、自信にあふれたスノウ。夢の中でその澄んだ青い目が冷徹に告げる。

『お前は俺じゃないだろう?』

耳にありありと蘇る、自分の声。否、自分と似て非なるものの声だ。脳裏に鏡像の自分が閃いて、非難するように、糾弾するようにみつめてくる。

「違う!」

「思わず叫んでいた。

「違う……俺は……」

俺は、ダレ?

20・兆し（後書き）

お兄ちゃん出てきました！

「誰？」って言わないであげて！ ほら、若干変態なおにいちゃんだよ！（え

次回は1月13日か14日です。金曜に更新したい……けど、すごく自信ないので（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276h/>

ネコと勇者と魔物の事情

2012年1月6日10時49分発行